

2021 年度 博士論文

ボランティア活動が大学生の自己形成に与える影響
と支援者の役割

～ボランティア概念が孕む矛盾点に着目して～

指導教員

主査：中村陽一教授

副査：大熊玄准教授

立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科

比較組織ネットワーク学専攻

16WM001E 川田虎男

目次

序章 本論文の背景	5
第1節 ボランティア活動の現代的役割・意義	5
第1項 ボランティアの役割と期待	5
第2項 ボランティア活動の教育的意義	6
第3項 ボランティア活動の現状について	10
第2節 ボランティアの概念	11
第1項 ボランティアの原則とそのゆらぎ	11
第2項 概念変化の類型とボランティアの<終焉>	12
第3節 先行研究の整理	13
第1項 学生ボランティアに関する先行研究	13
第2項 先行研究の課題	16
第4節 研究の目的と枠組み	18
第1項 本研究の目的	18
第2項 本研究における分析の枠組み	18
第3項 用語・概念の定義	23
第5節 序章小括	28
第1章 学生ボランティアと活動者への影響	30
第1節 大学生の固有性と自己形成	30
第1項 大学生の固有性とボランティア活動	30
第2項 大学生の自己形成	31
第3項 人格と主体形成	33
第2節 学生ボランティアを巡る状況	35
第1項 学生ボランティアの歴史	35
第2項 学生ボランティアを巡る政策動向	36
第3項 学生ボランティアと「動員」のリスク	41
第4項 大学生のボランティアへの動機と特徴	42
第5項 大学におけるボランティア活動の位置づけ	46
第3節 大学におけるボランティア支援の特徴とボランティアコーディネーターの役割	46
第1項 歴史的背景（大学ボランティアセンターと支援のあり方についての変遷）	47
第2項 ボランティアコーディネーターの機能	48
第3項 大学におけるボランティア支援の特徴	49
第4項 先行研究に見る自己形成を促す支援のあり方	50

第5項	ボランティアの抱える矛盾から捉える先行研究の課題	53
第4節	第1章小括	54
第2章	ボランティア活動による学生自身への影響と自己形成	57
第1節	調査の概要	57
第1項	調査の目的	57
第2項	調査協力者の選定	57
第3項	倫理的配慮	58
第4項	質問項目の内容	58
第5項	調査方法	58
第6項	調査の意義と限界	59
第2節	調査の結果	59
第1項	調査協力者の属性とインタビュー結果	59
第2項	見いだされたボランティアの矛盾	62
第3項	自発性における矛盾と自己形成への影響～受動的態度から自発的・積極的 態度への変容～	63
第4項	社会性における矛盾と自己形成への影響～利他性と利己性の接近と合理的 利他性の発見～	76
第5項	無償性における矛盾と自己形成への影響～ボランティアの態度と資本主義 社会との葛藤と生き方への問いかけ～	89
第3節	第2章小括	96
第3章	ボランティア活動による自己形成を促す支援	99
第1節	学生インタビューから見えるボランティアコーディネーターの影響	99
第2節	調査の概要	101
第1項	調査の目的	102
第2項	調査対象者の選定	102
第3項	倫理的配慮	102
第4項	質問項目の内容	103
第5項	調査方法	103
第3節	調査結果	103
第1項	調査対象者の属性	103
第2項	学生との関係性とコーディネーターとしての姿勢	103
第3項	教育的視点から見る支援の在り方	106
第4項	矛盾したボランティアにおける自己形成と支援の在り方	111
第4節	第3章小括	126
終章	結論と今後の課題	128
第1節	第1章総括～学生ボランティア研究の現在地～	128

第2節	第2章総括～矛盾を孕むボランティアを通した活動者自身への影響～	130
第3節	第3章総括～学生ボランティアの自己形成を促す支援～	132
第4節	本研究全体の総括と意義	133
第1項	矛盾を抱えたボランティア活動が大学生の自己形成に与える影響	134
第2項	大学生の自己形成に寄与する支援のあり方	139
第5節	今後の研究課題と展望	141
第1項	本研究の限界	141
第2項	今後の研究課題	142
謝 辞		143
引用・参考文献		144

序章 本論文の背景

本研究では、ボランティア活動の持つ活動者自身への影響を明らかにすることを目的としている。特に大学生のボランティア活動に焦点を当て、ボランティア活動から受ける自己形成への影響を明らかにした上で、より効果的な自己形成につなげていくための支援のあり方についても検討していく。また、ボランティア概念は、「自発性」「社会性」「無償性」の3原則と呼ばれる特徴があるとされているが、その定義の曖昧さが繰り返し指摘されている。そのため、まず3原則の曖昧さの内実を明らかにし、その上で自己形成への影響について検討を行っていくものとする。序章では、ボランティアの現代的意義と現状について触れると共に、ボランティア概念やボランティア活動を通じた活動者自身への影響についての先行研究の整理を行った上で、改めて本研究の目的と枠組みを明らかにする。

第1節 ボランティア活動の現代的役割・意義

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は、約140万人とも言われるボランティアが駆けつけ、後に「ボランティア元年」とも呼ばれ、日本におけるボランティアに多大な影響を与えている。そのインパクトは、単に多くの人がボランティア活動に参加したという事実だけでなく、「奉仕活動」と呼ばれるような、従来型の福祉分野に特化した制度補完的なボランティアという認識が変化し、自然災害への対応を始め、文化・環境・国際等多様な活動分野の広がりとともに、新しい社会を創る先駆的な役割を期待されるようになった。また、活動者にとっての生きがいや自己実現の機会としても捉えられるようになった。

2011年3月11日に発生した東日本大震災においても、多くのボランティアが駆けつけ、行政では担いきれない重要な役割を担ってきた。本稿ではまず、現代日本におけるボランティアの社会的役割と教育的意義について以下のようにまとめた。

第1項 ボランティアの役割と期待

ボランティア活動の役割を考える上で、永年その現場で先駆的に取り組んできた、2人の論者の言説を確認したい。まず、民間のボランティア団体として、永年ボランティア活動の推進に携わってきた大阪ボランティア協会の理事長である岡本榮一は、その役割を以下の5つにまとめている。¹

- ① ボランティア活動は、高齢者や障害者などが孤立していく社会の中で、活動を通して共生と支えあいの役割を持っている。
- ② ボランティア活動は、行政施策に対して提言したり、批判したり、また行政ができない面を補完したりする役割をもっている。

¹ 岡本榮一、2006「ボランティア=自ら選択するもう一つの生き方」岡本榮一、菅井直也、妻鹿ふみ子(編)『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会、p.15

- ③ ボランティア活動は、さまざまな活動を通して、高齢者や障害者子どもなどの社会的・個人的な人間らしさをエンパワメントする役割がある。
- ④ 活動を通じて、活動しているボランティア自身の経験や学習の幅を広げ、自分が社会的な価値や役割をもっていることを自覚させる役割がある。
- ⑤ ボランティア活動は地域の小さな声を大事にし、連帯の輪を広げ、地の塩となる意味で、民主主義や市民社会創造の基本的な役割を果たしている。

また、阿部志郎はボランティアに期待される社会的役割をまとめ

- ① 地域社会の福祉ニーズに積極的に応えようとする先駆的役割
- ② 公的制度の不備を補う補完的役割
- ③ 制度や行政施設に対して建設的批判をする批判的役割
- ④ 行政施設と住民との間で理解・協力者として活動する架橋的役割
- ⑤ 地域の福祉を守り育てる相互扶助的精神を普及する啓発的役割

の5つをあげている。²

両者に共通しているのは、ボランティア活動が単に行政の補完に留まるものではなく、批判や提言を通して協働関係を築いていくという視点であろう。さらに社会の課題に対して、人と人との支え合いを重視し、関わりの中でその人の持っている力を引き出すことが期待されており、結果的に新しい活動を生み出す先駆的な役割を担うことも期待されている。

さらに、岡本の役割からは、④⑤のように、ボランティア活動の持つ教育的意義についても触れられている。

これらの背景には、急激な少子高齢化の進展により行政だけでは多様なニーズに対応しきれず、マンパワーが必要とされてきたことがあげられる。厚生労働省（当時は厚生省）は、1990年に改正された社会福祉事業法にもとづいて、1993年に「国民の社会福祉に関する活動への参加の促進を図るための措置に関する基本的な指針（社会福祉活動参加指針）」を告示し、中央社会福祉審議会においても「ボランティア活動の中長期的な進行方策について」という意見具申が行われている。これらの動きは、福祉領域に留まることなく、環境・コミュニティ形成など公共的な領域に広く取り入れられ、ボランティア活動が多様な分野において活動を展開していくきっかけとなっていく。

第2項 ボランティア活動の教育的意義

ボランティア活動における教育的な意義については、当初批判的な意見ももたれていた。中山によれば、1960年代後半においては、ボランティア活動は「利他性」を強調し、活動者が何らかの「報い」を求める傾向を戒める傾向にあった。そのことは、同時に偽善的行為との非難を招く要因にもなっていた。しかし、1970年代後半から80年代前半にかけて、「誰かのために活動する」よりも「参加することそのもの」を重視する人々が登場する。

² 阿部志郎、2008『福祉の哲学 [改訂版]』誠信書房、p.99-100

さらに 1980 年代後半から 90 年代にかけて「自分のための」ボランティア活動の意義が確立される。それは、1980 年代後半の教育を目的としたボランティア活動が認められてきた動きとも連動する。結果、「自分のため」が強調され「楽しさ」を意義として持ち出す傾向が見られるようになる。以降「正しさから楽しさへ」というフレーズが繰り返し述べられるようになった。それらの流れの後に起きた阪神・淡路大震災を通じて一般的にも活動者本位の語り方が普及していくこととなる。³

1980 年代には、日本青年奉仕協会（略称：JYVA）を中心に英国のCSV⁴を参考にしつつ主に学校教育で「ボランティア学習」の推進が図られた。長沼はボランティア学習による 3 つの学習内容「ボランティア活動のための学習」「ボランティア活動についての学習」「ボランティア活動による学習」⁵を示し、特にボランティア活動による学習（Learning by Volunteer activity）は、ボランティアの行為の中に学びの要素があり、その中身として「自己理解の促進、他者理解の促進、社会理解の促進、自主性・主体性の涵養、自己肯定感や社会的有用感の獲得がある」⁶とした。

国においても文部科学省（当時：文部省）が 1992 年の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」において、「ボランティア活動の支援・推進」が取り上げられ、生涯学習とボランティア活動の関連について、

- ① 「ボランティア活動そのものが自己開発、自己実現につながる生涯学習となるという視点」
- ② 「ボランティア活動を行うために必要な知識・技術を習得するための学習として生涯学習があり、学習の成果を生かし、深める実践としてボランティア活動があるという視点」
- ③ 「人々の生涯学習を支援するボランティア活動によって、生涯学習の振興が一層図られるという視点」

が示され、「ボランティア活動に内在する教育的意義やボランティア自身の自己実現に向けた学習という側面が注目された。」⁷ことにより、教育分野におけるボランティア活動が積極的に推進されることとなる。ボランティアの持つ教育的な意義の中でも、板東の「ボランティア活動は、それ自体が、社会を主体的に形成する市民としての自己を開発し、自己の実現を図る『学び』としての側面をもつ。特に青少年期においてボランティア活動に取り組むことは、他者との関わり、社会との関係において自己の存在を考え、社会の形成

³ 中山淳雄，2007『ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～』三重大学出版会，pp.148-157

⁴ Community Service Volunteers という名称の、イギリス最大のボランティア推進団体。イギリスのコミュニティケア（地域福祉）の重要な担い手として、障害者、高齢者のサポートしている。

⁵ 長沼豊，1998『ボランティア学習の概念と学習過程』近代文芸社，p.103-110

⁶ 長沼豊，2003『市民教育とは何か』ひつじ書房，p.95

⁷ 原田正樹，2010「ボランティアと現代社会」，柴田憲治・原田正樹・名賀亨編著『ボランティア論 「広がり」から「深まり」へ』（株）みらい，p31

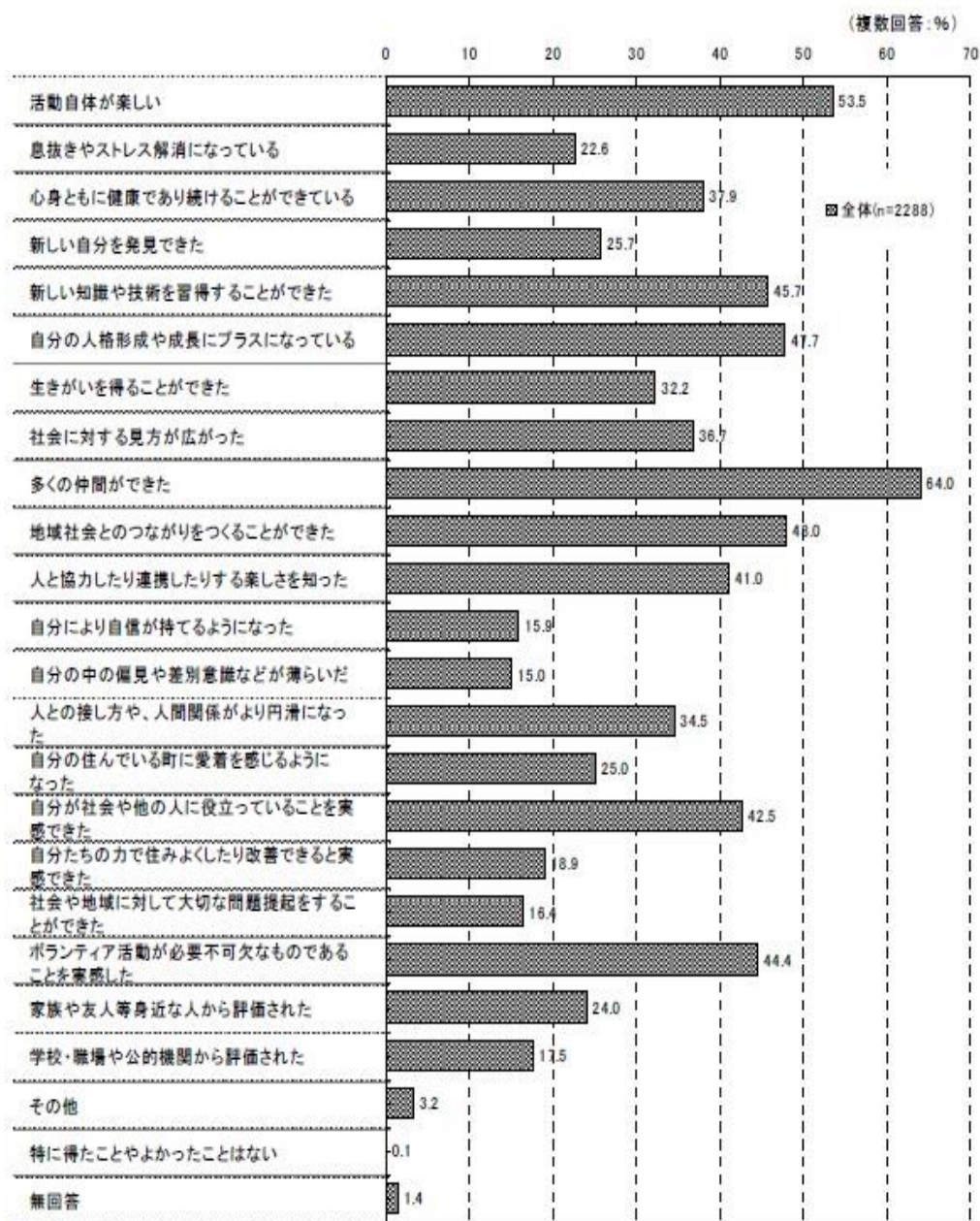
者としての自覚・資質を養ううえで重要な役割を果たす。」⁸との指摘が端的に示すように、シチズンシップ教育の分野において、役割が期待され、国の政策においてもその促進が図られていくこととなる。

生きがいや自己実現など「自分のための」ボランティアの登場は、その後のボランティアの普及に大きな役割を果たす。国の政策においても、その点が強調された施策が展開され、ボランティア活動がより普及していくこととなる。1992年の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」を見ると、「ボランティア活動の支援・推進」において「ボランティア活動そのものが自己開発、自己実現につながる生涯学習となるという視点」が指摘されており、教育を目的としたボランティア活動を肯定的に捉え、その考えのもと施策を推進する姿勢を見ることができる。

全国社会福祉協議会が2009年に実施した、「全国ボランティア活動実態調査」を見ると、「ボランティア活動で得られたこと」という質問項目（複数回答）がある。得られたことのトップは、「多くの仲間ができた」（64.0%）であり、人間関係の形成を評価する意見が多い。しかし、それ以外にも自己形成に関わると考えられる項目として、「新しい自分を発見できた」25.7%、「新しい知識や技術を習得することができた」45.7%、「自分の人格形成や成長にプラスになっている」47.7%、「生きがいを得ることができた」32.2%、「自分により自信が持てるようになった」15.9%、「自分の中の偏見や差別意識などが薄らいだ」15.0%、など、多くの活動者が活動を通じた自身への影響を実感していることがうかがえる。

⁸ 板東久美子、2005「教育におけるボランティア活動の推進」『ボランティア白書 2005 ボランティアのシチズンシップ再考』社団法人日本青年奉仕協会（JYVA）p.77

図表 1 ボランティア活動で得られたこと（全国社会福祉協議会 2009）⁹



ボランティア活動は、本来その焦点がサービス（社会貢献）に充てられ利益を得る対象は対象者ないし、コミュニティであると考えられる。ボランティア活動による教育効果とは、その結果としてまたは副産物的に得られる成果である。仁平はボランティア言説に固有の作動形式を「贈与のパラドックス」¹⁰として示したが、教育効果や自己効用を目的と

⁹ 全国社会福祉協議会，2009「全国ボランティア活動実態調査」

¹⁰ 仁平は、「贈与は、贈与どころか、相手や社会にとってマイナスの帰結を生み出す、反

したボランティア活動は、相手に負債感を与える贈与の性質を乗り越えるには、有効な方法であるとした。¹¹しかし、あくまでも自己完結型の活動であり、障がい者福祉など他者への支援が前提となる活動においては、「自己成長のために我々を利用するのか？」との批判にさらされることになる。その関係を乗り越えるためには、「両者が無理なく活動から利得を得られる制度のもとで可能になる。その方向に向けて規則を変えていく〈運動〉こそが、両者に共通の利得を生み出す。」¹²という仁平の指摘は、ボランティア活動において、教育効果のみを追求することへの問題提起となっている。

この問題提起へのもう一つの答えは、ボランティア活動ではない社会貢献活動を教育プログラムとして位置づけるサービス・ラーニングの導入であろう。サービス・ラーニングは、地域への貢献と学生の学びの双方を目的としている。前述の杉岡らの指摘にもあるように、教育機関である大学においては、正課として単位認定できる教育的な位置づけを持ったサービス・ラーニングへの期待が強い。¹³サービスラーニングセンターを設置する大学¹⁴やボランティアセンターを改名する大学¹⁵も出ており、今後ボランティアの教育効果の研究については、サービス・ラーニングによる教育効果の研究に引き継がれ、より活発化していくことが予想される。

第3項 ボランティア活動の現状について

全国的なボランティアの統計データについては、全国社会福祉協議会が把握している毎年の活動登録者数の情報のほか、内閣府による「市民の社会貢献に関する実態調査」や総務省による「社会生活基本調査」があげられる。本稿においては、これらのデータを元に、ボランティア活動の現状について整理を行った。

まず、全国社会福祉協議会のデータ（ボランティア団体数、団体所属の人数、個人ボランティア人数、総数）からは、調査のスタートである 1980 年において、団体数が 1 万 6 千、総人数が 160 万人だったが、毎年増加をし続け、阪神・淡路大震災の年には 6 万 3 千団体、総人数が 505 万人となっている。その後も増加傾向が続き、東日本大震災が起きた 2011 年に 2 万団体、総人数 868 万人となり、人数的にはピークを迎えている。その後も団体数は増え続けているが、総人数については減少に転じ、2015 年では 2 万 7 千団体、総人

贈与的なものになる。」とし、この意味論形式を「贈与のパラドックス」と呼んだ。

¹¹ 仁平典宏，2011，『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会，p.309-312

¹² 仁平典宏，2011，『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会，p.355

¹³ 杉岡秀紀・久保友美，2007「関西を中心とした大学ボランティアセンターの現状・課題・展望—サービス・ラーニングという新潮流を踏まえて—」『社会科学 79 号』同志社大学人文科学研究所，p.129

¹⁴ 国際基督教大学サービスラーニングセンター（2002 年設立）、桜美林大学サービス・ラーニング・センター（2011 年設立）、立教サービスラーニングセンター（2016 年設立）

¹⁵ 立命館大学 2008 年にボランティアセンターを発展させサービスラーニングセンターを設置

数 711 万となっている。総数だけ見ても、調査開始時から 5 倍以上増加したことになる。ただし、この総数は、あくまでも社会福祉協議会での把握となるため、すべての日本のボランティア人数を把握したものではない。社会福祉協議会は行政単位で設置され、その多くがボランティアセンターを設置しているが、団体名にもある通り社会福祉領域におけるボランティア支援の歴史が長く、近年は災害ボランティアセンターの拠点にもなっているが、必ずしも全てのボランティアを把握しているわけではない。

内閣府による「平成 28 年度市民の社会貢献に関する実態調査」においては、1 年間（平成 27 年）にボランティア活動をしたことがあると答えたものは全体の 17.4%¹⁶となっている。同様の質問項目でも、平成 28 年社会生活基本調査においては、過去 1 年間（平成 28 年）にボランティア活動に参加した数は、2943 万 8 千人で、人口の 26%¹⁷となっている。この数字は 5 年前の調査より 0.3%減少しているが、災害に関係した活動経験者が大幅な減少となっており、平成 23 年（2011 年）の東日本大震災直後との変化がうかがえる。内閣府と総務省の数字の違いは、年によっての変化というよりは、調査対象者の違いが大きいと考えられ、社会生活基本調査における数字がより実態に近いと考えられる。

活動分野においては、市民の社会貢献に関する実態調査とともに、子ども・青少年育成 25.9%、まちづくり・まちおこし 25.5%、福祉・医療・福祉分野が 19.8%、自然・環境保全 19.8%、地域安全 19.3%、芸術・文化・スポーツ 16%、教育・研究 10.3%、災害救助支援 9.8%、国際協力・交流 5.5%と多様な分野でボランティアが展開されていることが確認できる。社会生活基本調査においても活動分野が示されているが、「まちづくり」「子ども」に関する分野が上位を占めている点、活動分野が多岐にわたる点は共通していた。

第 2 節 ボランティアの概念

第 1 項 ボランティアの原則とそのゆらぎ

次にボランティアの概念について整理を行う。ボランティア活動とは、これまでどのように定義されてきたのだろうか。内海は、言葉の意味には、核となる部分と人によって異なった意味を与えられている周辺領域があることを前提に「広く使われるようになり、市民権を有しているといっても、新しい言葉であるボランティアは、核となる部分もまだ明確ではなく、多分にあいまいな部分を残している。その意味で、ボランティアとは、わが国においてはまだ生成途上の概念であると言える」¹⁸と指摘している。ボランティアを示す構成要素として、原則・定義・基本条件等の呼び名があるが、入江はボランティア活動

¹⁶ 内閣府，2017「平成 28 年度市民の社会貢献に関する実態調査報告書」内閣府，p.5

¹⁷ 総務省統計局，2017「平成 28 年社会生活基本調査—生活行動に関する結果—結果の概要」総務省，p.5

¹⁸ 内海成治・入江幸男・水野義之編著，1999「ボランティア学を学ぶ人のために」世界思想社，p. i

の基本条件として「＜自発性＞・＜無償性＞・＜公益性＞」¹⁹を挙げ、どれが欠けてもボランティアとは言えない不可欠な条件であり、この3点が揃っていればボランティア活動と見なせると指摘している。東京ボランティア・市民活動センターではボランティア活動の4原則として、「①自主性・主体性、②社会性・連帯性、③無償性・無給性、④創造性・開拓性・先駆性」²⁰を挙げている。国においては、中央社会福祉審議会地域福祉分科会意見具申において、ボランティアは「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献すること」と定義され、ボランティアの性格として、①自発性、②無給性、③公益性、④創造性を挙げている。²¹土志田祐子は、ボランティア活動に関する戦後の論文を分析し、ボランティアの原則として共通する要素は「①自発性・主体性、②連帯性・社会性、③無償性」²²であることを見いだしている。以上のことから、ボランティア活動とは「自発的な意志を持って、個人・社会への貢献を無償で行う活動」という解釈が共通するものだと理解できる。

しかし、中山によれば「『ボランティア』の定義は常に揺らいできた」²³ものであり、「自発性」の原則は、行政が施策としてボランティアを振興していく中で、「社会性」の原則は、自己効用や教育を目的としたボランティアの登場により、「無償性」の原則は、有償ボランティアの登場により、それぞれ議論を巻き起こしてきた。そのため、現在の定義は、「常に脅かされながらも現在まで存続することができたものに他ならない」²⁴としていいる。本稿においては、このボランティアの持つ曖昧さを前提に、「自主性」「社会性」「無償性」という3原則が実は矛盾した意味合いをも孕んでいることを指摘していく。

第2項 概念変化の類型とボランティアの＜終焉＞

ボランティア概念が時代とともに変化してきたとすれば、どのような時代にどのように変化してきたのだろうか。早瀬は「善行奨励・誘導型」「新しい生き方提案・保障型」「新しい社会創造・支援型」という3つの戦略のあり方を提示している。²⁵中山はこの類型を踏襲しつつ、「社会運動・急進型」という類型を付け加え、「1960年代に『善行奨励・誘導型』であったボランティア活動の勃興から『社会運動・急進型』へと替わっていく。そし

¹⁹ 入江幸男，1999「ボランティアの思想－市民的公共性の担い手としてのボランティア－」内海成治・入江幸男・水野義之編著『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社，p.5

²⁰ 東京ボランティア市民活動センター，「ボラ市民ウェブボランティア活動、4つの原則」<https://www.tvac.or.jp/shiru/hajime/gensoku.html>（参照日 2018.9.10）

²¹ 中央社会福祉審議会地域福祉専門分科会意見具申，1993「ボランティア活動の中長期的な振興方策について」

²² 土志田祐子，1991「ボランティアに関する文献収録・解題ボランティア活動の本質的性格（要約）」p.11

²³ 中山淳雄，2007『ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～』三重大学出版会，p.61

²⁴ 同上，p.61

²⁵ 早瀬昇，1995「ボランティア推進機関の動向－高まるコーディネートの役割」日本青年奉仕協会編『ボランティア白書 1995年版』日本青年奉仕協会

て地域福祉などコミュニティ性が強調され、社会運動が衰退していくにつれて『新しい社会創造・支援型』が現れ、1980年代後半から『新しい生き方提案・保障型』へと変化し、従来には無い活動のあり方が生まれている。」²⁶とした。

さら、仁平は1990年代、ボランティアを特徴づけるとされる概念が、＜交換＞の意味を中核にもつ「互酬性」となることで、カテゴリーの適用可能性を飛躍的に高めたが、同時に、カテゴリーとしての同一性と実定性が融解し、結果的に空虚な記号となっていく点を指摘した。さらに＜交換＞をめざしつつ＜贈与＞の要素がなくなる「ボランティア」は、より＜交換＞の意味を織り込んだ「NPO」という言葉に代替されてゆき、既存の意味論的前提の剥落が見られるのではないかという仮説を立て、これを「ボランティアの＜終焉＞」²⁷と呼んだ。今後も「ボランティア」という言葉は消えることは無いが、「アンペイドな労働力の需給と＜教育＞の意味論とが接触する限定的な領域において、ささやかに生を送っていく」²⁸ことを予言している。

第3節 先行研究の整理

学生ボランティア研究に関わる問題意識と動向として、現在①ボランティア活動を通して対象者・地域への影響②活動者自身への影響（教育効果）③支援のあり方に大別することができる。特に活動を通しての学生の変化、成長、教育効果についての研究が圧倒的に多い。また、国の施策と研究が互いに連動しており、「奉仕活動の義務化」という議論を経て、学生ボランティアの地域貢献への期待とボランティア活動を通して得られる教育効果への期待から、多様な推進策がとられている。

第1項 学生ボランティアに関する先行研究

第2節では、ボランティア概念の定義とそのゆらぎについて整理を行ってきたが、次に本稿の主題とも直接関わる近年の学生ボランティアに関する先行研究について整理を行う。川田はデータベース CiNii において「学生ボランティア」をキーワードに検索し、ヒットした文献(511件)の中から目的に沿った文献を抽出し収集し（検索対象期間は1981年～2017年6月）研究の枠組みについて分類した結果、「1. ボランティア活動を通じた対象者・地域への影響の、2. 活動者自身への影響（教育効果）、3. 支援のあり方の3つの研究傾向を見いだすことができた」²⁹ことを報告しているが、本稿では川田の分類を継承しつつ、さらに検索対象期間を2021年5月（625件）まで広げ先行研究について整理を行う

²⁶ 中山淳雄，2007『ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～』三重大学出版会，p.227

²⁷ 仁平典宏，2011『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会，p.420

²⁸ 仁平典宏，2011『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会，p.420

²⁹ 川田虎男，2017「阪神・淡路大震災以降の学生ボランティア活動の教育的機能に関する研究動向と課題」『Social design review = 21世紀社会デザイン研究学会学会誌9』21世紀社会デザイン研究学会，p.98-106

た。

1. ボランティア活動を通じた対象者・地域への影響

一つ目の研究動向は、学生ボランティアが関わったことによる活動先の対象者やフィールドにおける様々な効果や成果に対するものである。太田は従来の災害ボランティアにおけるボランティアの役割を整理し、東日本大震災における学生ボランティアについて「学生に期待される多種多様な役割」³⁰があることを指摘している。浅野は過疎地域の活性化に取り組む学生ボランティアの活動から、学生の活動が過疎地域にソーシャル・キャピタルとしてどのような影響を与えるかを考察し、「学生が橋渡し型ソーシャル・キャピタルとして、地域に存在する様々なパートナーシップを相互につないでいくことで地域づくりの輪を拡大し、地域の発展に関心のある人や組織を巻き込んでいく」³¹とした。また、李は、小児がん病棟で活動する学生ボランティアの事例を通して、「活動の主体が学生であり、ボランティアという立場だったことで、専門家の限界と彼らの支配による病院の限界を超える活動を展開できたことが明らかになった」³²と指摘している。

これらの成果が生まれる理由や学生ならではの特性とはいかなるものなのかについても研究が進められており、諏訪らは新潟中越地震における学生のボランティア活動から現代の学生の特徴である状況的関心（論理的な一貫性に基づかず語られるところの関心）に注目し、「学生の多くは状況的関心に基づいて災害ボランティアとして活動しており、かつ、その活動は成果を上げていた」³³ことを指摘している。また、石野は学生とボランティアという特異性が地域に対してどのような潜在的な機能を持っているかを考察し、「相手によって様々な解釈・位置づけがされ、変幻自在に役割を変え得る。」「不安定さの中で多様な関係性を生み出すことが彼等（大学生ボランティア）ならではの特出すべき効果かもしれない」³⁴として、学生が社会的に曖昧な存在であるがゆえに果たしうる役割があるという指摘を行った。

³⁰ 太田美帆, 2013「東日本大震災の復旧・復興支援における学生の役割」『玉川大学文学部紀要』第54号, 玉川大学, p. 185

³¹ 浅野英一, 2013「ソーシャル・キャピタルの観点から見た学生ボランティア活動による過疎地域の活性化～和歌山県すさみ町におけるケース・スタディ～」『摂南経済研究』第3巻, 摂南大学, p.94

³² 李永淑, 2015『小児がん病棟と学生ボランティア—関わり合いの人間科学—』晃洋書房, p.188

³³ 諏訪晃一、渥美公秀、関嘉寛, 2005「学生による災害時のボランティア活動と状況的関心—新潟中越地震における fromHUS の活動から—」『ボランティア学研究』第6巻, 国際ボランティア学会, p. 82

³⁴ 石野由香里, 2013『「学生ボランティア」の特異性が地域に対して有する潜在的な機能—ボランティアをする／される関係をズラす効果が地域場の場づくりへ与えた影響—』『生活学論叢』第23巻, 日本生活学会, p.14

2. 活動者自身への影響（教育効果）

ボランティア活動による活動者自身への影響は、学生ボランティア研究において特に注目され、蓄積されてきた分野でもある。特にボランティア活動を通じた学びへの研究が集中している。桜井らは、その効果を①認知発達②専門学習への動機付け③市民性の獲得の3つに分けられるとした。³⁵河井は全国大学生調査の分析から「ボランティア活動に参加している学生、中でもより多く参加している学生が、学生の学習に関するパフォーマンスが高いことが示された」³⁶としている。また、新谷はボランティア活動のどの点が青年を成長に導いたかを分析し、「地域の大人が地域の子どもをかわいがる姿を観察しながら、自分たちも温かく見守られながら同じように実践し、また育てられた過去の自分を振り返る機会を持ったりしながら、自分の養護性や積極性を育んだことがわかった」³⁷としている。批判的な立場からは、山口が、若者のボランティア参加は自分の目的のために他者を巻き込むあるいは、半日常体験に浸るためのボランティアとして否定的にとらえ、そうはならないよう「半返し縫い」³⁸モデルを提示した。

また、東日本大震災に関連した学生ボランティアの教育効果については、小林らが、東日本大震災でボランティア活動を行った学生の経験を量的・質的に検証することを通じて「学生の被災地でのボランティア活動への参加は、被災地の支援への直接的な貢献のみではなく、参加学生自身の人間的成長にもつながっている」³⁹ことを示した他、茶屋道らや市川や川田によっても、教育的意義と学生たちの学びへの影響が指摘されている。^{40・41・42}

3. 支援のあり方

阪神・淡路大震災以降、ボランティア活動による教育効果への注目、また大学の地域貢

³⁵ 桜井政成・津止正敏，2009『ボランティア教育の新地平—サービスマーケティングの原理と実践—』ミネルヴァ書房，p.8

³⁶ 河井亨，2012「ボランティア活動への参加によって学生の学習がどう異なるのか—全国大学生調査の分析から—」『ボランティア学研究』第12巻，国際ボランティア学会，p.100

³⁷ 新谷和代，2016『地域でのボランティア活動を通じた青年期の発達についての事例検討—ある男子学生の「振り返りノート」の分析から—』『帝京大学心理学紀要』第20巻，p.65

³⁸ 山口洋典，2009「自分探しの時代に承認欲求を満たす若者ボランティア活動—先駆的活動における社会参加と社会変革の相即を図る『半返し縫い』モデルの提案—」『ボランティア学研究』第9巻，国際ボランティア学会，p.33-42

³⁹ 小林功英，2014「災害ボランティア経験が持つ大学生への教育効果」『高等教育研究叢書』126巻，広島大学高等教育研究開発センター，p.85

⁴⁰ 茶屋道拓哉・筒井睦，2012「東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義」『九州看護福祉大学紀要』第12巻1号，九州看護福祉大学，p.25-37

⁴¹ 市川享子，2015「東日本大震災復興支援の実践から生まれた学生の学び」『ボランティア学研究』第15巻，国際ボランティア学会，p.143-153

⁴² 川田虎男，2018「震災復興期における学生ボランティアの学びと役割：復興支援ボランティアスタディツアーの取り組みから」『聖学院大学論叢30(2)』聖学院大学，p.151-170

献への期待の高まりから、国による政策的な後押しもあり、大学においてボランティア論やボランティア活動の支援部署の設置が相次いだ。そこに阪神・淡路大震災で実際にボランティア活動に従事した学生たちの現場からの反省も加わり、大学ボランティアセンターの設置の流れに繋がっていく。研究面においても、学生ボランティアの支援の在り方や専門の部署としてのボランティアセンターのあり方についての研究が進められた。杉岡らは関西を中心とした大学ボランティアセンターの調査を行い「大学生への教育効果」「社会・地域とのインターメディアリ機能」「大学の社会貢献」の3点をセンターの存在意義として、今後は教育機関として「サービス・ラーニングの視点を導入することがセンターの存続のためにも必要不可欠な視点である」⁴³とした。

しかし、支援のあり方については、問題点も指摘されている。阪神淡路大震災時から災害ボランティアに携わり研究を行っている渥美は、災害ボランティアが当たり前存在し、効率的にコーディネートされるようになると、被災者を中心に据え、臨機応変に対応するという災害ボランティア本来の意義を見失い、被災者が中心とならず、臨機応変な対応を回避、忌避するような秩序を求める動きが働くとは指摘し、その動きを「秩序化のドライブ」⁴⁴と名付けた。東日本大震災の初動において、「マニュアルへの盲従と、現場に対する想像力の欠如から秩序化のドライブが強力に働き、ボランティア活動の自粛へとつながってしまった。」と指摘している。この秩序化のドライブは、学生ボランティア支援の現場においても同様のリスクが考えられる。本来被災者中心の主体的で臨機応変な学生ボランティアを、大学ボランティアセンターが管理し、その活動を秩序化し特性を奪ってしまうリスクがあるということでもある。学生ボランティア支援において、支援が進んだことによって現れたリスクであり、秩序化のドライブにどのように対応していくのかは今後の課題である。これら支援のあり方については、本稿の目的である「大学生の自己形成に寄与する支援のあり方」にもつながる議論である。

第2項 先行研究の課題

多くの研究において、「ボランティア活動によって教育的効果がある」という報告がある一方、ボランティア活動によるマイナス面の影響やリスクについての研究、考察は少数にとどまっている。例えば、中野は「ボランティア活動というのは、国家システムを越えるというよりは、むしろ国家システムにとって、コストも安上がりで実効性も高いまことに巧妙なひとつの動員のかたちでありうるのである。」⁴⁵として批判を行っているが、学

⁴³ 杉岡秀紀・久保友美，2007「関西を中心とした大学ボランティアセンターの現状・課題・展望—サービス・ラーニングという新潮流を踏まえて—」『社会科学』79号，同志社大学人文科学研究所，p.129

⁴⁴ 渥美公秀，2014『災害ボランティア 新しい社会へのグループ・ダイナミックス』弘文堂

⁴⁵ 中野敏男，1999「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」『現代思想』27巻5号，青土社，p.76

生ボランティアが行政や大学にとって都合のよい労働力や広報ツールとして利用されてしまうリスクがあるのは明らかである。そのような、視点で現在推進されている学生ボランティアの推進施策についても再評価すると共に、現場レベルにおいてはボランティアセンターや専門職としてのボランティアコーディネーターの役割と合わせてどのような支援が必要であるかの議論を深める必要があるだろう。

また、学生自身への影響への研究については、1 ヶ月から半年程度と比較的短期間の活動についての研究が多く、調査のスパンも限られているものが多い。そのため、より長期的な調査により、スキルの獲得に留まらず、キャリア形成や生き方について等、将来にわたる影響についても研究していくことが必要であると考えられる。これら先行研究から見いだせる課題や見落としとしてきた視点について、以下のように整理を行った。

(1) ボランティア概念の曖昧さ

多くの研究において、ボランティアという言葉の曖昧さは指摘するものの、最終的には自発性・社会性・無償性という原則を前提としてボランティアを捉え論じている。しかし、実態としてのボランティアは、必ずしも原則通りでは無いため実態をつかみ切れていないところがある。

(2) ポジティブな面のみの効果に留まる

第 1 項で指摘したように、学生のボランティア活動先の対象者や地域に対しての影響、また活動者自身に対する教育効果等「ボランティア活動によってポジティブな効果がある」という研究報告が多数存在する一方、ボランティア活動によるマイナス面の影響やリスクについての研究、考察は少数にとどまっている。

(3) 短期的な調査

学生自身への影響への研究については、1 ヶ月から半年程度と比較的短期間の活動についての研究が多く、調査の期間も限られているものが多い。そのため、ボランティア活動が実践者のその後の人生に及ぼす影響等、長期間にわたる変容を追跡した研究がほとんど存在しない。

(4) 自己形成につながる支援の在り方という視点の欠如

阪神・淡路大震災以降ボランティア活動の支援に関わる実践・研究は日本ボランティアコーディネーター協会等を中心に取り組みされてきた。しかし、これらの研究の多くは、ボランティア活動が活動しやすい環境づくりやより効果的な活動につながるための支援という視点で行われてきた。そのため、学生の成長につながる支援のあり方という教育効果と支援のあり方についての具体的な内容に踏み込んだ研究はほとんど行われていない。

第4節 研究の目的と枠組み

第1項 本研究の目的

ここまで本研究に関わる、ボランティア概念と学生ボランティア、特に活動者自身への教育効果と支援のあり方における先行研究の整理を行ってきた。ここで改めて、先行研究の課題を受けつつ、本研究の目的について述べたい。前述した通り、ボランティアという言葉は、その意味を時代と共に変遷させ、揺らぎながら存在してきたことが分かる。その特性として必ず提示される、「自発性」「社会性」「無償性」の3つでさえ時代と共に揺らいでいる。

しかし、学生達はむしろこのボランティアの持っている「曖昧さ」故に葛藤し、成長・自己形成を行っているのではないだろうか。さらにボランティアの曖昧さを考察すると、ボランティア概念が孕んでいる矛盾点に気づくことが出来る。ボランティアを単に狭い原則論にとどめるのではなく、あえて矛盾を孕むものとして定義づけることで、よりリアルなボランティアの姿、そしてそこに関わる学生達の成長や自己形成の姿が浮かび上がってくると考えられる。そこで、本研究では以下の2点について研究を進めていくものとする。

- (1) 矛盾を抱えたボランティア活動が、活動実践者である大学生の自己形成に与える影響を明らかにする

ボランティア活動の抱える矛盾を整理した上で、それが活動実践者である大学生にどのような影響を与えるのかについて検討を行う。単にポジティブ・ネガティブという二項対立ではなく、ボランティアが抱えている矛盾によって生じる影響から、自己形成への流れを捉えることを目的とする。

- (2) 大学生の自己形成に寄与する支援のあり方はどのようなものを検討する

矛盾を抱えたボランティア活動による自己形成の在り方を確認した上で、それらの自己形成が促進される学生ボランティアの支援の在り方について、検討を行う。

第2項 本研究における分析の枠組み

本稿では、単にボランティアの定義は曖昧さを持つことを指摘することに留まるのではなく、「矛盾を孕んだもの」として捉え直したうえで、それらの矛盾を孕んだボランティア活動が大学生の自己形成に与える影響について研究を行っていく。では、「ボランティアの持つ矛盾」とはいかなるものであろうか。本項では、ボランティアの抱える矛盾点について中山の示した「浸食された『ボランティア理念』」⁴⁶の議論を参考にしながら整理し、それ故の学生ボランティアへの影響についての分析の枠組みを提示する。

1. 自発性のもつ矛盾

自発性はボランティアという言葉の語源とも関わる重要な要素とされている。当初

⁴⁶ 中山淳雄, 2007『ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～』三重大学出版会, p.92-177

volunteer という言葉には名詞として「有志者、志願者、志願兵」、動詞として「自ら進んでする」との意味があるのみで、社会性や無償性等の要素は後から加わったものである。日本においては、福祉は全て行政が担うとされていた時代にあつては、いかにボランティアの自発性を守るかとの視点から、行政関与の全面的な肯定・否定という葛藤を持っていたが、その後行政の限界が明らかになった 1990 年代以降、互いの役割を認め「協働」していくという方向性となり、現在に至っている。しかし「国家システムが主体を育成し、そのようにして育成された主体が対案まで用意して問題解決をめざしシステムに貢献するという（アドボカシー型の市民参加）、まことに都合よく仕組まれたボランティアと国家システムの動態的な連関である。すなわちボランタリーな活動というのは、国家システムを超えるというよりは、むしろ国家システムにとって、コストも安上がりで実効性も高いまことに巧妙な一つの動員の形でありうる」⁴⁷との指摘もあるように、自発的であるが故に動員に回収されるという危険性も持っている。

(1) 自発性×受動性という矛盾とその影響

自発性が「他人から指示や援助を受けることなく、自ら率先してやるべきことを行う態度や性質」だと考えると、果たしてボランティアを行う人の中で純粋に他者から援助もなく、自ら率先して活動に取り組みを始めた人がどれだけいるのかと疑問が残る。この点について、入江も「＜自発性＞を厳密に限定してゆけば、残るのは、＜まったく何の理由もなく行われる行為＞とすることになってしまうだろう。しかし、われわれの行為が何の理由も持っていないとすることはあり得ないし、また仮にそのような行為があるとしても、それはおそらく非常にまれな状況に置ける非合理的な行為でしか無いだろう。」⁴⁸と指摘している。むしろ、多くの学生にとってボランティア活動を始める理由は積極的な自発性ではなく、「学校が推奨していたから」「家族や友人が関わっている団体だったから」「その団体にお世話になったことがあるから」等、やや受動的と考えられる消極的な理由や中には、「毎年のものだから」「お付き合いとして」「義務的なもの」とそもそも自発性と言うには真逆な所からスタートしている者も一定数存在している。自発性はむしろ活動を通して結果として育まれていくとも考えることも出来るかも知れない。

学生の成長や自己形成を考える上では、ボランティアを単に自発性のある活動と限定し、学生の自発性を前提として捉えるのではなく、「自発性×受動性」という矛盾を抱え、その中で葛藤し変化する存在として捉えることで、学生ボランティアのリアルな姿を見いだせると考えられる。

⁴⁷ 中野敏男, 1999「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」『現代思想』27 巻 5 号, 青土社, p.76

⁴⁸ 入江幸男, 1999「ボランティアの条件」『ボランティアを学ぶ人のために』世界思想社, p.6

(2) 自発性×強制性という矛盾とその影響

学生ボランティアの特徴としてその多くは 4 年間という限られた学生生活の中で活動を展開するため、世代交代が絶えず行われている。仮に代表になったとしても、1 年ないし 2 年で世代交代が行われ活動を継承していくことになる。限られた時間の中で、自分達らしい活動を展開することを望みながら、結局は前年度の活動を踏襲し、継続させることで精一杯である場合も多い。さらに、活動経験の未熟さから、教員や活動先からの指導・依頼に対して、それを義務として捉え活動に当たる学生も一定層存在する。さらには、福祉や教育分野において、実習の前段階として授業の一環として、もしくはゼミ等により強制的にボランティア活動に取り組まざるを得ない学生も存在する。そもそも、自発性というボランティア活動の定義からすれば断ればよいという判断やボランティアではないとすることも可能であるが、この「自発性×強制性」という矛盾が学生自身にどのような葛藤を生じさせ、影響を与えているかについても明らかにしていきたい。

(3) 自発性×支配性という矛盾とその影響

池田は、第二次世界大戦前後のナチスドイツの「労働奉仕」や日本の「満蒙開拓団」「勤労奉仕」を例に「ボランティアとファシズムは、歴史の中で切っても切れない関係を与えられてきた事実」⁴⁹があるとし、その特徴を「自発性と社会貢献の対象をみずからの自由意志によって選ぶことは出来ず、国家によって設定された舞台の上で、国家が重要とする任務を果たすもの」⁵⁰に変貌したことを指摘している。日本やドイツがその後どのような歴史を辿ったかは周知のことであるが、その担い手である国民が自発的にその事業に参画しているという事実はボランティアを考える上で重要な指摘である。池田は、その背景にボランティアの備える「正しさ」があるとし、「正しいことを行っているとき、彼女には、立ち止まって周囲を見回し、自分を省みる必要も無かった。正しいとされていることを行うとき、彼女は、その自分の行いがこの現実の中でどのような意味を持つのか、この現実の中に生きる誰にとって具体的にどのような意味を持つのかを、改めて問うまでも無かった。」⁵¹とその危うさを指摘している。

このようにボランティアの性質は、時として国家政策に対して融和し、その過ちを自発的に助長しうる危うさを孕んでいることが分かる。現在教育政策においてボランティア活動が推進されるが、このような政策の背後にも支配の構造のリスクがあると考えられる。学生ボランティアの取り組みとこの矛盾が実践の場においてどのような作用し、葛藤を生むのかについても慎重に捉えていきたい。

⁴⁹ 池田浩士, 2019『ボランティアとファシズムー自発性と社会貢献の近代史ー』人文書院, p.17

⁵⁰ 同上 p.115

⁵¹ 同上 p.285

2. 社会性の持つ矛盾

社会性の原則は、自発性や無償性と比べ、「奉仕性」「利他性」「連帯性」「公益性」等、他の言葉に言い換えられることも多いという特徴がある。社会性のもつ矛盾点には、「自発的活動を『教育』することの矛盾」⁵²と社会性の中に含まれる「利他性と利己性の矛盾」が挙げられる。前者への批判は「本来他者のために行うべき活動を活動者自身への教育効果という副次的な目的のために手段化している。」⁵³という指摘がある。この矛盾点については、後に指導的側面のある「教育」から主体性の担保される「学習」へのロジックの転換が図られ、自発性を担保した教育領域ボランティアとして整理されることとなる。また、後者においては本来「他人のための」のボランティア活動であるはずが「自分のため」の活動としても成立しているという矛盾である。1960年代には「他者のための活動」という「利他性」が厳守されていたが、1970年代からは「自分のため」のボランティア活動参加者が登場し、80年代後半にはボランティアを通して「学ぶ」ことへの肯定的評価と相まって、「自分のため」のボランティアも肯定的に評価されるようになった。この傾向は1995年の阪神淡路大震災におけるボランティアの広がりにより、さらに多くの人々に支持され一般化されていった。

(1) 社会性（利他性）×利己性という矛盾とその影響

「他者のためのボランティア（利他性）」と「自分のためのボランティア（利己性）」の矛盾点は、特にボランティア活動を成長の機会としてとらえる傾向の強い学生においては、重要なテーマとなっている。自分の成長のための手段として取り組んだボランティア先で、対象者から「私たちはあなたたちの自己満足と成長のための道具では無い」と指摘され現実を直視させられる学生、また少しでも役に立ちたいと思い訪れた被災地で何一つ満足なことが出来ず、逆に被災者の方々の笑顔に勇気をいただきこれでいいのかと悩む学生など、利他性・利己性という狭間にあって葛藤する学生ボランティアは多い。結果的に「情けは人のためならず」等、利他性と利己性が循環して繋がっていることや、自分と社会との繋がりの実感、さらにはそもそも利他性とは何かという根源的な問いや学びにつながる機会となることが考えられる。

(2) 社会性（公益性）×私益性という矛盾とその影響

利他性と利己性は、主として活動者自身の動機に関わる矛盾であるが、活動の対象について抱える矛盾も存在する。公益性とは通常「不特定多数の利益」と考えられ、特定個人を対象とは考えない。しかし、「私的な個人や集団の利害と厳密に区別されるような公共

⁵² 中山淳雄，2007『ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～』三重大学出版会，p.139

⁵³ 中山淳雄，2007『ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～』三重大学出版会，p.144

の利害は存在しない」⁵⁴との指摘もあるように、本来公益と私益を厳密に区別することは困難である。この点について入江は「ボランティア活動は、公益と私益の境界領域に関わる場合が多くあり、何が公益性を持つか、何が公共性を持つか、ということの境界の再吟味や修正を社会状況の変化にいち早く対応しつつ行うという機能を果たしている」⁵⁵と指摘している。

自分達は一体何の役に立っているのか？それが社会にとってどのような意味があるのか？そのような問いを持つ中で、そもそも公益性とは何かという市民教育としても重要な視点を学び取る時間になっていくことが考えられる。

3. 無償性の持つ矛盾

ボランティアの無償性に関わる矛盾としては、当然対義語となる「有償」に関わる矛盾が生じる。無償性に関わる議論では、「そもそも無償とはどの範囲か？」「無償性を前提とするボランティアに有償ボランティアという言葉はそもそも成り立つのか？」といった実務上の整理が行われてきた。しかし、無償性の抱える矛盾とは、資本主義社会における無償活動という軸で捉えることで、また違った矛盾があると考えられる。

(1) (無償の) ボランティア×有償ボランティアという矛盾とその影響

ボランティアをその原則の通り、「無償で行う自発的で社会的な活動」とするのであれば、有償ボランティアとは、「有償かつ無償で行う自発的な社会的な活動」となり、2つの言葉は互いに打ち消し合うまさに矛盾のある言葉となる。歴史的に見れば、1980年代在宅福祉サービスが進むに連れて、主として活動の継続性の担保という観点から、費用弁償だけでなく、一定の報酬を受け取る有償の活動が増加し、そこにふさわしい言葉が無かったことにより、有償ボランティアという言葉が使用されるようになった。そのことにより、無償性に代わり互酬性というお互い様・支え合いの観点からボランティアを捉え直す考え方も提示された。現在においても、この有償ボランティアを広義のボランティアとして捉える考え方と、無償性ではなく非営利性として一定の報酬を受け取ることに對して矛盾の無い、市民活動として捉え直す考え方がある。

しかし、本稿の主な研究対象である学生ボランティアでは、学習支援等一部の活動においては有償ボランティアが行われているが、必ずしも主たる課題にはなっていない。復興支援に関わる活動においても有償ボランティアとして関わる学生は多くない。交通費や宿泊費等の活動に当たっての実費支援を受けることは多くあるが、そのことに葛藤を感じる学生も見受けられないことから、有償ボランティアの持つ矛盾については、本稿の主要な

⁵⁴ 入江幸男, 1999, 「ボランティアの条件」『ボランティアを学ぶ人のために』世界思想社, p.10

⁵⁵ 入江幸男, 1999, 「ボランティアの条件」『ボランティアを学ぶ人のために』世界思想社, p.10

テーマにはなりづらいと考えられる。

(2) 資本主義社会における無償の贈与という矛盾とその影響

私たちの生きている社会は資本主義社会と言われている。それは、自由競争により利益を追求していく社会とも言い換えられる。しかし、ボランティアの無償性は、この資本主義の考え方とは対立する関係にある。そのことを近藤は「ボランティアは、資本制をふまえながらも、これをささえる等価交換・私的所有のエゴイズムとは、その活動形態においては、まるで反対となる。等価交換原理を無視して、利他的に自己の労働力を贈与するのである。」⁵⁶と端的に指摘している。等価交換を前提とする現実社会においては、無償の贈与は偽善的行為と見なされることもあると考えられる。しかし、学生の自己形成として考えるのであれば、大学を卒業しこの利益追求の社会に飛び出したときに、この矛盾と正面からぶつかることになると考えられる。特に営利企業では、よりその傾向が強く働くため、他者のために無償で活動を行ってきた学生にとって、お金のために働き、相手から金銭を得るということは、時として大きな葛藤を生むと考えられる。学生時代熱心に活動を行っていた学生ほどこの葛藤は大きくなることが想像できる。

第3項 用語・概念の定義

ここまで本研究において核となるボランティア概念と先行研究、本研究の目的について取り上げてきたが、本項では研究を進めていく上で関連する用語や概念について触れ、定義していきたい。

1. 転機

人生において、何かの出来事を経て、それまでの自分とは大きく変化をすることがある。それを「転機」と呼ぶが、杉浦は大学生の自己形成における転機の役割に注目し調査を行っている。その結果、転機の意味として、以下の2点を見いだしている。⁵⁷

- ① 転機の物語の生成が変わらない自分を変え、自分の成長を見ることや今の自分を肯定的に見ることを可能にする
- ② 転機による変化の特徴が、結果的に彼らがどのように成長するのかについての1つの発達理論を示している

さらに、転機を語ることの意味として以下の4点を挙げている⁵⁸

- ① 転機の物語の生成が変わらない自分を変え、自分の成長を肯定的に見ることを可能にする。

⁵⁶ 近藤良樹, 2000「ボランティアの社会的意味論—現代の菩薩行の功罪—」『HABITUS 通巻8号』西日本応用倫理学研究会, p.1-18

⁵⁷ 杉浦健, 2001「自己評価を規定する自己とそれに関連する大学生的文脈」溝上慎一編『大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—』ナカニシヤ出版, p.153-155

⁵⁸ 同上, p.32-52

- ② 転機のお話をすることで自分が変えたい・変わりたいと思っている点が変わる
- ③ 人は転機によって変わったと思うことでよりいっそう変わることができる（主観的な成長が客観的な成長をもたらす）
- ④ 私たちの成長は転機という言葉によって社会的に構築されている

また、転機の自己形成において果たす役割について「人は、転機を語ることによって、納得して自己の成長を認識することができる。そして、その主観的な成長の認識は、自己の行動を変える力となり、客観的な成長をももたらす」⁵⁹とした。具体的な調査では、約69%の調査対象者が転機を経験したと報告し、そのうちの90%が肯定的変化を示しており、転機となった出来事・変化の特徴については、「人との出会い」「受験・浪人」「人間関係のもめごと」の出現率が高かった。その中でも「人との出会い」は突出しており、全体の約20%を占めていた。⁶⁰多くのボランティア活動は、人との関わりによって成立しており、活動を通して、多種多様な人との出会いがあることが多い。そのため、ボランティア活動を通じた自己形成においても、この「人との出会いによる転機」の役割が働いていることが予想される。すなわち、ボランティア活動を通して、多様な転機に遭遇することで、自己形成を図っていくことが考えられる。第2章のインタビュー調査においては、学生ボランティアの転機にも注目しながら、自己形成への影響を捉えていく。

2. 役割モデル（ロールモデル）

人は人生において、他者のポジティブな面やネガティブな面を知り、影響を受けながら変化していく。このような影響を与える他者を「役割モデル」もしくは「ロールモデル（role model）」と呼ぶ。対象は親や友人、教師や有名人など多岐にわたる。ギブソンはロールモデルの定義を「個人に対して影響的な位置にある人であり、また個人にとって模倣をする例として示されたもの」⁶¹とした。日本における近年の研究では、「個人の発達の欲求や目標を基にした理想自己あるいは可能自己を表す人物のことである」⁶²とする定義もある。及川らは近年の研究を整理し、役割モデルには2つの認知的次元で解釈されうるとし、一つはポジティブ役割モデル／ネガティブ役割モデルという次元であり、2つめは全体的イメージとしての役割モデル／特定の部分についてのみ参照される役割モデルという次元であるとした。⁶³また、家島は、大学生対象の調査において「どのような人物が実際

⁵⁹ 杉浦健，2001「自己評価を規定する自己とそれに関連する大学生的文脈」溝上慎一編『大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—』ナカニシヤ出版，p.164

⁶⁰ 同上，p.142-144

⁶¹ Donald E.Gibson，2004「Role models in career development: New directions for theory and research」Journal of Vocational Behavior,65,p.134-156

⁶² 及川千都子・桜井茂男，2006「役割モデルと制御焦点が内発的動機づけに与える影響」『筑波大学心理学研究(32)』筑波大学心理学系，p.73-82

⁶³ 同上 p.73

に個人の理想・生き方に影響を与えているのか」について、「直接－間接」と「模範－反面教師」という軸で質問したところ、間接より直接、反面教師より模範の方が多く挙げられていることを示した。⁶⁴本稿にも関連すると考えられる結果として、以下の結論が挙げられる。

「こうなりたい」人物、「こうなりたくない」人物ともに「家族」「友人」「先生」が多く上げられたが、それ以外のものとして“クラブ・サークルの先輩”や“ゼミの先輩”といった「先輩」と“バイト先の店長”や“バイト先の上司”といった「バイト関係」が多く挙げられていた。⁶⁵

上記の結果からは、家族や学校での繋がりを超えた他者の存在が理想・生き方に影響を与える可能性が読み取れる。また、クラブ・サークルの先輩という身近な存在も影響を与えうることが示唆されている。ボランティア活動においては、個人単位の活動もあるが、団体での活動の場合経験豊富な先輩との出会いが予想される。また、地域での活動では長年地域での活動を展開している魅力的な大人との出会いも容易に想像できる。これらの要素が、大学生の「理想・生き方に影響を与える」すなわちロールモデルとなり得る可能性は充分考えられる。また、太田らは看護教育におけるロールモデル概念について整理を行い、ロールモデルの効用として以下の点を指摘した。⁶⁶

- (1) 学習の動機づけ、知識と実践の統合、看護職者としての態度習得や役割価値の認識、看護学十種における不安の軽減
- (2) 学生の自己行動変容の効果として期待でき、自己効力感を高められる
- (3) 看護師の成長していく時の具体的な目標設定の手段となり、専門的な能力の育成において大きな役割がある

ただしこの効用は、あくまでも「看護教育」という専門家養成の中で限定的に使用されているロールモデルであることには注意が必要であろう。本来のロールモデルは理想自己のように、広くは他者による理想・生き方への影響があると考えられる。

さらに、ボランティア活動との直接的な関連についての研究としては、三谷らが挙げられる。三谷らはボランティア行動がどのように生成されるのかを調査した結果、「子どもの頃に他者を援助する近所の人と接触していた人は、現在において共感性や一般的信頼が

⁶⁴ 家島明彦, 2006「理想・生き方に影響を与えた人物モデル」『京都大学大学院教育学研究科紀要 52』京都大学, p.280-293

⁶⁵ 家島明彦, 2006「理想・生き方に影響を与えた人物モデル」『京都大学大学院教育学研究科紀要 52』京都大学, p.286

⁶⁶ 太田美緒・前田樹海, 2009「文献に見るわが国の看護教育におけるロールモデルの概念」『長野県看護大学紀要 11』長野県看護大学紀要委員会, p.55-56

高い傾向にあり、そのためボランティア活動に参加しやすい」⁶⁷ことを指摘している。さらにロールモデルとの関連として、『『援助的な近所の人』の影響は純粹に、観察することや相互交流することを通じて学習されたものと解釈できる。より確かにロールモデルによる社会化の効果と考えられる。』⁶⁸とした。

本稿では、大学生のボランティア活動を通じた自己形成をテーマにしているが、そもそもの活動のきっかけとして、ロールモデルが存在しており、動機づけられていた可能性があるとの指摘は興味深い。本研究においては、ボランティア活動による自己形成の過程において、ロールモデルからどのような影響を受けているかについても検討していきたい。

3. 実践コミュニティ（正統的周辺参加論における学習）

正統的周辺参加による学習理論は、レイブとウェンガーによって提唱された。その特徴について、佐伯が整理を行っているが、本稿に関連する部分をまとめると以下のようなになる。⁶⁹

- ① 正統的周辺参加論における学習の概念は、従来の多くの教育論とは異なり、学習と教育を独立の営みと見なし、学習を左右しているのは、本人が「学ぶという営みをどうということ（実践）としているか」にその大部分が依存していることになる
- ② 正統的周辺参加論では学習を社会的実践の一部であるとする。つまり、学習というのは、「学び取る」とか「身につける」というよりも、「世の中のためになること—いわば、シゴトをやる」ことだとしている。学習とは人々と共同で、社会で、コトをはじめ、なにかを作り出すという実践の中で「やっていること」であり、学習だけを社会的実践の文脈から切り離して、独自の目標とすべき対象活動ではない。したがって「勉強」をするのではなく、何かをするときに、「勉強」が結果的に伴っている、というのが本来の学習である。
- ③ 正統的周辺参加論では学習とは「実践共同体への参加」であるとする。学習によって人は何かに貢献する、行為する、という「する側」にたち、「される側」「見る側」ではない、ということである。
- ④ 正統的周辺参加論では学習はアイデンティティの形成過程であるとする。すべての学習がいわば、「何者かになっていく」という、自分づくりなのであり、全人格的な意味での自分づくりができないならば、それはもともと学習ではなかった、という

⁶⁷ 三谷はるよ、2013「市民参加は学習の帰結か？—ボランティア行動の社会化プロセス—」『ノンプロフィット・レビュー 13(2)』日本 NPO 学会, p.37-46

⁶⁸ 三谷はるよ、2013「市民参加は学習の帰結か？—ボランティア行動の社会化プロセス—」『ノンプロフィット・レビュー 13(2)』日本 NPO 学会, p.43

⁶⁹ 佐伯胖、1993「訳者のあとがき—LPP と教育の間で」ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウェンガー著、佐伯訳『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書, p.185-189

ことである。

ボランティア活動をこの正統的周辺参加論に当てはめた場合、社会的実践（世の中のためになること—いわゆるシゴト—をやる）であると捉えることができるであろう。そうであるならば、ボランティア活動という社会的実践は、学習することそのものであり、ボランティア活動を通して学びが結果的に伴っているといえる。それは、同時にアイデンティティの形成過程でもあり、「何者かになっていく」という自分作り（＝自己形成）のプロセスでもあると捉えることができる。

河井はボランティア活動を含めた、大学授業外の実践コミュニティへの参加が“学生の学習と成長”にどのような役割を果たすのか調査を行い「学習活動を行う授業外実践コミュニティに参加することが“学生の学習と成長”にとって重要であることが明らかになった」⁷⁰とし、さらに「学習活動を行う授業外実践コミュニティに参加し、授業外での学習と授業での学習との間を移行・継続的往還する中で、それぞれの学習をラーニング・ブリッジすることによって付加学習につながる可能性がある」⁷¹とした。

実践コミュニティとしてのボランティアの学習効果について、直接的に扱ったものとして、河井、市川の研究がある。河井は全国大学生調査の分析からボランティア活動への参加によって学生の学習がどう異なるかを調査した結果「ボランティア活動に参加している学生、中でもより多く参加している学生が、学生の学習に関するパフォーマンスが高いことが示された」⁷²としている。また、市川は東日本大震災の復興支援活動は大学コミュニティ、地域コミュニティを包含した、ラーニングコミュニティを構築しており、学生はそのコミュニティから影響を受けて、『学ぶ意欲を向上』させ、『社会への問題意識が深まる』、『コミュニケーション能力が向上する』などの、成長の実感を持っていることがわかった。こうした実践コミュニティから生まれる学びは、状況的な学習として、学生の主体的な学びを生成している。」⁷³とした。

以上のことから、ボランティア活動という実践コミュニティを通した学習については、すでに具体的な学習効果についても知見が提示されている。本稿においては、これらの知見を踏まえた上で、自己形成につながる学習内容についてとその学びの構造についても明らかにしたい。

⁷⁰ 河井亨，2012「学生の学習と成長に対する授業外実践コミュニティへの参加とラーニング・ブリッジングの役割」『日本教育工学会論文誌 35(4)』日本教育工学会，p.304

⁷¹ 同上，p.305

⁷² 河井亨，2012「ボランティア活動への参加によって学生の学習がどう異なるのか：全国大学生調査の分析から」『ボランティア学研究 12』国際ボランティア学会，p.91-102

⁷³ 市川亨子，2015「東日本大震災復興支援の実践から生まれた学生の学び」『ボランティア学研究 15』国際ボランティア学会，p.151

第5節 序章小括

序章においては、本論文における背景として「ボランティア活動の現代的役割と意義」について整理を行った。1995年に発生した阪神・淡路大震災を契機にボランティア元年とも呼ばれ、ボランティア活動が一般化してきた。またその過程において従来の福祉分野に留まらず多様な活動分野が展開され、社会的な期待を得るようになった。同時に、活動者自身についてもその教育的意義が認識され、自己実現の機会として捉えられるようになってきたことを確認した。

ボランティア活動が活動者自身にも影響を及ぼすことは、当初より想定されていたものの1960年代においては、ボランティアの副次的な効果であり、そのことを強調することは誤った目的であるとの考え方が主流であった。しかし、1970年代以降「参加すること」を重視する考え方が強まり、1980年代には「自分のため」や「楽しさ」の意義を持ち出す傾向が強くなっている。1995年の阪神・淡路大震災を経て活動者本位のボランティア論がより主流となっていった。これらの流れは、国のボランティア推進施策においても活用されボランティア活動を「自己開発・自己実現につながる生涯学習」と捉え普及されてきた経緯がある。その具体的な影響については、全国社会福祉協議会の「全国ボランティア活動実態調査」からも見る事ができる。ボランティア活動で得られたこととして「多くの仲間が出来た」「新しい自分を発見できた」「新しい知識や技術を習得することが出来た」「自分の人格形成や成長にプラスになっている」「生きがいを得ることが出来た」などの項目について、多くの回答が得られており、ボランティア活動の教育効果を確認することができる。研究面においても、ボランティア活動の教育効果が注目され、自己報酬感・愛他的精神の高揚・人間観の広まりなど、多様な影響を読み取ることが出来る。本研究とも関わる「自己形成」についても田中による研究などが挙げられる。

ボランティア活動の実態調査として、全国社会福祉協議会・内閣府・総務省によるボランティア活動に関わる調査を元に人口の約26%がボランティア活動に参加したことを報告しており、活動分野についても子ども青少年育成・まちづくり・福祉等多様な分野で活動が展開されていることを報告した。

「ボランティア概念」については、①自発性・主体性、②連帯性・社会性、③無償性の3つが戦後の論文で共通するボランティアの原則であることを見いだしている。同時に外来語でもあり生成途上の概念である点、さらにはこれらの定義は常に揺らいできたものであるとの指摘があることも確認をした。また、今後ボランティアという言葉は「NPO」という言葉に代替えされてゆき、教育等の限定的な領域においてのみ使用されるとする「ボランティアの終焉」についての論考も確認した。

先行研究の整理では学生ボランティアに関わる研究を①ボランティア活動を通した対象者・地域への影響②活動者自身への影響（教育効果）③支援のあり方にわけることができることを確認した上で、活動者自身への影響（教育効果）については、もっとも研究の蓄積があるとした。その上で、これまでの先行研究の課題として、(1) ボランティア概念の

曖昧さ (2) ポジティブな面のみの効果に留まる (3) 短期的な調査 (4) 自己形成につながる支援の在り方という視点の欠如を指摘した。

これらの指摘を受け、本研究においては「ボランティア活動が大学生の自己形成に与える影響」を明らかにすることを目的とした。その具体的な視点として、(1)矛盾を抱えたボランティア活動が、活動実践者である大学生の自己形成に与える影響を明らかにする (2) 大学生の自己形成に寄与する支援のあり方はどのようなものを検討することとした。

第1章 学生ボランティアと活動者への影響

序章では、本論文における総括的な議題整理と研究の枠組みを示した。次に第1章では、本研究のキーワードである「大学生」「学生ボランティア」「自己形成」そして「支援のあり方」について、一つ一つ現状と本研究のテーマに関わる論点について整理をしていく。

第1節 大学生の固有性と自己形成

まずはじめにボランティア活動を行う「大学生」について焦点を当てると共に、子どもでもなく、大人でもない、青年期の特徴から、大学生における自己形成の意味を整理し、ボランティア活動が及ぼす自己形成への影響についての理論的な整理を行う。

第1項 大学生の固有性とボランティア活動

そもそも、大学生とは社会的にどのような立場にあるのだろうか。心理学においては、大学生の年代は、子どもでもなく、かつ大人でもない、青年期として捉えることができる。青年期の特徴として、溝上は過去の定義を整理し、以下の4点を備えたものであると説明している。⁷⁴

- ① 工業化（産業革命）を経た近代社会で誕生した社会歴史的な概念であること
- ② 子どもや若者が労働や生産の場から解放されること
- ③ 学校教育を通して子どもから大人になる発達の移行プロセスであること
- ④ 思春期を迎える頃から大人になるまでの年齢期であること

また、別の表現方法として、「若者」は、一人前の大人を起点にして、それより一人前ではないものとして用いられるのに対して、「青年」は、若者を起点にして、そこから大人に向かって成長していくプロセスを強調する言葉だとしている。⁷⁵どちらの説明においても、大人への発達途上であり、大人に向けての成長が期待されていることが分かる。そのため、大学生における自己形成は、その年代の発達課題として捉えることができる。

では、その大学生とボランティア活動にはどのような関連性があるのだろうか。溝上は、大学生固有の生活世界を作り上げている大学生事情におけるイベントや活動として、大学受験や学業、クラブ・サークル活動、アルバイト、就職と並べてボランティア活動も含まれていると指摘した。その理由として、以下の2点を挙げている。⁷⁶

- ① ボランティア活動は、アルバイトほどの一般性は見られないが、1990年代半ば以降、確実に現代的な意味で重要な活動として認識されつつある。何より、阪神・淡路大震災（1995年）でボランティア活動に従事した半数近くが、大学生・短大

⁷⁴ 溝上慎一、2010『現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ—』有斐閣選書、p4

⁷⁵ 同上、p.14

⁷⁶ 溝上慎一編著、2001「自己評価を規定する自己とそれに関連する大学生的文脈」『大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—』ナカニシヤ出版、p.76-77

生・専門学校生であったという。

- ② 月曜日と水曜日、金曜日だけ大学に行って、あとはボランティア活動をするという設計も可能である。大学生は、個人の気持ち一つでなんでもできるのである。そして、そのような中に組み込まれてくる代表的なキャンパス外活動が、アルバイトであり、ボランティア活動なのである。

1995年の阪神・淡路大震災以降、大学におけるボランティア活動が注目され、国の政策や大学においても推進されてきたことは、序章の第3節において、主としてボランティア研究の視点から、触れてきた。しかし、本章においては、大学生における研究からもボランティア活動が固有の事情として認識され、注目されていることがうかがえる。実際、溝上が行った調査⁷⁷において、「私は全体的に自分自身に満足しています」という質問に対して、「はい」と答えた学生に、その理由を求めた際、「ボランティア活動をやっている」「私は障害児ボランティアのリーダーだ」等の回答があったことが報告されている。

第2項 大学生の自己形成

次に「自己形成」について整理を行う。

1. 本論文で扱う自己形成の定義

前項において、「大学生における自己形成は、その年代の発達課題として捉えることができる。」と述べたが、その最も古典的な理論はE・H・エリクソンのアイデンティティ論である。エリクソンは、青年期の発達課題としてアイデンティティ形成を挙げ、同時に対になる概念としてアイデンティティ拡散を挙げている。⁷⁸また、アイデンティティ形成は青年期にのみ行われるものではなく、人生のすべての段階を通して発達する⁷⁹と述べており、乳児期、幼児期、学童期等、それぞれの段階で発達課題があり、青年期において統合することが求められる。さらに、アイデンティティの条件としては、これまでの自分と今の自分、さらにはこれからの自分が一貫して同一であるという感覚である「連続性」と、自分の考えている自分と他者の観る自分とが同一であるという感覚「斉一性」があるとした。

では、そもそも自己形成とは何か。多様な定義があるが、溝上は、アイデンティティ形成と自己形成は同義のものではなく、自己形成はアイデンティティ形成を包含する、より大きな概念であるとした上で、自己形成を下記のように位置づけた。

⁷⁷ 溝上慎一編著、2001「自己評価を規定する自己とそれに関連する大学生的文脈」『大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—』ナカニシヤ出版、p.85

⁷⁸ Erikson, E.H., 1982「The life cycle completed. W. W. Norton & Company.」(村瀬孝雄・近藤邦夫訳 1989「ライフサイクル、その完結」みすず書房)

⁷⁹ Erikson, E.H., 1967「Dialogue with Erikson. Harper& Row, Publishers, Inc. (岡堂哲雄・中園正身訳 1981「エリクソンは語る—アイデンティティ心理学」新曜社)」

図表 1-1 溝上による自己形成の定義

青年期以前	青年期
自己発達	自己形成
他者を学習し、他者の視点に立って世界を見る、その世界観が折り返されて自己に向けられるとき、自己（像）は把握される。	反省的な思考能力が発達してくる青年期頃になると、人は他者の世界観に基づいて形成したさまざまな「私」を、今度は自分の世界観にもとづいて形成し直す。

※（溝上 2008）⁸⁰を元に筆者が整理

また、山田は大学生の日常的な活動は、どのようにして自己形成に関わる活動として機能しているかを明らかにするために調査を行う際、自己形成を「日常場面における行為や経験といった（外的）環境との関わりをベースとして、その外的活動とそれに付随する内的活動（諸感覚や評価）との相互作用によってもたらされる自己の発達およびその過程」⁸¹と定義している。これら、溝上・山田の定義は大学生の自己形成の定義としては有効であると考えられるが本研究のテーマである、ボランティア活動との関わりにおける位置づけがなされておらず、より広義なものとなっていると考えられる。ボランティア活動と自己形成に関わる定義については、ボランティア活動が自己形成と社会形成に及ぼす影響について研究を行った田中が挙げられる。田中は、ボランティアの自己形成について「活動を通じた意識や行動の変化によって進展する過程である。」とし「自己形成とは学習過程の一種と考えることが出来る」⁸²とした。本研究においてもこの田中の定義を援用する。ただし、田中の研究では学齢期におけるボランティア活動は学校教育と切り離して考えることが困難であるとし、一般成人のボランティア活動を調査対象としており、本研究と対象者が異なっている。

本稿では、ここまでの議論を踏まえ、ボランティア活動による自己形成について、「ボランティア活動を通じた意識や行動の変化によって進展する過程」と定義して扱うものとする。

2. 自己形成を課せられる時代的背景

社会に目を向けると、1990年代は初頭にバブルが崩壊し、日本におけるこれまでの様々なシステムが機能不全に陥り変更を余儀なくされていた。青年期、特に大学生における直接的な出来事としては、大学全入時代と就職氷河期を挙げることができる。大学全入（時代）とは、すべての大学の定員数の合計が、その年の大学進学希望者の総数を上回ること

⁸⁰ 溝上慎一，2008「自己形成の心理学―他者の森を駆け抜けて自己になる」世界思想社，p.159

⁸¹ 山田剛史，2003「青年期の自己形成に関する研究の概観と展望―現象（リアリティ）理解のためのトライアンギュレーション―」人間科学研究，11，pp.165-177

⁸² 田中雅文，2011『ボランティア活動とおとなの学び―自己と社会の循環的発展―』学文社，pp.239

であり、主として大学数の増加と少子化による18歳人口の減少によって引き起こされた。これにより、受験生はえり好みさえしなければ、どこかの大学に入れる時代となった。また、1991年のバブル崩壊により、新規学卒者の就職率は大幅に減少し、「就職氷河期」と呼ばれた。のちに、失われた10年とも呼ばれ、その時代に社会に出た世代を指し「ロストジェネレーション」とも呼ばれた。

溝上はこれらの社会的背景が、大学生の自己形成を求める方向に進んだことを指摘している。つまり、就職氷河期に対応するため、大学においては就職率をあげるため、就職部や就職センターによる指導が始まった。その結果として

早い時期から職業世界を理解させ、学生の自己理解や自己形成を促し、有意義な学習や大学生活を過ごすように支援することが必要である。こうして、1年生から継続的に自己発見や自己理解レポートを書かせたり、OB・OGや社会人を講師として招いて社会や仕事の話をしてもらい、今でいうところのキャリア教育の授業が行われたり、インターンシップを仲介・斡旋したりするようになっていく。

このような就職支援の活動が、「キャリア教育」や「キャリア形成支援」という用語で置き換えられるようになったのは、2000年前後の時期である。⁸³

とした。以上のことから、1990年代以降に大学生に対する自己形成が、社会から急激に求められ、大学としても積極的に働きかけを行ってきたことが見えてくる。

第3項 人格と主体形成

第1項ではボランティア活動による自己形成について、「ボランティア活動を通じた意識や行動の変化によって進展する過程」と定義した。当然のことながら、ボランティア活動を通して様々な意識や行動の変化が起こることが予想される。本稿においては、その意識と行動の変化を明らかにすることが目的の一つであることは、これまでも述べてきたとおりである。しかし、ボランティア活動による一つ一つの変化を捉えるだけでは、不十分であると考えられる。つまり、一つ一つの意識や行動の変化と共に、その全体像を捉えることが必要だと考えられる。そこで、本項では、ボランティア活動による自己形成の影響の全体像を捉える上で、社会教育分野で「主体形成の社会教育学」を提唱する鈴木敏正氏による議論に依拠しつつ、人格論についても検討を行っていく。

鈴木は人格論について「重要なことは、自然的存在・社会的存在・意識的存在としての人間の全体を総体として、構造的に、かつ発展的に理解することである」とした上で、人格の構造について以下のように示した。⁸⁴

⁸³ 溝上慎一、2010『現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ—』有斐閣選書、p153-154

⁸⁴ 鈴木敏正、2009『教育学をひらく—自己解放から教育自治へ—』青木書店、p.103-119

1. 実体としての人格（自然的存在）

人間的諸能力の総体であり、「可能性 ability&possibility」ないし「潜在性 capability」において把握すること。「固有性 uniqueness」を持ったものとして位置づけること、「総体 totality」としてそれ以上分割できない全体として理解することが重要。みずからの個性的な能力を発揮し、創造的活動を行い、その結果を持って自己確証をするということによって成立する「自己実現」の過程の中で形成される。

2. 本質としての人格（社会的存在）

社会的諸関係の総体として規定される。社会的存在としての人間を把握するものである。人間的本質の実現とは、歴史的・社会的諸関係としての人間一人間関係の対立や矛盾を乗り越えて、かけがえのない個性を持った同じ人間として「相互承認」の関係を創造していくことによってはじめて現実のものとなると考えるべき。

3. 主体としての人格（意識的存在）

主体としての人格は、自由な実践主体であり、「実体としての人格」と本質としての人格」を統合するものである。主体とは、自己意識を持つ意識的存在として人格的統合機能を持ち、自己をも普遍的に捉え「われとわれわれ」を変革することが出来る存在を意味する。その統合・変革過程が主体形成過程であり、「主体形成とは自己実現と相互承認の意識的編成過程である。」と言える。また、主体形成に関わる重要な概念として「自己疎外」を示し、「自己実現と相互承認が得られず、主体の客体化が進行する過程であり、自己認識の歪みから自己喪失にいたる過程である」⁸⁵と規定した。

鈴木の主体形成の概念をもとに主体形成の形成過程に関する基本的枠組みの構築を行った大石によれば、『主体形成過程』が展開するには、その前提として、人々の『自己実現過程』と『社会化過程』が共に強く展開することが必要であり、この二つの過程を意識的に統合し、矛盾を調整・止揚して『自由で自立した人格』⁸⁶を目指すとき『主体形成』過程が進展する」⁸⁷としている。

そこで本稿では、主体形成の過程でもある「自己実現」と「相互承認」に注目することとする。「自己実現」について、鈴木は「みずからの個性的な能力を発揮し、創造的活動を行い、その結果を持って自己確証をするということによって成立する」⁸⁸としているが、

⁸⁵ 鈴木敏正，2000『主体形成の教育学』お茶の水書房，p.248

⁸⁶ 本引用において『自由で自立した人格』とあるが、筆者としては、自分の行動を自分の立てた規律に従って正しく規制する「自律」としての側面があると考え、原文をそのまま引用している。

⁸⁷ 大石剛史，2004「地域福祉の主体形成論に関する基礎的考察」『国際医療福祉大学紀要 9』国際医療福祉大学，p.8

⁸⁸ 鈴木敏正，2009『教育学をひらく―自己解放から教育自治へ』青木書店，p.103-119

ボランティア活動を通して自己実現が図られていくことは、従来より指摘されている。本稿においても、序章第1節第2項「ボランティア活動の教育的意義」において、当時の文部省（現：文部科学省）の答申や全国社会福祉協議会による「全国ボランティア活動実態調査」において、自己実現がボランティアの重要な要素として捉えられていることを指摘している。そのため、本稿における調査・分析においても、ボランティア活動による自己形成への影響として、自己実現の過程が確認出来るかどうかを注視していきたい。

次に、相互承認について検討を行いたい。鈴木は相互承認について「人間の本質の実現とは、歴史的・社会的諸関係としての人間－人間関係の対立や矛盾を乗り越えて、かけがえのない個性をもった同じ人間として『相互承認』の関係を創造していくことによって始めて現実のものとなる」⁸⁹と述べている。前述の「全国ボランティア活動実態調査」において、ボランティア活動で得られたことでもっとも高い回答は「多くの仲間ができた」（64.0%）であり、ボランティア活動を通して信頼出来る関係性を構築できたと実感するものが多いことがうかがえる。また、序章第3節第1項で、桜井らによるボランティア活動の活動者自身への影響として「市民性の獲得」を挙げているが、市民性の獲得の具体的な項目の一つに「市民的責任性や利他的意識を向上させることができる」⁹⁰ことを報告している。これらの先行研究は必ずしも、ボランティア活動を通じて「相互承認が形成される」ことを明らかにしたものではないが、活動を通じた人間関係の対立や矛盾を乗り越えた関係性の構築の可能性を見ることが出来る。本稿の調査においては、ボランティア活動による影響として、相互承認の過程が確認出来るかどうかを注視して行きたい。

第2節 学生ボランティアを巡る状況

ここまでは、「大学生」と「自己形成」に注目して整理を行ってきたが、本節では、学生を中心とする若者のボランティア活動に注目し、その歴史と現状について確認する。

第1項 学生ボランティアの歴史

1. 学生ボランティアの源流

日本における学生ボランティアの源流を辿ると、1923年の関東大震災の救援活動を契機として1925年（大正14年）に発足した東京帝国大学セツルメントに代表されるセツルメント活動にたどり着く。セツルメント（settlement）とは、宗教家や学生などが都市の貧困地区などに宿泊所、授産所などの施設を設けて住民の生活向上のための助力をする社会事業、およびその施設、隣保事業を指す。学生セツルメントは、歴史的には英国ロンドンで教授や学生等の大学人がスラムに入り、その地区に住む人々と知的で人格的交流を通して福祉の向上を図ることを目的として、1884年に創設された。国内においては、1930年代

⁸⁹ 同上，p.108

⁹⁰ 桜井政成・津止正敏，2009『ボランティア教育の新地平―サービスラーニングの原理と実践―』ミネルヴァ書房，p.8-9

に弾圧を受け一度は解散に追い込まれるも、戦後に活動を再開し 1955 年には第 1 回全国学生セツルメント大会が開催されている。戦後 1950～60 年代は、奉仕活動としてのボランティアが中心であり、施設ボランティア等福祉分野での活動が中心行的に行われた。学生ボランティアもその中心的な担い手であった。岡村は、大阪を中心とした学生ボランティア史（1950～1980 年代）を踏まえ、学生ボランティアの 4 つのタイプ（①学内クラブ型②福祉団体施設所属型③学外学生連合型④既存ボランティアグループ所属型）に類型化を行った。⁹¹しかし、当時の学生ボランティアの研究やレポートは他の主体の活動に比べ少数に留まっている。

2. 阪神・淡路大震災によるインパクト

1995 年 1 月 17 日に発生した「阪神・淡路大震災」は、学生ボランティアにおいても多大な影響を与えた。140 万人とも言われるボランティアのおよそ 40%が大学生であったとの報告⁹²もあり、大学生とボランティアの関係をより近づける機会となった。阪神・淡路大震災以降、特定非営利活動促進法の成立（1998 年）やボランティアに関わる 3 つの学会「日本福祉教育・ボランティア学習学会（1995 年）」、「日本ボランティア学会（1998 年）」、「国際ボランティア学会（1999 年）」の発足、日本 NPO センターや日本ボランティアコーディネーター協会の設立等、ボランティアに関わる大きなイベントが続いたが、学生ボランティア活動においても、佐々木らによりボランティアに駆けつけた大学生の「動機」「活動内容」「評価」等について詳細な調査が行われ、学生ボランティアの有効性や活動に参加した学生たちの変化や学習効果等、その後の研究に大きな影響を与える視点が提示された。⁹³また、「せっかく大勢のボランティアの善意があっても、受け皿や情報が無いために混乱を招いてしまった」⁹⁴との反省から、学生ボランティアの支援策として、「大学ボランティアセンター」設置等の動きへとつながった。これら阪神・淡路大震災を機に注目が高まったボランティア活動の 2 つの有効性（地域貢献・教育効果）と課題（支援のあり方）が現在の学生ボランティア推進策とつながり、研究面においても注目されることとなる。

第 2 項 学生ボランティアを巡る政策動向

阪神・淡路大震災で多くの学生ボランティアが活躍したことで、ボランティア活動の教

⁹¹ 岡本栄一，2003『大学とボランティア』内外学生センター，p.32

⁹² 鈴木勇・菅磨志保・渥美公秀，2003「日本における災害ボランティアの動向:阪神・淡路大震災を契機として」『実験社会心理学研究 42(2)』日本グループ・ダイナミックス学会，p.172

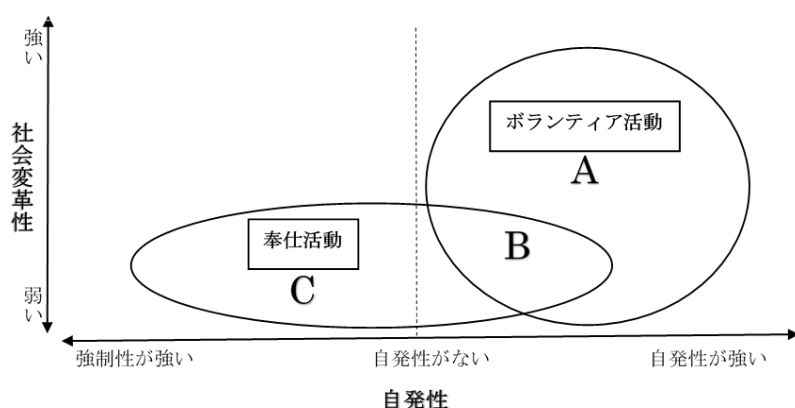
⁹³ 佐々木正道編著，2003『大学生とボランティアに関する実証的研究』ミネルヴァ書房

⁹⁴ 杉岡秀紀・久保友美，2007「関西を中心とした大学ボランティアセンターの現状・課題・展望—サービズ・ラーニングという新潮流を踏まえて—」『社会科学』79 号，同志社大学，p.131

育的効果や社会貢献に果たす役割が注目されることとなった。その結果として、国の教育政策特に若者の教育においてボランティアの導入が進められていくこととなる。また、その過程においては「教育による強制ボランティア」という批判と共に「奉仕活動の義務化」の議論が展開された。

1. 奉仕活動の義務化論争とボランティア活動の推進

2000年3月に発足した、内閣総理大臣の諮問機関である教育改革国民会議は同年12月22日、教育を変える提案として、「奉仕活動を全員が行うようにする」との提言を含む17の提案を行った。この提案に対しては、中間報告の際より「ボランティアの義務化」などと報じられ、多くの議論を巻き起こし、後のボランティア政策に大きな影響を与えた。そもそも、「ボランティア」と「奉仕活動」とはどのように重なり合い、また異なるのか。早瀬はその著書において、ボランティア活動と奉仕活動の関係を図表1-2のように〈自発性〉と〈社会変革性〉という2つの軸で対比を行っている。



図表 1-2 ボランティア活動と奉仕活動の関係（早瀬 2011）⁹⁵

この図によれば、ボランティア活動とも奉仕活動とも呼べる共通部分 B もあるが、自発性に基づき、市民運動など社会変革性のある活動が含まれるボランティア活動 A に対して、奉仕活動は権威や権力に“奉り仕える”が語源であり、社会変革の志向は弱く強制的に取り込まれることもあり C のようになるとした。奉仕という言葉は、戦時中の「勤労奉仕」とも繋がり、その点はボランティア活動の対極にあるものと指摘している。⁹⁶

では、「奉仕活動の義務化」においては、どのような議論がなされたのか。日本におけるボランティア学習の研究・推進機関である日本ボランティア学習協会は、中間報告時に提言を行っているが、その視点は、青少年が社会への貢献を目的に多様な社会体験学習を

⁹⁵ 大阪ボランティア協会編著早瀬昇他著、2011『テキスト市民活動論—ボランティア・NPO の実践から学ぶ—』大阪ボランティア協会、p.19

⁹⁶ 同上、p.19

経験することの重要性を強調している点には賛同した上で、「奉仕活動の義務化」の問題点として、①奉仕という言葉が「滅私奉公」等自己犠牲的イメージが強く、ボランティア活動がもつ「互助的精神」や活動者とサービスを受ける側との「共生的」な関係に“ゆがみ”を生じさせる心配がある②義務では主体性や個性を尊重し合い自ら進んで他者や社会との関係を作るような教育効果は得られない点を指摘し、逆に青少年が参加できる、時間や機会などの環境の開拓についての提案を行っている。⁹⁷

これらの議論を受け、最終的な報告では、義務化の表現が変化し、「小・中学校では2週間、高校では1か月間、共同生活などによる奉仕活動を行う。親や大人も様々な機会に奉仕活動の参加に努める。将来的には満18歳後の青年が一定期間奉仕活動を行うことを検討する。」⁹⁸とした。また大学に対しても「社会奉仕活動への積極的な参加を促すような学習システムを導入する」とした。この提言を受け文部科学省は「二十一世紀教育新生プラン」（2001年1月）を作成し「奉仕活動・体験活動の充実」が、推進されることとなった。その具現化として2001年7月「学校教育法・社会教育法の一部改正」が施行され、「青少年に対しボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の機会を提供する事業の実施及びその奨励に関すること」が追加規定された。さらに小学校では「児童の体験的な学習活動、特にボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動」の充実を求める文言が加えられた。さらに2002年の中央教育審議会「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申）」により実効化された。以上のように、「奉仕活動の義務化」をめぐる議論は、「ボランティアとは何か？」という本質的な問いかけと共に、以降の若者ボランティアへの施策に大きな影響を与えている。

2. ボランティア活動の教育力への期待

1998年10月26日に文部省（現：文部科学省）の大学審議会が答申した「21世紀の大学像と今後の改革方策」において、「社会でのボランティア活動等、学外の体験を取り入れた授業科目の開設などにより社会の実践的な教育力を大学教育に活用するという視点も重要である」と指摘している。さらに、2002年7月29日に文部科学省の諮問機関である中央教育審議会（以下、中教審）は「青少年の奉仕活動、体験活動の推進方策等について」の答申において、18歳以降の青年にとっての奉仕活動の意義として「地域や社会の構成員としての自覚や良き市民としての自覚を、実社会における経験を通して確認することができる。実体験によって、現実社会の課題に触れ、視野を広げ、今後の自分の生き方を切り開く力を身に着けることができる。特に、学生にとっては、何を目指して学ぶかが明確になって学ぶ意欲が高まり、就職を含め将来の人生設計に役立てることができる。」とし、具体的な支援策として「正規の教育活動として、ボランティア講座やサービス・ラーニン

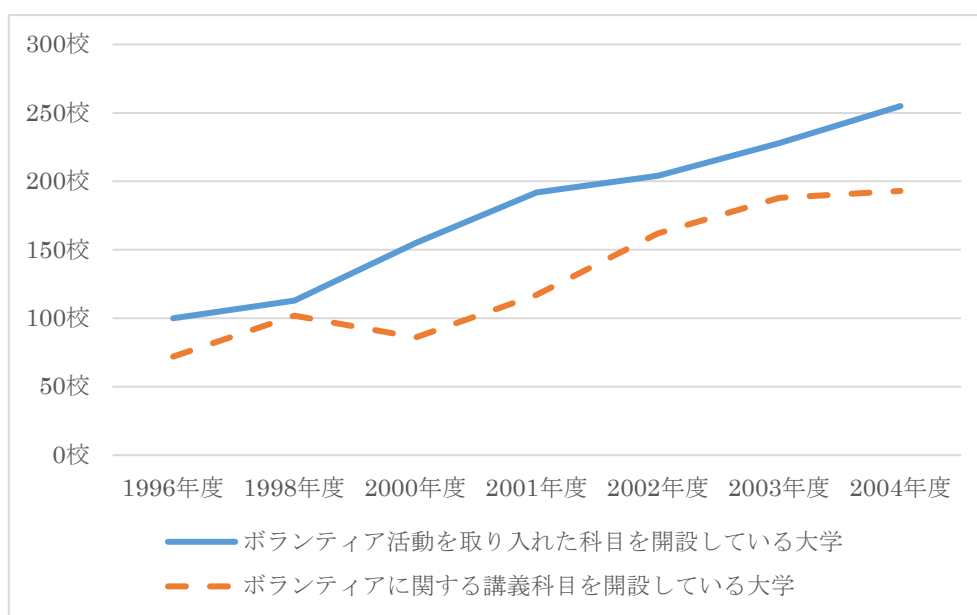
⁹⁷ 日本ボランティア学習協会、2000『教育改革国民会議中間報告における「奉仕活動」提言への意見書』

⁹⁸ 教育改革国民会議、2000『教育改革国民会議報告—教育を変える17の提案』

グ科目、NPOに関する専門科目等の開設、インターンシップを含め学生の自主的なボランティア活動等の単位認定等を積極的に進める、学生の自主的な活動を奨励・支援するため大学ボランティアセンターの開設など学内のサポート体制の充実、セメスター制度やボランティア休学制度等活動を行いやすい環境の整備、学内におけるボランティア活動などの機会の提供などに取り組むことが望ましい。」との提言を行っている。

この提言を受け、文部科学省から委託を受けた内外学生センター（現：日本学生支援機構）は全国の国公私立大学生を対象に「学生のボランティア活動に関する調査」を1998年、2005年に実施した。2005年の調査結果では、65%の学生が、ボランティア経験が「ある」と回答しており、ボランティア活動が大学生の中で広がっている姿が明確になった。長沼は2003年に全国の大学・短大を対象にボランティア関連科目の実態について調査を実施し、図表1-3のように、阪神・淡路大震災以降急激に増加していることを明らかにした。⁹⁹学生ボランティアの支援機関である大学ボランティアセンターについても、阪神・淡路大震災以降設置が進み、図表1-4のように東日本大震災以降もセンターの設置を行う大学が増えていることが分かる。大学ボランティアセンターを継続的に調査・支援しているNPO法人ユースビジョンによれば、2019年7月23日現在でのセンター数は169¹⁰⁰となっている。

図表 1-3 ボランティア関連科目開設大学数



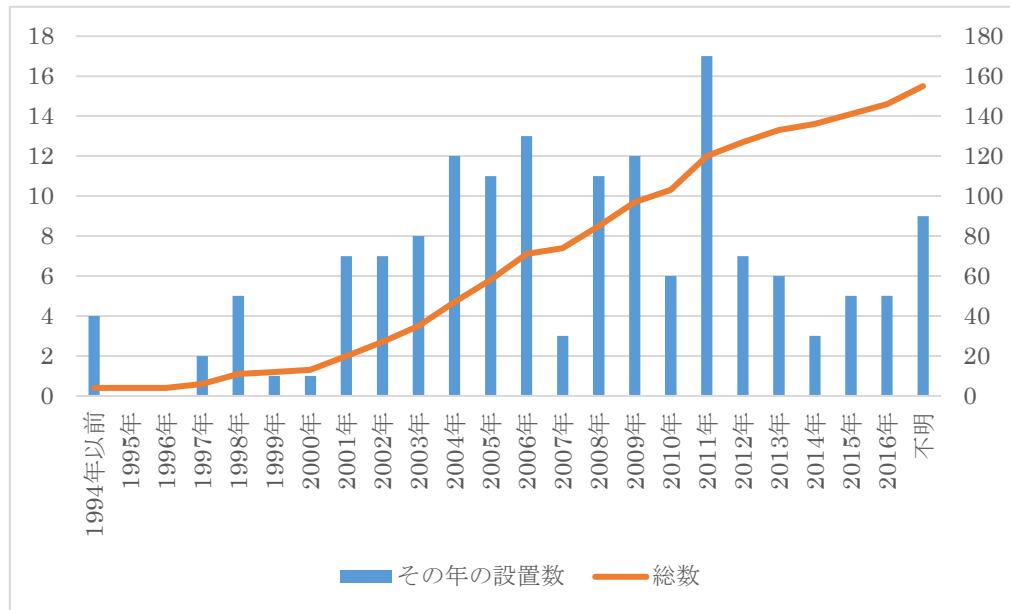
※（長沼 2006）の調査データをもとに著者が作成¹⁰¹

⁹⁹ 長沼豊，2006「高等教育におけるボランティア学習の実態に関する考察—ボランティア関連科目の分析を通して—」『ボランティア学研究』vol.7，国際ボランティア学会，p. 25-46

¹⁰⁰ NPO 法人ユースビジョン，2019『大学ボランティアセンター情報ウェブ』
<https://www.daigaku-vc.info/>大学ボラセンリスト/（参照日：2021.5.31）

¹⁰¹ 長沼豊，2006「高等教育におけるボランティア学習の実態に関する考察—ボランティ

図表 1-4 大学ボランティアセンター設置数



※（赤澤 2017）¹⁰²のデータを元に著者が作成

以上のことから大学におけるボランティア推進策が着実に広がっており、その支援体制も整いつつあることが分かる。

3. 大学の地域貢献への期待

学生ボランティアを促進するもう一方の動きは、大学に寄せられる社会貢献への期待である。大学は従来より「教育」と「研究」という二つの機能があると見なされてきた。しかし近年、3つ目の役割・機能として「社会貢献」ないし「地域貢献」が求められるようになってきた。その事は、中教審が 2005 年に出した答申「我が国の高等教育の将来像」において「大学は教育と研究を本来的な使命としているが、（省略）近年では、国際協力、公開講座や産学官連携等を通じた、より直接的な貢献も求められるようになっており、こうした社会貢献の役割を、言わば大学の『第三の使命』としてとらえていくべき時代となっているものと考えられる。」と明確に指摘されている。その後の 2006 年の教育基本法の改正において、より一層大学の「社会貢献」という役割・機能の位置づけが明確になり、具体的政策においても取り入れられることとなった。2012 年には「大学等（短大・高専を含む）が、地域課題を直視して解決に当たる取り組みを支援し、大学の地域貢献に対する

ア関連科目の分析を通してー」『ボランティア学研究』vol.7, 国際ボランティア学会, p. 25-46

¹⁰² 赤澤清孝, 2017「大学ボランティアセンターの歴史と動向」『かながわ政策研究・大学連携ジャーナル NO.11』政策研究・大学連携センター, p.27

意識を高め、その教育研究機能の強化を図る」ことを目標に掲げた「地域再生の核となる大学づくり COC (Center of Community) 構想の推進」をすることとした。

大学による社会貢献は、従来からの人材育成による貢献や公開講座や授業の公開等のソフト面での知的資源の還元、さらには大学の備えている設備の利用開放等のハード面での貢献など、多岐にわたる。そのような中で、特に大学に期待されるものの一つが学生ボランティアである。文部科学省が基礎自治体を対象とした、大学に期待することを調査した結果では、最も期待の高い項目として「学生の社会貢献活動（ボランティア活動等）を推進」が挙げられ、「大いに期待している」「期待している」をあわせると 90%以上の自治体からの期待が寄せられていた。¹⁰³以上のことから、地域からの期待や要請もあり、学生ボランティアの活動の場が広がってきたことがわかる。

第3項 学生ボランティアと「動員」のリスク

ここまで見てきたように、ボランティア活動の推進においては、国の施策による積極的関与が見いだせる。確かにボランティア活動による生きがいや自己実現など、活動者自身への意義も認められ、活動を推進することは、個人にとっても社会にとっても有意義であると考えられる。しかし中野敏男は、個人としての活動の意義と社会的機能を切り離した上で、その社会的機能のリスクとして「国家システムが主体を育成し、そのようにして育成された主体が対案まで用意して問題解決をめざしシステムに貢献するという（アドボカシー型の市民参加）、まことに都合よく仕組まれたボランティアと国家システムの動態的な連関である。すなわちボランティア活動というのは、国家システムを超えるというよりは、むしろ国家システムにとって、コストも安上がりで実効性も高いまことに巧妙な一つの動員の形でありうる」¹⁰⁴と指摘し、警鐘を鳴らしている。仁平は中野の議論を継承し個人の活動意義との関連から「ボランティア言説が『自己実現』概念と接合することで、活動の社会的帰結が問われなくなり動員に回収されやすくなる」とした。

中野はさらに「植林などの緑化運動には『ボランティア』で参加しても、『原発』や『ゴミ焼却場』の建設反対運動への参加については「ボランティア」と呼ばないのが通例だ。（中略）ボランティア活動の内容には選別が働いており、その選別に際しては「公益性」と称されるような支配的言説が求める基準が強く関与しているのは明らかなのだ。ボランティア活動がしだいに社会的に定着していった、公的・制度的な支援をさまざまにうけるようになる場合には、この「公益性」による選別はますますはっきりしてゆくことになるはずである」¹⁰⁵と指摘している。

これら、中野・仁平のボランティアが国家に容易に動員されうるとの指摘は、本稿の対

¹⁰³ 文部科学省、2003「大学と地域の連携によるまちづくりの在り方に関する調査研究」

¹⁰⁴ 中野敏男、1999「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」『現代思想』27巻5号、青土社、p.76

¹⁰⁵ 同上、p.87

象となる大学生においても例外ではない。むしろ、大学という「教育」をその目的とする組織によって推進されるボランティア活動は、単位の有無に関わらず、必ず教育的意義との関連が見いだせる。その点で考えれば、教育的意義さえ見いだせれば、社会的機能として結果「動員」になろうとも、矛盾なく成立してしまう危うさを絶えず孕んでいる。

それは、現実の問題としても存在している。Web 上での議論になるが村上は東日本大震災以降、大きな災害が起きた際、文部科学省から補講や追試、レポート、実習認定などに配慮を求める通知が出されていること、また今後東京オリンピック 2020 に向けて学生たちが活動しやすくするために、すでに授業や試験の時期を大会期間から外すことを求める通知を出していることに触れ、「一見、学生の自主性を尊重しているのだから『何か問題が?』と言われそうだが、敢えてこれらはボランティア活動の美名の元に、若者たちを動員する策として「危うい」と言いたい。本来、国が責任を持って進めるべき被災地の復興だが、公平性の原則から私有地の片付けなどきめ細やかな支援を国では行えないということもあり、ボランティアが必要とされる。だからといって、『ボランティアは絶対善である』という前提に立って国がボランティア活動を奨励することは危険である。(中略) 国家権力がボランティアを『絶対善』としてしまうと、国家権力にとって都合の良いボランティア活動のみが促進され、逆に都合の悪いボランティア活動は排除され、自由意志の原則が脅かされることになる。」¹⁰⁶と警鐘を鳴らしている。こうした議論も十分踏まえた上で、ボランティア活動が大学生の自己形成に与える影響を考える必要がある。

第4項 大学生のボランティアへの動機と特徴

次に学生ボランティアの動機からその特徴を探っていく。大学生はどのような理由・動機でボランティア活動を始めるのだろうか。公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）が、2017年に大学生1万人を対象に行ったアンケートでは、「ボランティア活動をはじめた最大のきっかけ」として「団体や知人との関係性」30.4%、「自己実現・自分自身のため」27.5%、「その団体への共感」21.1%、「社会貢献の意識」8.2%となっていた。このアンケートでは本人の動機ではなく、直接的なきっかけを訪ねているため、本人の内面の動機面を見ていくと、「自己実現・自分自身のため」という利己的な動機が27.5%と高いことが伺える。逆に「社会貢献への意識」8.2%と本来ボランティアの原則とされる社会性や利他的な動機が必ずしも高いとは言えない。

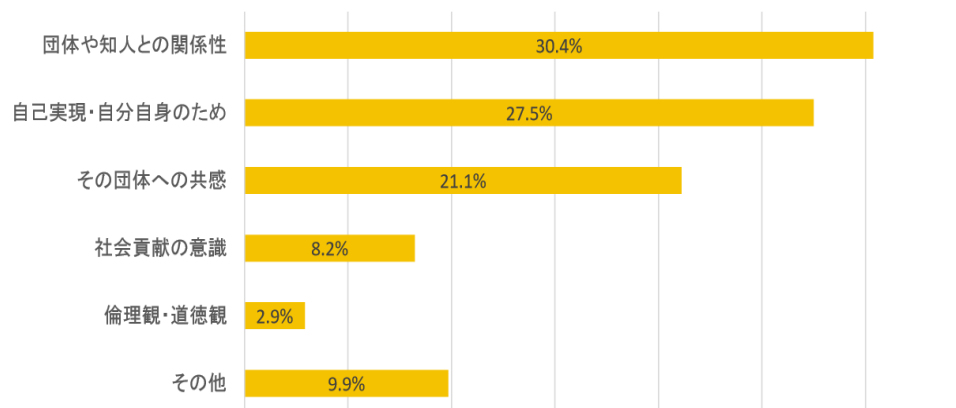
さらに詳細なきっかけを見ていくと、「自己実現・自分自身のため」では、「自分に合ったボランティアだと思ったから」13.5%、「達成感や満足感が得られそうだったから」5.7%、「学校の成績や就職活動に有利だから」4.8%等となっており、「社会貢献の意識」では「社会の問題解決に関わりたかったから」4.2%、「社会に恩返ししたかったから」2.2%となっている。

¹⁰⁶ 村上徹也，2018，「目立つ国策的な動員型「ボランティア」促進の危うさ」，NPO CROSS <http://npocross.net/590/>（参照日：2021.5.31）

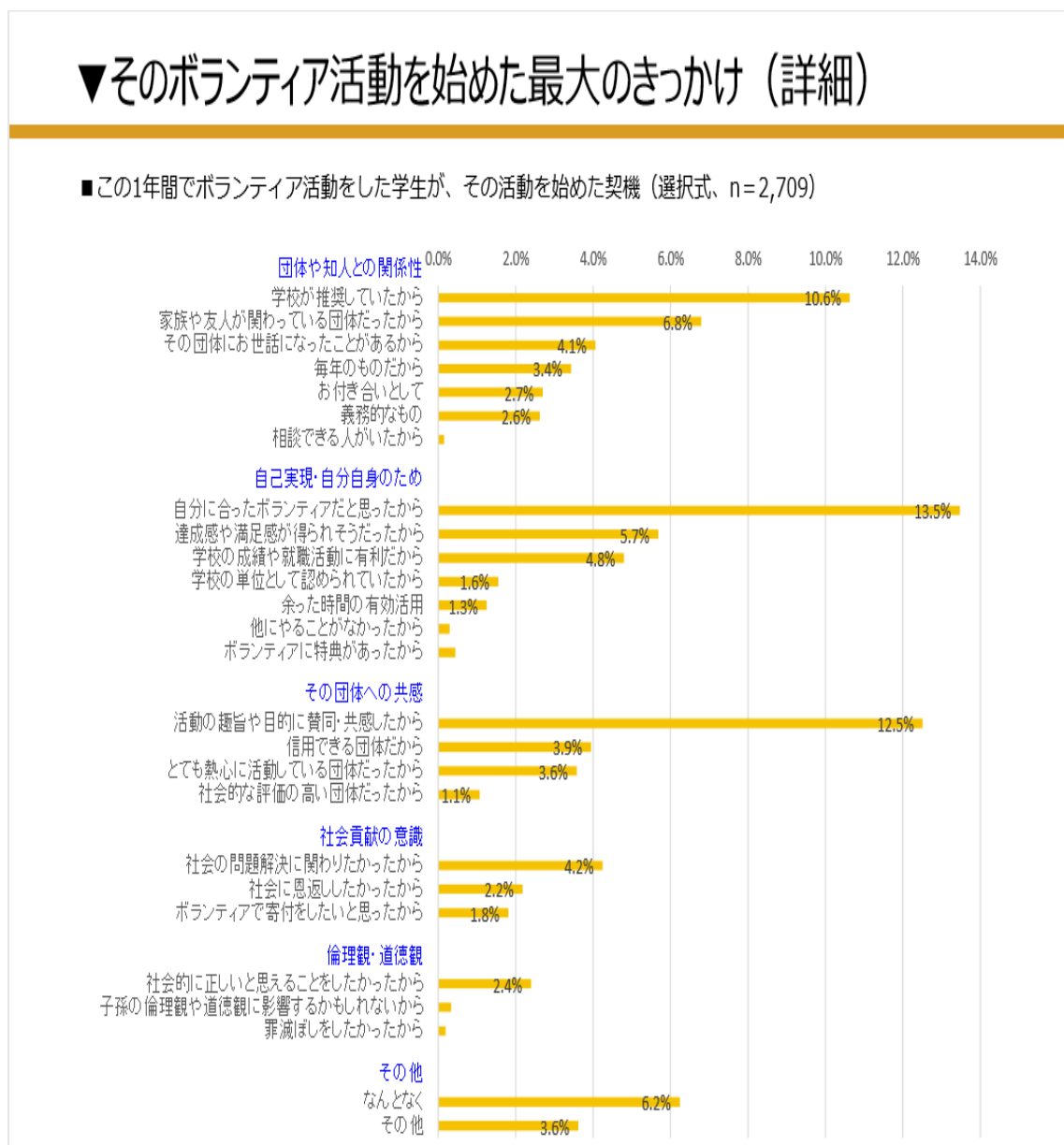
図表 1-5 学生ボランティアが活動をはじめた最大のきっかけ

【そのボランティア活動をはじめた最大のきっかけは？】

■この1年間でボランティア活動をした学生が、その活動をはじめた契機（選択式、n=2,709）



図表 1-6 学生ボランティアが活動をはじめた最大のきっかけ（詳細）



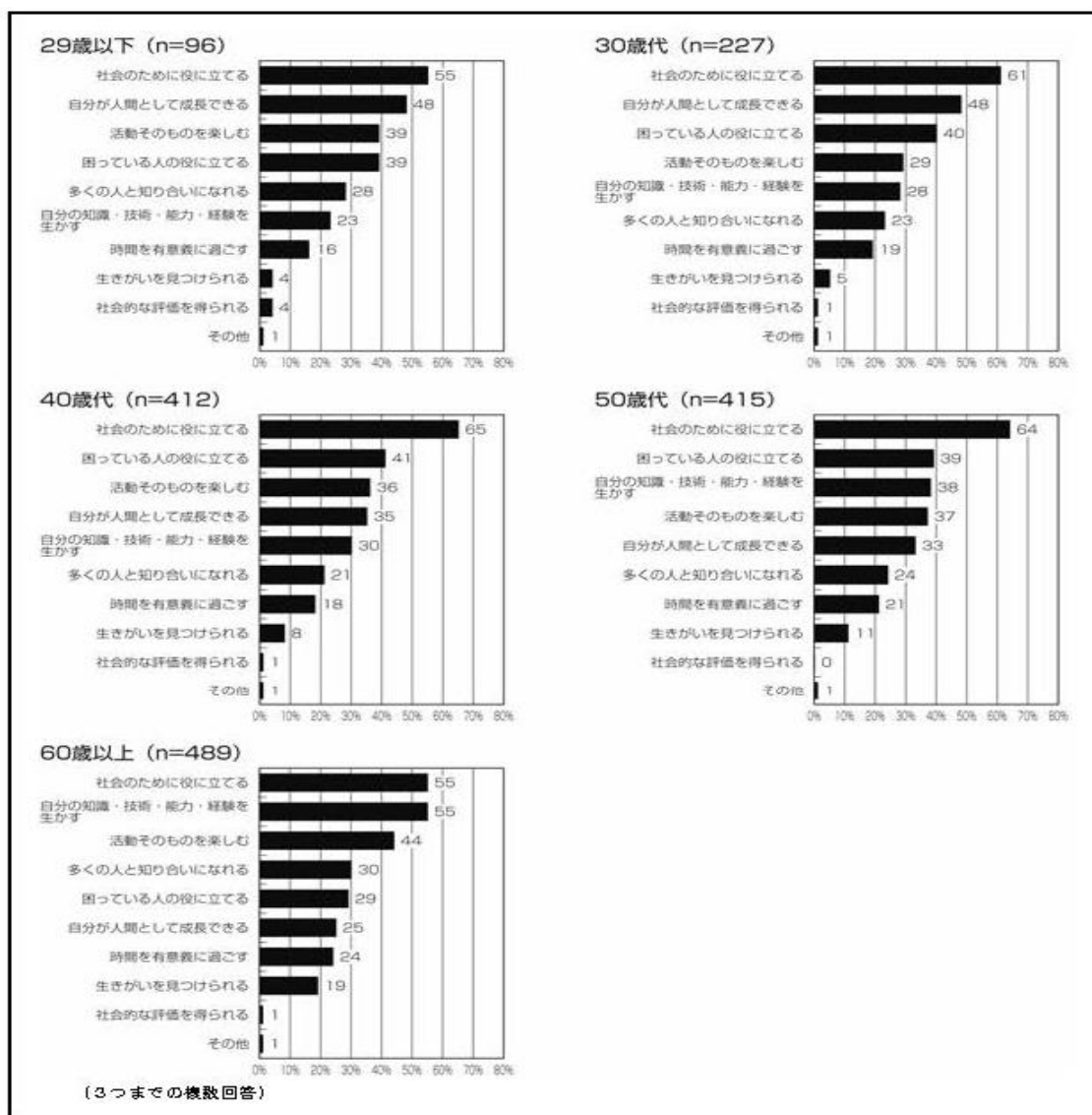
出典：公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo 2017）¹⁰⁷

この「自己の成長や自己実現という利己的な動機」の傾向は他の世代比較においても若い世代の特徴として見いだすことが出来る。他の調査において「ボランティア活動に参加する目的」を訪ねたところ、どの世代も「社会のために役に立てる」が最も多くなったが、第2位が世代ごとに変化があった。「自分が人間として成長できる」は若い世代ほど挙げる割合が高く、20歳代・30歳代では第2位となっている。その一方で、40歳代、50歳代で

¹⁰⁷ 公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）、2017「全国学生1万人ボランティアに関する意識調査2017」

は「困っている人の役に立てる」が第2位となっている。60歳代では「自分の知識・技術・能力・経験を生かす」が同率の第1位であった。

図表 1-7 ボランティアに参加する目的（世代別）



出典：財団法人経済広報センター¹⁰⁸

荒井は、このような学生のボランティア活動への動機づけについて研究を行い、ボランティア活動への参加行動と不参加行動を規定する要因について整理を行った上で、「ボランティア行動への生起・促進モデル」を提示した。さらに、そこから考え得るボランティア活動の推進方策等のポイントとして「①大学生のボランティア行動を規定する参加志向

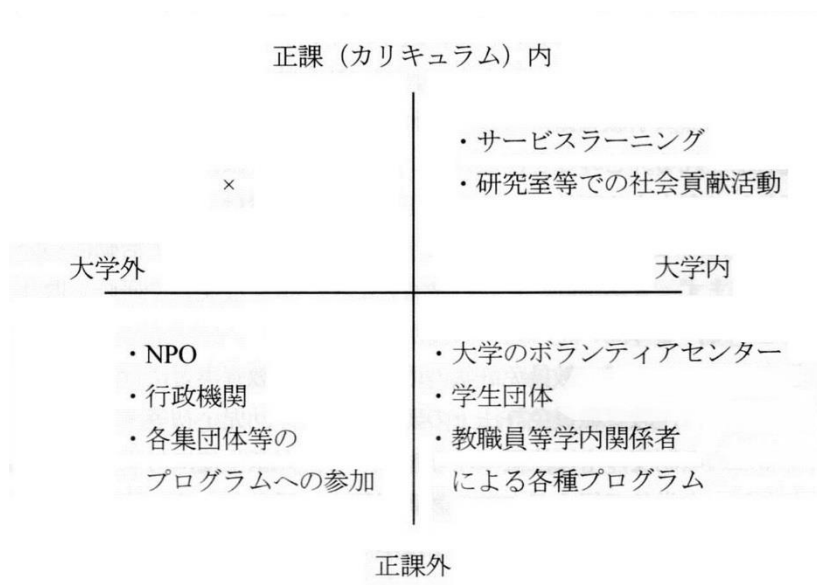
¹⁰⁸ 財団法人経済広報センター，2011「ボランティア活動に関する意識・実態調査報告書」p.26

動機が多様であることを理解する②ボランティア活動イメージや実際の活動内容に関して、広範なPR活動・啓蒙活動の一層の注力と戦略的工夫を講じる③各ボランティア志望者のニーズと実際のボランティア活動との間をきめ細かく的確にコーディネートする」¹⁰⁹という3点を指摘している。

第5項 大学におけるボランティア活動の位置づけ

大学の教育活動において、ボランティア活動はどのように位置づけることが可能だろうか。白川らはこの問いに対して、授業として単位を認める「正課」と部活動等直接単位とは結びつかない「正課外」という軸、さらに大学が主催ないし直接関与して行う「学内」でのボランティア活動と、学生が直接地域のNPOや中間支援団体を通して活動を行う「学外」という軸を示し、大学におけるボランティア活動を下記の図のように位置づけた。なお、この図に従った際の本研究で取り扱う「ボランティア活動」とは、正課外であり、かつ大学内で行われる学生たちの自主的な活動を前提としている。

図表 1-7 大学におけるボランティア活動の位置づけ（白川ら 2014）¹¹⁰



第3節 大学におけるボランティア支援の特徴とボランティアコーディネーターの役割

前節までは、学生ボランティアに直接的に関わる議論であったが、本節からは学生ボランティアの自己形成に寄与する支援のあり方を考える上で、大学におけるボランティア支

¹⁰⁹ 荒井俊行，2017「青年期のボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する要因」博士論文，早稲田大学，p.102-105

¹¹⁰ 白川優治・小林功英・立石慎治，2014「大学における災害ボランティア活動の教育効果を検討するために」小林功英編著『災害ボランティア経験を持つ大学生への教育効果 高等教育研究叢書 126』広島大学高等教育研究開発センター，p.4

援の歴史と共に支援に関わるボランティアコーディネーターの役割・専門性と大学に設置されるボランティアセンターの特徴を考えていく。

第1項 歴史的背景（大学ボランティアセンターと支援のあり方についての変遷）

学生ボランティアの歴史は、第2節でも述べたとおり、関東大震災の東京帝国大学のセツルメント活動まで遡ることが出来る。しかし、その支援についての実践や研究については、阪神・淡路大震災において「せっかく大勢のボランティアの善意があっても、受け皿や情報が無いために混乱を招いてしまった」¹¹¹との反省が大きな契機となっている。そのため、学生ボランティアの有効性や活動に参加した学生たちの変化や学習効果等教育効果が注目されて以降、教育効果についての研究は多く取り組まれてきたが、学生ボランティアをどのように支援するかについての積み上げは、実践・研究共に歴史が浅い。

大学におけるボランティアの推進・支援のあり方としては「ボランティア論」「NPO論」等の座学や「サービス・ラーニング」等の実際の社会貢献活動の体験を通した学びの場の提供など正課の授業の実施も考えられるが、単位に関わらず課外活動として取り組まれる「ボランティア活動」の支援としては、大学ボランティアセンターによる支援が重要な役割を果たすことになる。

大学ボランティアセンターとは、大学内に設置される中間支援機能を持った部署であり、主に地域からのボランティアニーズの集約とボランティア活動を希望する学生とのマッチング機能を有している。その他にも、既存のボランティア団体の相談支援やボランティア講座の実施など、センターによってその機能は変化する。名称はボランティアセンターだけでなく、ボランティア情報室、ボランティアステーション、サービスラーニングセンター等多様な名称が使われており、近年では地域連携に関わる部署がボランティアの窓口を兼ねていることもある。

日本における最初の大学ボランティアセンターは、1987年大阪キリスト教短期大学で開設されたと言われている¹¹²その後、1995年の阪神淡路大震災をきっかけに、関西圏を中心に設置が広がり、国の政策的な後押しもあり全国で開設が続いた。さらに、2011年の東日本大震災を契機に関東地域を含んだ東日本の大学でもボランティアセンターの設置が相次いだ。全国の大学ボランティアセンターの支援を行っている、NPO法人ユースビジョンによれば、2019年7月23日現在全国で169のセンターが設置されている。¹¹³

¹¹¹ 杉岡秀紀・久保友美、2007、「関西を中心とした大学ボランティアセンターの現状・課題・展望—サービス・ラーニングという新潮流を踏まえて—」『社会科学』79号、同志社大学、p.131

¹¹² 岡村こず恵、2011「市民活動における中間支援とは何か」『テキスト市民活動論』社会福祉法人大阪ボランティア協会、p.136

¹¹³ NPO法人ユースビジョン大学ボランティアセンターリソースセンター、「大学ボランティアセンター情報ウェブ」<https://www.daigaku->

大学ボランティアセンターでは、学生ボランティア支援を専門で担うボランティアコーディネーターが配置されているところが増えており、大学生の状況やボランティア活動に精通した専門スタッフによる支援が行われている。本研究の調査対象となった大学においても、東日本大震災へのボランティア活動が契機となり、2011 年度に復興支援ボランティアセンターを設置し、2012 年度には災害支援だけでなく地域における継続的なボランティア活動支援の拠点として、ボランティア活動支援センターとして名称を変更し、専門職のボランティアコーディネーターを配置している。

第2項 ボランティアコーディネーターの機能

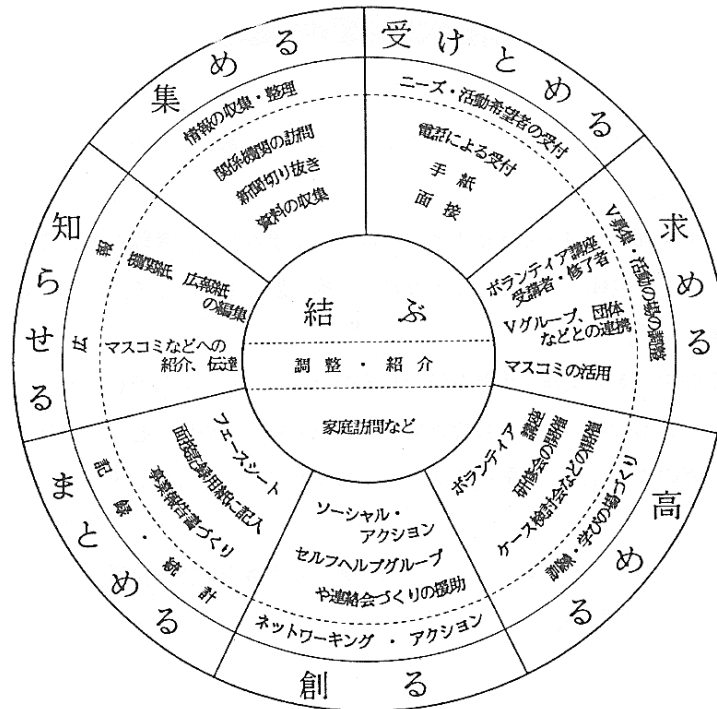
では、大学ボランティアセンターに配置されている専門職である「ボランティアコーディネーター」とはどのような機能をもっているのだろうか。コーディネーションという言葉には、「調整して全体の調和を生み出すという働き」と「各々の要素を対等（同格）にする」という意味があり、ボランティアコーディネーターとはボランティアに関わる「調整をする人」「対等（同格）にする人」という2つの意味があると理解することができる。筒井はボランティアコーディネーターの8の役割として、①受け止める②求める③集める④つなぐ⑤高める⑥創り出す⑦まとめる⑧発信する、を示しどの役割にもコーディネート
の基本的な意味である「結ぶ：調整する、対等にする」という機能があるとし、図表 1-8
のように図式化した。^{114,115}

vc.info/%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%83%9C%E3%83%A9%E3%82%BB%E3%83%B3%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88/（2020 年 7 月 5 日）

¹¹⁴ 筒井のり子，1990「ボランティア・テキストシリーズ⑦ボランティアコーディネーターその理論と実際」大阪ボランティア協会，p.66

¹¹⁵ 筒井のり子，2015「ボランティアコーディネーションの理解」『ボランティアコーディネーション力第2版』日本ボランティアコーディネーター協会，p.157

図表 1-8 ボランティアコーディネーターの 8 つの役割



大学ボランティアセンターに配置されたボランティアコーディネーターも基本的な役割として、筒井の指摘した機能を備えているものと理解することができる。

第3項 大学におけるボランティア支援の特徴

序章でも触れたように、大学に求められる役割は従来より「教育」と「研究」であった。それに加え、近年は第三の役割として地域への「社会貢献」が期待されている。そのような中で大学ボランティアセンターに寄せられる期待・役割とは「社会貢献」と「教育」の機能だと考えられる。社会貢献においては、行政や地域の NPO・地縁組織等からの依頼に基づく学生ボランティアのマッチングや協働したプロジェクトの推進など、地域の課題解決における学生ボランティアへの期待は高い。そして、従来からの役割である「教育」効果についても大きな期待が寄せられている。この点について、竹田は「青少年育成に関わるボランティアの一番大きな特徴は、“活動を通して青少年自身の成長”を目的としている点である。」¹¹⁶と指摘している。

先行研究においても同様の指摘がされている。杉岡らは、大学ボランティアセンターの存在意義を「大学生への教育効果」「社会・地域とのインターメディアリ機能」「大学の社会貢献」の 3 つであるとし、関西の大学ボランティアセンターを調査し「サービスマーケティングセンターとして機能を充実させることで、ボランティアセンターの抱える課題を解決

¹¹⁶ 竹田純子, 2010「青少年は、共に発見し成長するパートナー」『ボランティアコーディネーション力 2 級検定サブテキスト』日本ボランティアコーディネーター協会, p.140

でき、同時に大学における教育効果、社会的ブランド価値向上をもたらすことになる」¹¹⁷としている。また、石井は大学ボランティアセンターの教育機能の重要性は共通しているが、サービス・ラーニング機能を強化するサービ斯拉ーニングセンター化、正課科目とは一線を画し課外活動であるボランティア活動支援に特化するボランティアセンター、またその双方をミックスする方法の3つを示し「学生に対する教育的関与をどのように定義づけるか、その点における判断や選択によって、これからの大学ボランティアセンターは3つのタイプに分かれていくことが考えられる。」¹¹⁸と指摘している。ただし、これらの研究は東日本大震災より前に行われた研究であるため、被災地の課題解決という災害ボランティアのニーズが顕在化し、現在も多くの災害が立て続けに起きている状況とは少し時代背景が異なっていることを踏まえておく必要があるだろう。同時に、東日本大震災から10年が経過した現在、同震災がきっかけで災害・復興支援を主たる目的として立ち上がった大学ボランティアセンターにおいては、阪神・淡路大震災から10年を経て行われたサービ斯拉ーニングセンター機能の充実という議論は有効であろう。東日本大震災以降の研究においては、片岡の指摘が挙げられる。片岡は東日本大震災以降の大学におけるボランティア活動支援についての考察として「課外活動支援を目的としているとはいえ、大学ボランティアセンターの教育的な効果の蓄積は重要で有り、組織体制を安定させることが必要である。」¹¹⁹と指摘している。ただし、山本によれば「(現状として) 学生の教育的支援が第一的役割だと言われつつも、それが果たせていないことが大きな問題」¹²⁰と指摘しており、目指すべき方向性は一致しているものの、実態が追いついていない現状が指摘されている。

第4項 先行研究に見る自己形成を促す支援のあり方

大学ボランティアセンターにおいては、教育機能が重要であるとの指摘は共通しているが、その具体的な支援や関わり方にまで落として考察を行った研究はまだ少数に留まっている。また、サービ斯拉ーニング科目のように明確に学習効果を意図して活動を行う場合、「事前学習、活動、振り返り」という一連の学習プログラムがあり、その中でどのような学びや成長につながったかとの視点が考えられる。しかし、本稿においては、必ずしも特

¹¹⁷ 杉岡秀紀・久保友美、2007、「関西を中心とした大学ボランティアセンターの現状・課題・展望—サービス・ラーニングという新潮流を踏まえて—」『社会科学』79号、同志社大学、p.154

¹¹⁸ 石井 祐理子、2005「大学におけるボランティア活動推進の意義と課題—大学ボランティアセンターが目指すもの」『京都光華女子大学研究紀要(43)』京都光華女子大学、p.197

¹¹⁹ 片岡華絵、2015「要旨：大学における学生のボランティア活動支援に関する研究：大学ボランティアセンターを中心に」『龍谷大学大学院政策学研究(4)』龍谷大学大学院政策学研究編集委員会、p.249

¹²⁰ 山本浩史、2010「大学ボランティアセンターの教育的支援における課題について」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要16(0)』日本福祉教育・ボランティア学習学会、p.121

定の定められたプログラムのみによる影響を調査するものではない。学生ボランティアは、活動を行う中で多様な気づきと共に戸惑いや葛藤を抱えることになる。そのような時に、支援者であるボランティアコーディネーターがその葛藤にどのように寄り添い、本人が主体的に取り組めるよう促しているのか、その「関わり方」について注目していきたい。

数少ない、具体的な支援あり方について研究を行ったものとして、市川、石野、李が挙げられる。市川は、「学生と地域のニーズを汲みながら緩やかに活動をプロデュースし、学生の学びと成長を支えることがセンターの大切な役割」¹²¹と考え、コーディネーターとして学生の問題意識や活動への思いを受け止めると共に、学生が主体となって活動を立ち上げることを提案し、結果として「学生達はボランティアグループを自力で運営し、社会的な課題に対して周囲と協力して取り組むことで、社会の課題について実感を持って理解し、活動をしている大人との出会いの中で自己が目指すモデルを見つけたり、コミュニケーション能力を育むなどの機会を得た。」¹²²ことを報告している。また、大学ボランティアセンターの新しい役割として、「創造的リフレクション」を提示している。創造的リフレクションとは「大学ボランティアセンター（以下、VC）、大学生、地域内の責任主体が形成に関与する『場』において、当事者の潜在的なニーズの発見を支援し、同時にその充足に向けて枠組みを提示し関与することを目指して行うリフレクションである」¹²³とされている。

また、石野はその実践において、「学生主導」「参画型」「地域での活動」をキーワードに、『「出会った現場の中で、自ら問題を発見し行動を起こす」という経験を若いうちに持つことが、地域、ひいては社会を構成しているのは自分自身だと自覚することにつながる』と考え、学生の問題発見型参画を促すサポートを推進している。」¹²⁴とし、図表 1-9 のように学生の段階に合わせたサポートの実例を紹介している。

¹²¹ 市川享子，2011「大学ボランティアセンターの機能に関する考察：外国につながる子ども達を支援する学生 VG の立ち上げ支援事例」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 17(0)』日本福祉教育・ボランティア学習学会，p.47

¹²² 同上，p.47

¹²³ 市川享子，2015「創造的リフレクションの生成過程に関する実証的研究－震災復興過程における学生のリフレクション記録の分析を通して－」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 26(0)』日本福祉教育・ボランティア学習学会，p.28

¹²⁴ 石野 由香里，2009「学生の問題発見型参画を促すサポートのあり方--大学ボランティアセンターに集う者たちの創造的協働の実践経験から」『日本ボランティア学会学会誌』日本ボランティア学会，p.162-163

図表 1-9 学生の段階に応じたコーディネーターの関わり

学生の段階	コーディネーターの関わり	
参画に関しての素地が充分にあり、実務的な協力を除けばほとんど支援が要らない状態	なるべく彼らの手に任せ、内容や関わる人に広がりを持たせること、リスクの判断と現実的なアドバイス、学生には困難な部分の対外的交渉。	ファシリテートの必要性が 明るみになる 大学ボラセン の役割の一つ
意欲はあるが経験が無い学生	一通りの過程に寄り添いながら魅力的な参画経験が出来るような要素をちりばめる。	
「このような企画がしたい」と集まってきたわけではない学生	興味のある分野の素材を提供して自主的に企画に関わっていくよう導く。	

※（石野 2010）を元に著者が作成

石野の報告からは、学生の意欲や経験値、能力を見極めた上で、その力を最大限引き出すファシリテーターとしての関わりが求められていることが指摘されている。本稿においては、ボランティア活動を通して学生がどのように自主性を持って活動していくのか、その変化のプロセスを明らかにすると共に、変化のステージごとにコーディネーターがどのように関わっているかを明らかにしたい。

また、李は病院で学生ボランティアを支援した経験から、ボランティアコーディネーターとして最も配慮すべき、現場の人々が「ありがとうと言ひ合う」状態が実現するための指標として、

- ① 基本要件としてボランティア経験者であること
- ② 医療現場に関わる（医療行為だけとは限らない）活動に関与する専門職以外の立場である
- ③ 現場の状況から判断して思考し、活動を創造したり個人／小さな共同体（立場ごとのグループ）をつなぐことができるマネジメント力を有すること

の 3 点を挙げている。¹²⁵

この指標は病院でのボランティアコーディネーションという特殊性もあるが、マネジメント力についてより詳細に触れており、「ボランティアであるというプレイヤーとしての役割と、様々な立場の人々から成る現場の全体を見渡しながら、彼らが限りなく公平な関係になれる場を創出共通の価値観を構築していく変容過程の支援を続け、各々の満足が得られるようなサイクルを構築するマネージャーとしての役割の 2 つが求められる」¹²⁶との視点は、病院に限らず学生ボランティアに関わる支援においても共通していると考えられる。

以上の 3 つの先行研究から見える、学生の学びや変容、すなわち自己形成につながる関わりの視点として、以下の 5 点を見いだすことが出来る。

¹²⁵ 李永淑, 2015『小児がん病棟と学生ボランティア－関わり合いの人間科学－』晃洋書房, p.198-200

¹²⁶ 同上, p.200

- ① 学生の主体性を引き出すファシリテーターとしての関わり
- ② 学生の意欲・能力に応じた段階的な関わり
- ③ 学生が様々な立場の人と協働する際に対等・公平に関係を構築できるような場の設定
- ④ 活動全体を通したリフレクション
- ⑤ 全体を通して、指示・指導ではなく受容・共感に基づく支持的な関わり

これらの関わりは、学生の自己形成を促す関わりとして、重要な示唆を与えていると考えられるため、第3章における支援のあり方に関わる調査において、検証を行いたい。

第5項 ボランティアの抱える矛盾から捉える先行研究の課題

ここまで、学生ボランティアの支援に関わる先行研究の整理を行ってきたが、本稿の指摘しているボランティアという言葉の持つ矛盾という視点からも考察を行う。前項で扱った先行研究では、ボランティアそのものの定義に触れているものはなく、自発性・社会性・無償性等の原則を自明のものとして使用していることが伺える。そのため、改めてボランティアが矛盾する存在であることを前提として捉え直す必要があるだろう。

- ① 学生の主体性を引き出すファシリテーターとしての関わり
- ② 学生の意欲・能力に応じた段階的な関わり

については、「自発性×受動性」に関わる矛盾との関連が読み取れる。自発性を一面的に捉えた場合、主体性を引き出すことや意欲による段階的な関わりという発想は生まれてこない。これらの指摘は、学生達の自発性について強い、弱いなどのグラデーションのあるものとして捉えることを前提としている。さらにより強い自発性（ないし主体性）が望まれており、そのための関わりが支援者にも求められていることが指摘されている。

- ⑤ 全体を通して、指示・指導ではなく受容・共感に基づく支持的な関わり

についても「自発性×受動性」に関わる矛盾との関わりを見ることが出来る。指示・指導の関係性には上下の関係性となり自発性よりは、学生をより受動的な立場におく危険性を持つ。それに対して受容とは相談援助技術における考え方で、相談者のあるがままを受け止めることで、自分の価値観で相手を評価しない態度であり、本人の自己決定を促すことにつながる。結果的に、より自発的な態度につながっていくことが予想される。

- ③ 学生が様々な立場の人と協働する際に対等・公平に関係を構築できるような場の設定

本件については、矛盾したボランティアとの関連性が現時点では見いだすことが難しい。調査を通してどのような関連性を持っているかを明らかにしていきたい。

- ④ 活動全体を通したリフレクション

市川の指摘した、創造的リフレクションとは、「自らの行為だけの省察ではなく、社会創出を意図したものである。自己の生活世界変容だけではなく、環境や社会を変えていく力になっていくこと。目標として市民社会・共生文化を創造していくことに力点を置いて

いる。」¹²⁷とされる。学生ボランティアのリフレクションとして考えた場合、個人の発達や成長だけでなく、環境や社会への気づきを促し、市民社会の担い手として次なる行動を促す効果も視野に入れていると考えられる。そのため、社会性（利他性）×利己性という矛盾や社会性（公益性）×私益性という矛盾を受け止め、乗り越えるという視点にも関わってくるのが予想される。また、リフレクションを通して社会の矛盾について踏み込むということであれば資本主義社会における無償性という矛盾についての議論とも関わる可能性がある。

第4節 第1章小括

本章の第1節では、「大学生」「自己形成」について、その定義づけを行った。「大学生」については、大人でも子どもでもない青年期と位置付けられており、自己形成はその年代の発達課題として捉えることができた。また、ボランティア活動との関係では、大学生にとって固有の生活世界を作り上げる特有のイベントとして認識されている。しかし、大学受験や学業、アルバイト、就職活動等に比べると、必ずしも優先順が高いわけではなく、これまでその影響について、中心的に扱われてきたわけではない。大学生のボランティア活動による自己形成への影響を研究することは、改めて学生生活の選択肢としてのボランティア活動の意義を再確認するためにも有効であろう。

また、大学生の「自己形成」は、古くは E・H・エリクソンのアイデンティティ論に始まり、現代の青年心理学においても、重要な発達課題として捉えられており、青年研究の主要なテーマであることが確認された。また、本稿におけるボランティア活動による自己形成について、「ボランティア活動を通じた意識や行動の変化によって進展する過程」と定義して扱うものとした。さらに、ボランティア活動による自己形成の影響の全体像を捉えるため、「主体形成の社会教育学」を提唱する鈴木¹²⁷の議論を援用し、ボランティア活動を通じた主体形成過程が確認出来るかどうかを注視して行くこととした。

第2節においては、学生ボランティアの置かれている状況について整理を行った。その歴史を辿ると、関東大震災を契機に立ち上がったセツルメント活動にまで遡ることが出来る。セツルメントは、宗教家や学生などが都市の貧困地区など宿泊所、授産所など施設を設けて住民の生活向上のための助力をする社会事業、およびその施設、隣保事業を指す。1950～80年代における学生ボランティアの動向については、ほとんど調査等は行われてこなかったが、1995年に起きた阪神・淡路大震災では100万人を超えるボランティアの約半数は大学生であったことなどから、大学生とボランティアの関係を近づける契機となった。

学生ボランティアに関わる政策としては、2000年代に行われた「奉仕活動の義務化」に関わる議論を経て、「ボランティア活動」と「奉仕活動」の整理が行われ、文部科学省の

¹²⁷ 原田正樹，2012「福祉教育・ボランティア学習における創造的リフレクションの開発」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 20(0)』日本福祉教育・ボランティア学習学会，p. 41-52

提言において大学でのボランティア活動や推進体制整備が進められた。具体的には、「正規の教育活動として、ボランティア講座やサービス・ラーニング科目、NPO に関する専門科目等の開設、インターンシップを含め学生の自主的なボランティア活動等の単位認定等を積極的に進める、学生の自主的な活動を奨励・支援するため大学ボランティアセンターの開設など学内のサポート体制の充実、セメスター制度やボランティア休学制度等活動を行いやすい環境の整備、学内におけるボランティア活動などの機会の提供などに取り組むことが望ましい。」などが挙げられた。その後の調査からは、全国の大学・短大においてボランティア関連の科目や大学ボランティアセンターの設置が増加し続けていることが明らかとなっている。さらに、大学を巡る動きとして「教育」「研究」に加え「社会貢献」への期待が強まっており、その側面からも学生ボランティアへの期待が高まっていることを指摘した。さらに、学生ボランティアのリスクとして、教育面を強調することにより、社会的機能として「動員」に巻き込まれる可能性が高い点を確認した。

学生ボランティアの動機についての調査では、公益財団法人日本財団学生ボランティアセンターによる、大学生 1 万人を対象にしたアンケート結果を確認した。ボランティア活動を始めたきっかけとして「自己実現・自分自身のため」という利己的な理由が 27.5%と高く、「社会貢献への意識」の 8.2%と 3 倍以上の差があったことから、ボランティア活動が「自分のため」の活動として普及していることが分かる。世代ごとの活動動機を比較して見ても、「自分が人間として成長できる」という項目は若い世代に顕著に見られる傾向であることを確認した。また、白川らが行った大学で行われるボランティア活動の分類を参考にしつつ、本稿で扱う「ボランティア活動」はあくまでも正課外（単位としては認定されていないもの）であり、かつ大学ボランティアセンターが関与する大学内の活動を対象とすることを確認した。

第 3 節では、大学におけるボランティア支援の特徴について整理を行った。支援の窓口になる大学ボランティアセンターは、全国で約 170 設置されており専門のボランティアコーディネーターを配置しているところも増えている。そこで、ボランティアコーディネーターの機能的な 8 つの役割「①受け止める②求める③集める④つなぐ⑤高める⑥創り出す⑦まとめる⑧発信する」とコーディネート of の基本的な意味である「結ぶ：調整する、対等にする」という機能^{128・129}についてまとめた。また、大学におけるボランティア支援の特徴として、教育機能が重視されている点を指摘している。さらに、教育機能に注目した学生ボランティア支援に関わる先行研究の整理を行った。この分野での先行研究は限られているが、市川、石野、李の先行研究から見える、学生の学びや変容、すなわち自己形成につながる関わりの視点として

¹²⁸ 筒井のり子、1990『ボランティア・テキストシリーズ⑦ボランティアコーディネーター—その理論と実際』大阪ボランティア協会、p.66

¹²⁹ 筒井のり子、2015「ボランティアコーディネーションの理解」『ボランティアコーディネーション力第 2 版』日本ボランティアコーディネーター協会、p.157

- ① 学生の主体性を引き出すファシリテーターとしての関わり
 - ② 学生の意欲・能力に応じた段階的な関わり
 - ③ 学生が様々な立場の人と協働する際に対等・公平に関係を構築できるような場の設定
 - ④ 活動全体を通した創造的リフレクション
 - ⑤ 全体を通して、指示・指導ではなく受容・共感に基づく支持的な関わり
- の5つの視点を見いだした。

第2章 ボランティア活動による学生自身への影響と自己形成

第1節 調査の概要

第1項 調査の目的

本章では、大学4年間ボランティア活動（主として復興支援活動）として、震災直後は被災現場の瓦礫撤去や清掃活動、支援物資のお届け等に関わり、被災地のフェーズの変化により、仮設住宅で遊び場が少ない子ども達への遊び場の提供、仮設住宅に移られた方々のコミュニティの再生を目的としたおしゃべりサロン活動、地域のお祭りの担い手活動、災害でダメージを受けた漁業・農業支援活動、地元住民と共同した復興に関わるイベントづくり等の活動に取り組んだ卒業生を対象としてインタビュー調査を実施した。本調査では、学生時代に取り組んだボランティア活動を明らかにした上で、それらの活動を通じた学生自身への影響について、特に以下の3点について明らかにすることを目的とした。

1. 矛盾を抱えたボランティアによる葛藤と自己形成に与える影響を明らかにする
2. ポジティブ・ネガティブという二項対立ではなく、ボランティアが抱えている矛盾によって生じる葛藤、成長、自己形成への流れを捉える
3. かつてのボランティア活動の経験が、その後の人生においてどのような意味を持ったのかを明らかにする。

第2項 調査協力者の選定

調査協力者は、学生時代にボランティア活動の経験を有する者で、単に団体に所属してだけでなく、大学4年間を通して活発に活動に関わり、ボランティア団体の役員経験や新規プロジェクトの立ち上げなど、活動において中心的な役割を果たした卒業生（卒業後1～5年以内）に依頼することとした。この調査協力者の選定により、ボランティア活動への関わり方の強さから、活動による自己形成への影響をより明確に読み取ることが可能であると考えられる。また、卒業後社会人経験も含めて調査が可能である点も重要であり、学生時代からの自己形成の接続性を読み取ることが出来ると考えられる。さらに、支援者のあり方を考える際にも、共通の事例を元に活動者・支援者双方の視点を確認した上で「大学生の自己形成に寄与する支援のあり方」を検討することが期待できる。調査協力を依頼する際、インタビューに応じることは任意である旨を候補者にお伝えした上で、個別に依頼を行い10名のメンバーに承諾をいただいた。なお、本10名については、復興支援ボランティアの活動時に著者が直接・間接的に支援に関わったメンバーでもある。著者との関係性があることへの配慮として、直接的な利害関係は存在しないが、筆者からの質問に対して望ましい回答に誘導するようなことが起きないように配慮した。結果として、学生時代からのつながりと信頼関係により、当人たちの内面的な思いや経験について、率直に

語っていただくことができた。

第3項 倫理的配慮

インタビューの実施に際しては、立教大学の研究倫理規定を遵守した。インタビューを実施する際は、調査協力者に「研究協力同意書」として以下の項目についての内容を口頭で説明し、了解の上で署名をいただいた。

- (1) 研究の意義・目的
- (2) 研究の方法
- (3) 研究参加は自由意思でありいつ参加への同意を撤回しても不利益は生じないこと
- (4) 参加したくない実験、答えたくない質問等があれば、拒否できること
- (5) 予測されるリスク、危険、心身に対する不快な状態や影響
- (6) 取得データの扱い方
- (7) 取得データの保存方法
- (8) 研究結果の開示方法
- (9) 研究実施後の問い合わせ先
- (10) その他、個別の研究内容によって特に必要なこと

第4項 質問項目の内容

- Q1：ボランティア活動を始める前の自分について
- Q2：学生時代に取り組んだボランティア活動の内容と活動のきっかけ
- Q3：当時取り組んだボランティア活動によって自分自身が受けた影響
- Q4：進路選択にボランティア活動が影響したか。した場合は、どのような影響があったか。
- Q5：現在の仕事と学生時代のボランティア活動はどのような関連（影響）があるか。
- Q6：ボランティア活動が自分の生き方や人生観・価値観に与えた影響
- Q7：ボランティアを通じた転機はあったか？あるとすればそれはどのようなものか？
- Q8：ボランティアを通して、目標となる人との出会いはあったか？あった場合、それはどのような人物でどのような影響があったか？
- Q9：活動を通して感じたボランティアの課題や問題点は何か？

第5項 調査方法

《面接方法》半構造化面接

《インタビュー時間》1回 60分程度

《分析方法》

分析方法については、インタビューの内容を全て文字起こしの上で、事例間の文脈の相違に注意を払いつつ、ボランティア活動による矛盾点の抽出と共に、その矛盾が活動者である学生にどのような影響を与えているかを注視し、事例横断的な分析を行った。本章で

は、主に事例横断的な分析の結果を中心とした記述を行った。

第6項 調査の意義と限界

先行研究でも触れたようにボランティア活動における活動者に与える影響については、様々な研究が行われており、特に大学生を中心とした若者を対象とした研究は盛んに行われている。しかし、その多くは短期的な活動の影響をはかるものとなっており、長期的な影響についての先行研究は見当たらない。このことは、大学卒業後も継続して関わるのが難しいという問題もあると考えられる。そこで、本調査においては、ボランティア活動の影響が活動者の自己形成や生き方にどのような影響を与えたかを明らかにすることを重視する。すなわち、活動者本人が、過去に行ったボランティア活動をどのように捉えているのか、またどのような意味を持つのかを探究する試みとなる。

同時に本調査の限界として、10名という限られた事例による知見となるため、普遍性という点においては今後の課題であると考えられる。

第2節 調査の結果

第1項 調査協力者の属性とインタビュー結果

調査協力者の属性は、以下の10名である。

「10名の属性と面接の概要」、「活動開始前の状況（Q1、Q2）」、「活動を通じた自身の変化・影響（Q3、Q4、Q5、Q6）」、「変化の要因（Q7、Q8）」、「活動の課題や問題（Q9）」は以下のとおりである。

図表 2-1 調査協力者 10 名の属性と面接の概要

NO	名前	取材日	性別	年齢	学生時代のボランティア活動	インタビュー時の職業
1	A	第一回 2019年3月22日 第二回 2020年7月4日	女	24歳	1年次から復興支援のボランティアに関わり、3年次からプロジェクトリーダーとして関わり、4年次に被災地の高校生と一緒にプロジェクトを立ち上げる企画に参画。	復興支援員として街づくりのコーディネーター業務に従事（2年目）
2	B	2019年4月18日	男	27歳	東日本大震災の復興支援活動を約2年半。3年次に代表。学内のボランティア活動の支援メンバーとして1年半活動していた。	卒業後半年間被災地企業でのインターンシップを経て一般企業に就職（3年目）
3	C	2019年5月1日	男	22歳	復興支援団体に所属して4年間活動。3年の時は代表。	営業職、内装の営業職、現場の施工管理（1年目）
4	D	2019年5月1日	男	23歳	大学1年次から復興支援団体の立ち上げに関わり、宮城県仙台市にボランティアに行っていた、2年間副代表として関わった。	非常勤の小学校教員（1年目）
5	E	2019年5月2日	男	22歳	中学3年生の夏東日本大震災で被災し家も津波で全壊した。ボランティアに関わり始める。高校2年生の時に復興支援の団体を立ち上げた。大学でも復興支援団体を立ち上げて、4年間代表として活動した。震災の経験を伝える語り部活動も行った。	障害者福祉系の企業（1年目）
6	F	2019年5月2日	男	23歳	4年間。復興支援ボランティア団体に所属。3年次代表をやっていた。	一般企業就職後、退職し現在大学生（1年目）
7	G	第一回 2019年5月17日 第二回 2020年7月12日	女	24歳	大学1年生の時から復興支援の団体に所属し、3年次には代表に就任。学内では、被災地の魅力を発信するイベントを企画した。	葬祭関連企業（3年目）
8	H	第一回 2019年5月18日 第二回 2020年8月19日	男	28歳	大学1年の時に東日本大震災が発災。復興支援活動に4年間関わり、2～3年次は代表を担った。	NPO法人で勤めていた。4年間働いた後は、農業法人（1年目）で働いている。
9	I	2019年5月22日	女	25歳	1年生の4月から復興支援ボランティア団体に入り、2年生の時から学生のボランティアを応援する活動もやっていた。その他、他大学の学生のネットワーク活動にも参加	会社員（電力危機の会社の総務）（4年目）
10	J	2019年5月30日	男	27歳	大学2年生の時から携わる。主に復興支援の団体に所属し、代表を務める。学内の学生ボランティアコーディネーターと県域ネットワークの立ち上げにも関わる。	社会福祉協議会職員（6年目）

図表 2-2 活動開始前の状況（Q1、Q2）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
ボランティア活動前の自己認識	自分に自信が無い、ネガティブ	人間不信・自分を認められなかった	反抗的な高校生	不良高校生	部活（野球）大好き少年	不良高校生	内気・ネガティブ	引きこもり・人と関わりたくない	部活・生徒会で活躍	受け身の姿勢
活動のきっかけ	友達に誘われた	被災地出身・自ら進んで参加	知らない所に行きたい・自ら参加	友達に誘われた	東日本大震災で被災し、支援に入ったボランティアに誘われた	友人を作るため参加	自分を変えたいと思い参加	変わりたいという意識と活動への誘いにより参加	震災ボランティアに関わりたいたいと考え参加	輝いていた友人に触発され活動に参加

図表 2-3 活動を通じた自身の変化・影響（Q3、Q4、Q5、Q6）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
当時受けた影響	挑戦が楽しいと思えるようになった	使命感を果たせた達成感	人に興味を持つようになった	人を認める事が出来るようになった	視野が広がった	相手の立場に立って考える	自分を出せるようになった	人と会うのがおっくでなくなった	震災が人ごとではなくなった	やれば出来る実感
進路選択への影響	復興支援員（地域のコーディネーター）	人の居場所を作りたい（復興支援）	無関心から進路を真剣に考えるようになった	なし（元から小学校教員志望）	障害支援	福祉関係への関心	地元志向・死と向き合う職業	なし（元からNPO志望で変化なし）	地元志向	支え合える地域づくり・社会福祉協議会
現在の業務への影響	コーディネーション業務が仕事になった	人の居場所づくりへのこだわり	責任を持って取り組めるようになった	教員が人の生死に関わる仕事であることを学んだ	親御さんとの関わりが慣れている	国家資格取得に向けて勉強中	売り上げ重視の会社との折り合いが難しい	やりたいと思ったから行動に移す	コミュニケーション能力の向上	ファシリテーションスキル向上
価値観への影響	生きる意味が見つかった。チャレンジ精神。	人生楽しめるようになった	人や社会に対して肯定的に捉えるようになった	これからつく職業（小学校教員）への意識が変わった	自分の意志を行動に移せるようになった。困ってる人がいたら助けてあげる。	人の痛みを考えるようになった	自分を認められるようになった	カッコいい大人になる。自分で自分の人生を選ぶ。	社会貢献への意識	まずはやってみるというスタンス

図表 2-4 変化の要因（Q7、Q8）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
活動による転機	プロジェクトリーダー経験	初めて参加した活動	なし	なし	ボランティアでお世話になった人との出会い	活動先で叱られた体験	「自分から動こう」と思った瞬間	初めての活動	現地の方との出会い	自ら企画立案して活動を実施
ロールモデルの発見	大学コーディネーター	大学コーディネーター	受入れ先の団体代表	なし	活動に誘ってくれた大学生	所属団体の先輩・大学コーディネーター	所属団体の先輩	大学コーディネーター・受入先の方	大学コーディネーター	大学コーディネーター

図表 2-5 活動の課題や問題 (Q9)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
活動の課題・問題点	善意の押し付け・自信過剰に陥る危険性	自信過剰と後悔		周りの目を気にしすぎるようになった	身内の選挙に利用された経験	活動に没頭しすぎて他のことが疎かになる	社会の現実とのギャップ	活動に没頭して他のことが疎かになる	一人一人の意識の差	活動の継続生の問題

第2項 見いだされたボランティアの矛盾

序章第4節第2項において本研究の枠組みとして、ボランティアの持つ矛盾について指摘しているが、インタビュー調査からも自発性・社会性・無償性それぞれの孕んでいる矛盾点を確認された。具体的には、自発性の矛盾では、自発的な動機ではなく、「友人に誘われて」など受動的な理由で活動に参加した者。社会性の矛盾では、利他的な動機ではなく「知り合いがほしい」との利己的な動機で活動を始めた者。無償性の矛盾においては利益優先の企業における葛藤を抱えた者等が挙げられる。インタビューにおいて見いだされた、ボランティアの孕む矛盾点とその事例については以下のように整理を行った。次項より、これらの矛盾点による自己形成への影響について検討を行う。

図表 2-6 見いだされたボランティアの矛盾

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
見いだされたボランティアの矛盾【自主性】	受動性との矛盾：受動性からのスタート			受動性との矛盾：受動性からのスタート			受動性との矛盾：受動性からのスタート	受動性との矛盾：受動性からのスタート		受動性との矛盾：受動性からのスタート
見いだされたボランティアの矛盾【社会性】	利己性との矛盾：承認されるための活動	利己性との矛盾：承認されるための活動			私益性との矛盾：身内の選挙に利用された自分の活動	利己性との矛盾：自分のためのボランティア			私益性との矛盾：自己満足という批判	
見いだされたボランティアの矛盾【無償性】							資本主義との矛盾			

第3項 自発性における矛盾と自己形成への影響～受動的態度から自発的・積極的態度への変容～

1. インタビュー結果から見る受動性から自発性への変化のプロセス

受動性×自発性の矛盾について、個人プロセスを追うことでその変化を見ていきたい。ここではJのプロセスに注目しながら、他のメンバーにおける類似の変化についても確認していきたい。

Jはボランティア活動の直接的なきっかけこそ、「震災の映像を見て何か出来ないかなと思って」と、自発的に活動を始めたと述べているが、活動を始める前の自身のスタンスについては「僕っていずれ何か降ってくるんじゃないかなと思っている、誰かが手助けしてくれるだろうという甘い考えがある。常に受け身だった。」と述べている。そんな常に受け身で受動的なJがボランティアを始めるきっかけになったのは、別の大学に進学した地元の友人の影響であった。その友人が主催したミュージカルを見に行った時、「目の前に同学年の人たちがこんなに生き生きとしていて、楽しそうで、なんかすごい自分とこう比べたときに、なんか、素直に思ったのがこいつらに負けたくないな、自分のこれからの後3年間をいい学生生活を送りたいな」という思いになった。そんな思いを抱きつつ大学1年の3月に東日本大震災が起き、「脳裏にあったのは輝いていた学生の姿で、自分に出来ることとして、この復興支援をやりたい」との思いで活動をスタートした。

しかし、当初取り組んだボランティア活動は、Jが想像していたような、輝くような活動では無かった。スタッフのリーダーとして募金活動や文化祭での売り上げを支援金として送る活動等は展開していたが、「最初は学生の提案では無く大学の方で面倒を見ていただいた。始めて半年間くらいはずっと『これやって・あれやって』と言われてやっていて、自分達の活動になっていないなと思って。ずっともやもやしていて」とあるように、基本的には大学側（教職員）から指示のあった内容に取り組むだけの受け身の活動であり、それに対して、もやもやを募らせていくことになる。そのことを愚痴った際にもらったアドバイスが、Jの変化のきっかけとなる。「日頃の鬱憤愚痴を、お酒を交えながら言ったら『やればいいんだ』と言われ、素直にそれを聞き入れることが出来た。その日に家に帰って企画書を手書きで書いて担当の職員さんに出した。色々職員に意見をもらい企画書を書いた。担当の職員さんには『こういうのをまっていたんだよ』といわれた。それから、（被災地に桜の苗を届ける）桜プロジェクトが誕生した。その後、ボラセンの運営委員会に足を運んで、こういうことをやりたいという提案をしたら厳しい意見を色々いただいた。なんでこんな厳しいことを言われているのか分からなかったが、悔しいけどちゃんと自分達の話を聴いてくれたから答えてくれたんだなと思って、それは嬉しかった。」ここで初めて自分たちの活動が出来ているという実感を持ち、「初めて自分達の活動になったなと思って、なんかむこうの現地の『咲くのが楽しみ』という言葉も自分ごとのように嬉しかった」という達成感を味わうことになった。

この成功体験は、Jの姿勢を大きく変化させることになった。「これやりたい、やろうという勢いがついたのは、桜のことがきっかけだったと思う。その頃から、ああ自分が動くことによって色々環境変わるんだな。今まで声掛けられなかった先生からも声を掛けられて、自分が動くといくらでも環境は変わるし、見てくれている人はいてくれているんだなと思えた。毎日がいきいきしたというか、考えるのが楽しくなったというか、何が出来るかなという。」このように、自分が動くことによって周辺の環境が変化する実感を持ったことで、より積極的に行動していくようになっていった。その活動は、自身の復興支援団体の活動に留まらず、他大学の復興支援団体とのネットワーク形成やイベントづくりや学内のボランティア支援などにも及んだ。この「まずは自分が率先して動く」という姿勢は、その後のJの基本的スタンスとして定着していくことになる。「高校生の時に比べると、たぶんやってみようというのはすごい自分の中ではありますね。今の仕事でも『とりあえずやってみるか』と思う。ていうか、その方が楽しいということに気づいたのかも知れない。見ているだけで無く、自分がその中心に行った時に楽しい、そこに気づいちゃったなというのはありますね。」また、Jは活動を通して、「僕の理想は一人暮らしの人がいたら大丈夫かな？と気づける地域を作りたい。」との気づきを得る。結果、地域の支え合いを推進する福祉団体に就職することとなる。「一つの仮設住宅にいろんな人が集まって、でもそこはいろんな地区から来ているから、顔は合わせるんだけど会話のきっかけが無いな、でもそれって被災地だけの問題じゃなくて、全国どこでもご近所の関係の希薄化ってあるわけで、でもそう日常の繋がりが無ければ非常時はきつこう自分自分になってしまって、助け合いというものは無くなるのかなって思うし。色々個人主義が進んでる中でもやっぱ誰かが気に掛けるということを僕は地域のなかで作っていききたいと思えた。」

ここまで見て来たように「常に受け身だった。」(①活動前のステージ) Jは、友人のミュージカル上映に触発され「いい学生生活を送りたい」と思い「震災の映像を見て何か出来ないかなと思って」ボランティア活動の最初の一步を踏み出す。(②ボランティア活動への参加のステージ)当初は、運営メンバーとしていくつかの活動に関わったものの大学側の指示に従うのみの活動(③指示されたことを行う受け身の活動ステージ)に不満を募らせるが、自分から企画書を書き提案を行うことで大きな変化が訪れる。(④活動からの学びを糧に既存の活動を修正・運営するステージ(⑤自ら課題を発見しその解決に向けて活動を生み出すステージ)結果として、「とりあえずやってみる」というスタンスと「顔の見える関係性を作る」という自分自身のスタンスが明確になり(⑥自分自身の軸を定め、自分自身の人生を歩むステージ)その後の進路にも影響を与えていることが伺える。当初受け身だったJが、自分自身の人生の主人公として、より自発的・積極的に物事に取り組む姿勢に変化してきたことが分かる。

2. 自発性×受動性の矛盾から捉える自己形成

本項では、学生の成長や自己形成を考える上では、ボランティアを単に自発性のある活動と定め、学生の自発性を前提として捉えるのでは無く、「自発性×受動性」という矛盾を抱え、その中で葛藤し変化する存在として捉えることで、リアルな姿を見いだせるのではないかと考え、インタビュー内容の分析を行った。

10名のインタビュー内容を整理したところ、ボランティアを始める前は受動的だった学生も、当初より自発性を持って活動に参加した学生も同様に、活動を通してより積極的姿勢に変化していくという共通のプロセスがあり、その流れは大きくは以下のような流れを辿っていた。当然、個々で状況は異なるため、全員が同様の流れを経るわけではなく、最終的に全てのものが自分の人生を歩む軸を明確にできたわけでは無かったが、モデルとして以下の各ステージにまとめることができた。

- ① 活動前のステージ
- ② ボランティア活動への参加（多様な参加動機）のステージ
- ③ 指示されたことを行う受け身の活動ステージ
- ④ 活動からの学びを糧に既存の活動を修正・運営するステージ
- ⑤ 自ら課題を発見しその解決に向けて活動を生み出すステージ
- ⑥ 自分自身の軸を定め、自分自身の人生を歩むステージ

以下では、順番にそれぞれのステージについて、インタビュー内容に触れながらその内容について確認を行う。

① 活動前のステージ

自発性を前提としたボランティア活動では、活発な人間が活動を展開しているというイメージがある。もちろん、そのような明確な意志を持って活動に取り組むものも多くいる。しかし、今回調査を行ったメンバーからは、必ずしもそのような活発な姿勢だけでは無く、むしろ活動を始める前には受動的な姿勢が見受けられた。「人と違うことはやらない。自分に自信が無いとか、ネガティブとか、自分が無理だと思うことには手を出さない。」

(A)、「活発な性格はしていなくて」(C)、「とにかく暗くて、なんかこう、新しいこと始めたいということすら思っていなかった。そうは思っているけど、どこかで変わりたいなという自分もいて。何かやってみたいという思いがあったのかな。」(G)「元々大学生活を送っていく中で危機感があって。そもそも、人と関われないし、このままじゃやばいだろうし。」(H)「どちらかというと一歩引くような性格だった。僕っていずれ何か降ってくるんじゃないかなと思っている、誰かが手助けしてくれるだろうという甘い考えがある。常に受け身だった。」(J)同時に、G、H、Jのように受動的な自分から変化したいという願いも読み取れた。

② ボランティア活動への参加（多様な参加動機）のステージ

ボランティア活動を始める一歩には様々なきっかけがあることは、第一章でも触れた日本財団学生ボランティアセンター(Gakuvo)が実施した「全国の大学生 1 万人を対象にボランティアに関する意識調査のアンケート」の結果からも読み取れる。今回のインタビュー対象者たちも、モチベーションやその目的も多様である。以下に、ボランティア活動を始めたきっかけについての本人の語りを整理した。

A：友達に誘われて

B：いつかは関わりたいと思っていてチラシを見て

C：面白そうだなと何となく思って

D：仲のいい友人に誘われて断れずに

E：自分の家が被災しボランティアに助けられたので自分もと思い

F：知り合いが欲しい、先輩と仲良くしたいと思い

G：どこか変わりたいなと言う自分がいて。ただ、明確な理由はわからない。

H：人と関われないしこのままじゃやばい。変わらなきゃと思って。

I：何か東北の人のために自分の出来ることをしたいなと思って

J：震災の映像を見て何か出来ないかなと思って

図表 2-7 復興支援ボランティアを始めたきっかけ

受動的	やや自発的	自発的
A・D	C	B・E・F・G・H・I・J

表のように、B、E、I、Jのように他者の為に純粋に活動を行いたいという動機で活動始める層も存在するが、F、G、Hのように自発的ではありつつも主たる目的として友人や先輩との関係づくりや自分自身を変えたい等、自分のために活動を取り組み始める層も存在した。また、受動性×自発性という流れで考えると、AやDのように友人の誘いに対して断れずに参加することになったという、まさに自発性とは逆に受動的な態度によって活動に参加していることがわかる。また、Cのように「なんとなく」というようなやや曖昧な動機によって活動に参加しているなど、自発性を前提とするボランティア活動において多様なスタートがあることがここからも確認することができる。また、活動の参加動機が自主的なものだからといって、活動への関わりや態度が積極的であるかは必ずしも一致していないことは活動前のG、H、Jのコメントからも明らかである。

③ 指示されたことを行う受け身の活動ステージ

ボランティア活動に関わるとしても、そこには多様な関わり方がある。通常初めての参

加者の場合、すでに実施内容が決まっているプログラムへ参加することになる。そこでは、指導者や活動経験者が事前にプログラムを作っており、当日も指示だしなどを行っていることが多い。そのような場では、対象者との関わりや自分自身の行動の工夫の余地はあるものの、活動の枠組みとしてはすでに決まっており他者の指示に従いながら活動に関わることとなる。自発的に「参加」はしたものの、誰かの指示の元に行動するという意味では、受動的な立場でもあると言える。その様子は、Jの「最初は学生の提案では無く大学の方で面倒を見ていただいた。始めて半年間くらいはずっと『これやって』『あれやって』と言われてやっていて」といった言葉からも読み取ることが出来る。10名の最初の活動は以下のようになっている。

【大学の復興支援ツアーに参加】A・B・C・F・G・I・J

【その他の参加形態】

D（友人の案内に従い活動）

E（被災地に入るボランティアに付いて活動に参加）

H（瓦礫撤去の活動に参加）

しかし、そのような活動を通して、学生達は様々な気づきや葛藤を経て学びを深めていく。インタビューからも活動を通して、「自分が頑張れば見てくれる人がある」（A）、「自分の想定を越えた被災の状況があって唖然として、何かやらなくちゃという使命感がでた」（B）、「やっぱり人と出会うのが楽しかった」（D）、「いろんな人があるんだなという風に視野が広がった」（E）、「（振り返りで）先輩が泣きながら話していたんですね。僕それにすごく影響を受けて」（F）「ボランティアで一つよりどころができると、全てが楽しくなると言うかやってみようという思いになる」（G）、「そこ（被災地）で感じたのは、自分の無力感と疑問ですよ」（H）、「現地に行ってるから、なんだろう、人ごとじゃ無いというか」（I）、「自分達の活動になっていないなと思って。ずっともやもやして」（J）

④ 活動からの学びを糧に既存の活動を修正・運営するステージ

それらの気づきや葛藤の中での学びを受け、自分なりの活動の在り方を考え従来のプログラムに対する改善や修正を加えるようになっていく。具体的な関わり方としては、いち参加者からプロジェクトリーダーなどの運営スタッフとして、プログラムを作り運営する側へと変化していくこととなる。指示を受けて行動する立場から、自分たちで考え行動し、他者に対して指示をする側に回ることになる。と同時に活動自体は既存の枠組みの中で行われるため、既存の枠組みの影響を大きく受けている。ここに来て、自発性がかなりのレベルで発揮されており、インタビューからも自分で考え自分で行動していく積極的な姿勢が見受けられる。

【大学の復興支援ツアーのプロジェクトリーダー経験】A・B・C・F・G・I

【復興支援団体の代表・副代表経験】B・C・D・E・F・G・H・I・J

「プロジェクトリーダーの時に初めて企画を立てたんですよ。その時にわりと頑張ったし、わかんないなりに、わりと評価してもらえた。みんながよかったと言ってくれた」

(A)、「ボランティアツアーでリーダーをつけたり、チームメンバーそれぞれに役割をもって動かして、自分なりの変革を加えて、で、それできっかけになったかはわからないですけど、今までのツアーとは違った一体感とかが生まれましたし、ようやくボランティアやってきて良かったなという感覚が生まれた」(B)、「ツアーは大きかったかな～。何でしょうね。色々と活動と遊んだりしましたし、現地の方々のお話も聴いたし、交流会も企画しましたし、色々やらせていただいて、それはそれですごく楽しかった。」(C)。

⑤ 自ら課題を発見しその解決に向けて活動を生み出すステージ

一つのプログラムに対して自分たちで作り上げ運営する立場を経験したことで、活動を自ら創り出す困難さとともにその魅力に気づくことになる。同時に、そのプログラム自体は大きな枠組みが定まっており、その枠組みの中での工夫であることに気づく。そこまでの活動で満足する学生も一定層存在するが、中には次なるステージとして、自ら新たな課題設定を行い、これまでの枠組みを超え新しい活動やプロジェクトを創造するものもいる。それは、何も無いところから課題を発見し、その解決に向けて具体的なアクションプランを立て、実際に活動を展開するという取り組みとなる。その過程においては、自分一人だけでは達成できないことも存在するため、仲間や教職員や現地の支援者の力を借り、プロジェクトを形成していくこととなる。それらのプロジェクトが継続化することで、新しい団体として立ち上げることもある。

A：サービスマーケティングプログラム「被災地の高校生の復興プロジェクト支援」に参画

B：全国の学生を被災地に送る県代表に就任

E：大学1年次より復興支援団体を立ち上げる

F：高校への被災地の伝承活動

G：被災地の今と魅力を伝えるフェスティバルの開催

H：被災地でインターンシップに参加

J：自ら企画書を書き新たなプロジェクトを立ち上げる

⑥ 自分自身の軸を定め、自分自身の人生を歩むステージ

ここまでの活動を経る中で、学生達の中で「自分が本当にやりたいこと」「これからの生き方で大切にしたいこと」等、自分なりのこれからの生き方に関わる軸を発見していく

ことになる。それは、単に目の前のボランティア活動に対する取り組み方に留まらず、卒業後の進路決定などにも影響を与えることとなる。また、このステージになると、他者から指示を受けた内容についても、自分なりに解釈を行い、指示の中から自分なりの課題を設定し自ら新しい活動を展開していく等の創造性の発揮も見受けられる。

A：自分が肯定したスキルのことが活かせるものがコーディネーター。自分の生きる意味が見つかった。

B：NPOとかそういう生き方をしてもいいかなと思いましたね。人の居場所を作りたい

C：人って面白いんだな～と思えるようになった。人に興味を持つようになった。

D：進路選択、それには影響はしてない。敵をつくらなくなった。昔はいっぱいいた。

E：困っている人がいたら助けてあげる。

F：人の痛みを考えられるようになった。それは身近な人でなくても他人でも。

G：地元の人のために働いているお父さんの姿がかっこいいなと思えるようになった。「人が亡くなるってどういうことなんだろう？」という大きなまずそのテーマで自分の中で考えるようになって。

H：かっこいい大人になるという目標ができた。

I：地元を大切にしようと思った。

J：とりあえずやってみる。僕の理想は一人暮らしの人がいたら大丈夫かな？と気づける地域を作りたい。

3. 自発性と受動性の一致点

一見すると学生たちはボランティア活動を通して、受動性から自発性へと一直線上に変化していくようにも捉えることができる。確かに学生達は活動を通して、より積極的な姿勢に変化している。しかし、その中にある受動性についても認識することが必要であると考えられる。「ボランティアは、自発的だが、同時に受容性・受動性の面ももっている。ボランティアを求めている者が、まず第一に存在しているのである。この現実を前提にして、これを受け入れ、その求めに応じて勤労を贈与していこうというのがボランティアの出発点である。この始発の段階については、受動的であるのが原則であろう。」¹³⁰との近藤の指摘にもあるとおり、ボランティア活動はまず他者や社会からの求めや必要性があって成立するものである。単に自発的にやりたいことだけをやっているだけであれば趣味の活動であり、時としてありがた迷惑な活動でもあると言える。そう考えると、共通の変化のプロセスは、単に自発性が増したと捉えるのではなく、求められていること（受動性）と引き受け、取り組んで行こうとすること（自発性）の一致点の変化として捉えることができる。ステージが変化するごとに、求められているものは具体的なもの（活動への誘い、

¹³⁰ 近藤良樹, 1998「ボランティアと個人の自発性」『HABITUS (1998年5月)』西日本応用倫理学会, p.35-47

活動時の具体的な指示、明確な活動内容）からより抽象的（地域のニーズ、社会の抱える課題等）なものへと変化している。

自発性の矛盾を通した自己形成とは、単に「やりたいことをやる」ということではなく、他者や社会が求めているもの即ち受動性と自分自身のやりたいこと（自発性）、やらねばならないと感じるもの（使命感）の一致点を見いだし、そのことに対してより積極的に取り組んで行こうとする姿勢であると考えられる。

4. 自己形成の要因について

自発性が前提とされるボランティア活動において、むしろ受動的に参加する学生が存在することについても、上記のように考えると別の捉え方が可能となる。つまり、友人に誘われた（受動性）について、その誘いを受けて行動した（自発性）という、受動性と自発性の一致である。また、指示待ちの受動的立場に留まる学生についても、指示を受けた活動内容（受動性）について、引き受けて取り組む（自主性）限りにおいて、そこには受動性と自発性の一致点が見いだせる。では、ボランティア活動を通して学生がより積極的になり、役割を拡大していくこと、さらには、自分の関わるボランティア活動に留まらず、自分自身の人生におけるテーマを設定しその後の進路決定にまで影響を及ぼしていることについて、どのように考えることが出来るだろうか。

ボランティア活動は、一度ニーズを引き受けたからには、その責任を問われることになる。それは、金子が指摘するように「自分がすすんでとった行動の結果として自分自身が苦しい立場に立たされる」¹³¹ことでもあるが、同時にその苦しい立場を引き受けたことによる達成感や他者からの評価、そして活動を通した出会いなどを通して、学生自身への変化にもつながっていくと考えられる。もちろん被災経験による高い使命感や自分自身を変えたいとの強い思いなど、本人が当初から持っている動機に影響される部分はあると考えられる。そのためここでは、高い動機がなかったとしても結果的に自発性や積極性が高くなっていく外的な要因について、インタビュー結果をもとに考察を行う。

(1) 震災による被害の実感

2011年3月11日に起きた東日本大震災はその地震による直接的な被害以上に、岩手・宮城・福島の前北3県を中心とした太平洋沿岸地域に押し寄せた津波による被害が甚大なものであった。学生ボランティアは、被災地に赴くことでこれまでテレビ等でしか知らなかった被害の実態を目の当たりにすることで、影響を受けていることがインタビューからも見えてくる。

- ・ 初めて（被災地の名称）に2012年の夏に行って、自分の想定を超えたところに被災の状況があつて、「ここまでか」と唖然として、自分に何かできるか分からない

¹³¹ 金子郁容、1992『ボランティア—もうひとつの情報社会』岩波書店、p.103

けど、見たからには何かやらなきゃなという使命感みたいなところがあって、ボランティアに関わりを持ちました。(B)

- ・そこ(2012年の活動)で感じたのが、自分の無力感と疑問ですよ。僕らのやっている活動って、これでいいのかなのかな?というのがやっぱり感じますよね。(H)
- ・(2012年の活動で)子どもたちと遊んでいて、その時に女の子と手をつないでいて、みんな危ないから海の方いかないでねと言うと、その子が海の方行きたがって。その時に、「あそこにお母さんがいるんだよ」ってその子が言っていた。そのお母さんが海にいておばあちゃんに聞いた。その時に、こんな小さい子もお母さんを亡くしてでも頑張っているんだなと思って、そこで実際に本当に、そこで震災の怖さとか人の死について深く考えられたというのは転機だったと思います。(I)

これらのコメントは、2011年～2012年までの活動に参加したメンバーのものである。これは、震災後2年ほどは津波の被害が直接的に見て取れる状況であり、活動内容も瓦礫の撤去など震災を直接感じるが多かったことも影響していると考えられる。Bの「使命感」という言葉と、Hの「無力感」という言葉は一見すると対称的に聞こえるが、「自分たちに出来ることを模索し実践する」という点においては共通の意識を持っていると考えられる。これらの経験が原体験となり、自発性や積極性が高められたと考えられる。近藤はボランティアの持つ自発性を「『やるべきだ』という当為(Sollen)を主とするものと、『やりたい』という意欲・欲求(Wollen)を主とするものとにわけられる。」¹³²と指摘しているが、当為の自発性については、理性的な自発性であり、気持ちの上では「やりたくない」としても「やらなくてはならない」という自身への義務としての影響を見ることが出来る。震災の被害を実感したことによって生まれる「使命感」は、このような当為としての自発性に該当すると考えられる。

(2) 省察の機会

D・F以外の8人が関わっていた復興支援ボランティア活動は、大学が主催するツアーでもあり復興支援ボランティアスタディツアーとの名称にもあり、ボランティア活動だけではなく学生自身の学びの側面も重視されたプログラム構成となっていた。その主な内容は、活動の振り返りの時間の確保である。通常二泊三日ないし三泊四日のプログラムの行程中、現地で参加者同士の話し合いを通して振り返る時間が2時間ほどあり、現地から大学に戻るバスの中では一人ずつツアー中の体験を振り返り、「そこで何を学んだか」「その学びをどう自分の実践につなげるか」について発表を行う時間が確保されていた。さらに活動終了後には活動を振り返るレポートの提出が求められていた。その他、企画を

¹³² 近藤良樹, 1998「ボランティアと個人の自発性」『HABITUS (1998年5月)』西日本応用倫理学研究会, p.35-47

行ったリーダー層に対しては、活動終了後にリーダーのみで活動を振り返る時間が確保されており、ボランティアセンターの職員に個別に感想や反省点について相談を行う環境も整っていた。

以下のコメントからは、これらの省察の機会の保障が、彼らの自発性・積極性を引き出す契機になっていたことが伺える。

- ・ 帰りのバスで学生たちが振り返って感想をしゃべる時間があるんですけど、先輩が泣きながら話していたんですね。僕それにすごく影響を受けて、当時は冷めていたので、自分の周りの人が亡くなったわけでもないし、自分がやりたくてやっているのにどうして泣いているんだろうと思った。僕の中では全然知らない人が亡くなったことに涙をながしたり、そういう人たちのために一生懸命考える人がこんなにいるんだなと思った。じゃあ、この人達を引きつける釜石って何だろう、引きつける何かがあるんだなと思ったし、それに一泊二日で得られるものはそこまでないから、自分としての被災地の関わりを見つけていきたいなと思って、うちの大学の復興支援サークルに入部させてもらって関わることになりました。(F)

(3) ロールモデルの発見

インタビューにおいて「活動を通して目標となる人との出会いはあったか？」を尋ねたところ10名中9名が「ある」と答えている。その対象は、同じボランティア団体の先輩、活動先の人物（支援団体・受入団体）、大学側の支援者などが挙げられている。ロールモデルは、自身の人生においてポジティブ・ネガティブ両面において影響を受ける他者として捉えることができる。太田らは看護教育におけるロールモデルの先行研究をレビューし、ロールモデル概念について整理を行い、その効用として

1. 学習の動機づけ、知識と実践の統合、看護職者としての態度習得や役割価値の認識、看護学実習における不安の軽減
2. 学生の自己行動変容の効果として期待でき、自己効力感を高められる
3. 看護師の成長していく時の具体的な目標設定の手段となり、専門的な能力の育成において大きな役割がある
4. できすぎるモデルは自己効力を落とす可能性がある
5. ロールモデル行動を真似ても臨床能力が上がるとは限らない

との指摘があったことを報告している¹³³。また、川田らは、地域貢献活動に取り組んだ学生のロールモデルとの出会いによる学びについて研究を行い「活動を通してロールモデル像が具体的な能力・姿勢等に落とし込まれ自分自身の学びと成長につながっていた。」

¹³³ 太田美緒・前田樹海, 2009「文献に見るわが国の看護教育におけるロールモデルの概念」『長野県看護大学紀要,11』長野県看護大学,p.55-56

¹³⁴ことを報告している。このロールモデルの効果は本研究における自己形成への影響としても捉えることができる。本インタビューの対象者においても、ボランティア活動を通してロールモデルを発見することで、そのモデルに近づきたいとの思いが働き、より自主的な活動につながったと考えられる。また、ロールモデルには職業的なモデルである「ワークモデル」と生き方や生活全般に関わる「ライフモデル」がある。その後、復興支援員としてコーディネーター業務を担うことになる A や当時大学職員を志していた B においては、ワークモデルとしての傾向が読み取れるが、それ以外のメンバーからは活動への取り組みへの姿勢や震災への向き合い方などライフモデルとしての傾向を読み取ることが出来た。

(4) 活動を通じた過去の意味づけの変化

ボランティア活動の自己形成に与える影響として、それまで大学生が体験してきたネガティブな経験の意味づけの変化が挙げられる。一部の大学生は、それまでの人生において不登校や大きな挫折経験を経て、自身への自信を喪失し他者との関係を構築することにも困難が生じることがある。しかし、ボランティア活動を経験するなかで、それらの過去の経験が必ずしも否定的なものとしてだけ存在しているわけではないことに気づいていくことになる。

ナラティヴ・アプローチは「ナラティヴという形式を手がかりにしてなんらかの現実に接近していく方法」¹³⁵とされているが、そのナラティヴの構成として「ドミナント・ストーリー」と「オルタナティヴ・ストーリー」がある。「ドミナント・ストーリーとはある状況を支配している物語という意味で用いられる。しかし、そのストーリーは絶対的なものではなく、ドミナント・ストーリーが力を失うとオルタナティヴ・ストーリーが次のドミナント・ストーリーとなってその状況を支配するという形が一般的である」¹³⁶。これらのナラティヴの特徴に注目した、ナラティブ・セラピーにおいては、「ドミナント・ストーリーが十分に彼らの生きられた経験を表していない状態と捉え、そこで汲み残された経験に光を当て、それが位置づくようなオルタナティヴ・ストーリーの創世を援助する」¹³⁷とされている。

インタビューからは、学生達がボランティア活動を通して、それまで自分が背負ってきたネガティブな経験であるドミナント・ストーリーの支配から抜け出し、オルタナティヴ・ストーリーを生成していることが読み取れる。

¹³⁴ 川田虎男・河村美穂、2020『『地域の人に出会うこと』が学習者に与える影響 ―ロールモデルと出会うことによる学びを中心に―』『日本福祉教育・ボランティア学習学会紀要研究紀要 Vol.35』日本福祉教育・ボランティア学習学会、p.80

¹³⁵ 野口裕二、2005『ナラティヴの臨床社会学』勁草書房、p.8

¹³⁶ 野口裕二編著、2009『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房、p.13

¹³⁷ 野口裕二、2005『ナラティヴの臨床社会学』勁草書房、p.24-25

【Aのドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリー】

Aは幼少の頃より「すごい回りの人に気を遣って、いろんな人を気にしながら生きてきた。小学生の頃は優等生キャラをしていたが、中学校で環境が変わったときにいじめをきっかけに自分が保てなくなり3年間不登校になった。高校でも体調を崩し1年留年した後卒業し大学に入学した。」そのため大学においても「高校時代に人間関係を失敗しているせいで、わりと人付き合いが怖くて仕方なかった」と述べている。しかし、活動当初は違和感を感じていたボランティアを通して、これまで経験してきたことが決してネガティブな意味だけでは無いことに気づくことになる。

- ・ まあ、自分のネガティブな経験から、だからこそ出来ることがあるんじゃないかというのを、思ったし。後は、なんだろう、自分のこの経験があったからこそ出来ることがあるんだなということに気づいた。自分のこの空気読むと言うこととか、そういうのをなんか誰かのために役立てられるんだっていう、なんか嫌いな自分の部分、私はこの部分がすごい嫌だったから、でもそこに対して利用価値があるじゃないけど、役立てられる、それに対して必要としてくれる人がいるんだということ、あのボランティアで感じられて、そこの部分を必要としてくれる人がたくさんいてくれたことが、私がボランティアをやり続けた理由の一つだと思います。
- ・ なんか悪くないじゃんって思えたし、今までの辛い経験が意味があることだったんだなと思えたという感じですかね。あ、でもこれは経験してきて良かったなと思える。たぶんそこの部分、自分がネガティブで嫌いだった部分がはまらなかったら、私は続けてなかったと思います。

Aは「周りの人に気を遣って、いろんな人を気にしながら生きてきた。」が、結果的にそれが不登校の原因にもつながってしまったことで、自分のネガティブな経験としてドミナント・ストーリーを形成していた。しかし、ボランティア活動を通して「自分のこの経験があったからこそ出来ることがある」ことや「自分のこの空気読むと言うこととか、そういうのをなんか誰かのために役立てられる」ことに気づいていく。

結果として、「なんか嫌いな自分の部分、私はこの部分がすごい嫌だったから、でもそこに対して利用価値があるじゃないけど、役立てられる、それに対して必要としてくれる人がいるんだということ、あのボランティアで感じられて、そこの部分を必要としてくれる人がたくさんいてくれた」という、オルタナティブ・ストーリーが生成され、それがドミナント・ストーリーへの置き換わっていったことが伺える。

【Hのドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリー】

HもA同様人間関係の拗れから中学3年、高校1年と2年間不登校を経験し、通信制の

高校を卒業している。大学に入学したときには「元々引きこもっていたので、あんまりこう前に出る、前に出るじゃ無いですけど、そもそも人と関わりたくないですし、そういうのが全部煩わしいですし、大学には講義を受けに行くだけ」であったが、同時にそのような自分の状態に対して「人と関われないし、このままじゃやばいだろう」との思いがあり、そのことが、後にボランティア活動を始めるときかけにもつながることになる。Hにとって不登校時代の経験は辛い挫折経験であった。しかし、ボランティア活動で充実した時間を過ごす中で、その意味が変化してきたことが読み取れる。

- ・ 変化じゃ無いですけど、辛かった時期を辛いと思わなくなった。というのはある。もちろん時間の経過もあるんですけど、それだけじゃない気がします。まあ、ボランティア最初言ったように半分はやだったんですよ、でも半分は楽しいな、面白いなという瞬間があって、なんなんでしょうね。そういう充実感の積み重ねがちょっと嫌な時期を忘れさせたと言うことなのかも知れない。
- ・ たぶん過去、未来で話をしていくと。ボランティアを通じて得られた楽しさというのが、やっぱり僕の場合不登校という所から始まって、そこからボランティアに繋がっている。だから、不登校でなければボランティアしてなかった。

Hの場合もA同様過去の不登校という経験を「辛かった時期」と捉えておりドミナント・ストーリーとして捉えていたことが分かる。しかし、「僕の場合不登校という所から始まって、そこからボランティアに繋がっている。だから、不登校でなければボランティアしてなかった。」とあるように、現在あるボランティアと充実した時間は、あの辛かった時期があったからこそ繋がっているものだという、きっかけとしての意味が見いだされており、従来のドミナント・ストーリーに新たな意味づけがなされていることが分かる。

Hのナラティブと比較すると、自分自身の特徴そのものの意味づけが変化したAに対して、Hは現在の充実した状況に至るための必要な出来事として過去を肯定するという変化を経ている。しかし、共に従来捉えていた自身の過去のナラティブがボランティア活動を通して、新しいナラティブに変化したことが分かる。

(5) 活動を通した承認（評価）

より自発的な行動に結びついた要因として、活動ごとに他者から得られる承認（評価）を挙げることが出来る。本件については、次項の社会性における矛盾において詳しく触れていきたい。

第4項 社会性における矛盾と自己形成への影響～利他性と利己性の接近と合理的利他性の発見～

1. インタビュー対象者のボランティア活動への動機

第1章第2節第4項の図表1-6「学生ボランティアが活動をはじめた最大のきっかけ」にもある通り、ボランティア活動を始める理由は、「社会貢献の意識や倫理観・道德観」といった利他的な目的だけでなく、「自己実現・自分自身のため」と利己的なものも含まれる。そこで、まず調査結果から10名のインタビュー対象者の活動に取り組んだ理由について示し、下記のようにまとめた。

【ボランティア活動を始めたきっかけ】

- A：友達に誘われて
- B：いつかは関わりたいと思っていてチラシを見て
- C：面白そうだなと何となく思って
- D：仲のいい友人に誘われて断れずに
- E：自分の家が被災しボランティアに助けられたので自分もと思い
- F：知り合いが欲しい、先輩と無く良くしたいと思い
- G：どこか変わりたいなと言う自分がいて。ただ、明確な理由はわからない。
- H：人と関われないしこのままじゃやばい。変わらなきゃと思って。
- I：何か東北の人のために自分の出来ることをしたいなと思って
- J：震災の映像を見て何か出来ないかなと思って

図表 2-8 復興支援ボランティアを始めたきっかけ

受動的	やや自発的	自発的
A・D	C	B・E・F・G・H・I・J

利己的理由	利他的理由
C・F・G・H	B・E・I・J

図表2-8のように、B、E、I、Jのように他者の為に純粋に活動を行いたいという動機で活動始める層も存在するが、C、F、G、Hのように友人や先輩との関係づくりや自分自身を変えたい等、自分のために活動を取り組み始めたメンバーも存在した。A、Dについては、友人の誘いに対して受動的に活動に関わり始めており、当初は活動そのものに対する目的意識は見受けられなかった。

2. 社会性（公益性）×私益性という矛盾と自己形成への影響

利他性と利己性は、主として活動者自身の動機に関わる矛盾であるが、公益性×私益性の矛盾は主として活動の成果について抱える矛盾であると言える。ボランティア活動は、

他者への貢献をその原則としているが、同時に活動を通して、自分自身への様々なポジティブな影響があることは本稿においても度々指摘している通りである。一見すると、「他人・社会のためのボランティア（利他性）」と「自分のためのボランティア（利己性）」という真逆の動機から活動を始めた彼らは、この矛盾の中でどのような影響を受けていくのだろうか。最も利己的な理由から活動を始めたFと最も利他的な動機から活動を始めたI・Eのインタビューからその変化を確認したい。

(1) 利己的な動機から始まったFの変化

「知り合いがほしい、先輩と仲良くなりたい」という思いで活動を始めたFは、「当時は冷めていたし、初めて活動したあとも続けて何かしたいとは思わなかった。」と述べている。しかし、活動が続ける中で、「相手の立場に立って考えることを意識するようになった」と言う。最終的にボランティア活動を通して「優しくなれた。人の痛みを考えられるようになった。それは、身近な人でなくても他人でも」というように、より利他的な姿勢が強化されていることが見受けられた。

(2) 利他的な動機から始まったEの変化

Eは、中学2年生の時に東日本大震災で実家が津波の被害を受け全壊し、避難所生活を送る中で外部から入ってきたボランティアに声を掛けられ活動を始めることとなった。自身も被災者で支援される立場でもありながら、自身の自宅周辺の津波被害にあったお宅の片付けボランティアを行い、高校・大学と復興支援活動を続けた。そんなEからは、ボランティア活動を通して、自分自身が支えられ与えられたものについて「活動を通して、みんなの前で話せるようになりました。」「上に立つ人間の役割を学んだ」「僕に居場所を作ってくれた」等の実感が多く語られた。

(3) 利他性と利己性の接近と相互浸透

10名のインタビューの中からは、他にも利己的な動機で始めたにも関わらず利他的な姿勢が強まったと考えられるコメントが見受けられた。また、利他的な動機で始めたメンバーからも、結果的に自分自身に利益があったとの実感を口にするコメントも見受けられた。さらに、「自分のためなのか、他人のためなのか」が分からなくなっている様子や「自分のためであり、他人のためである活動としての認識」をしているといった言葉が述べられている。

- ・ ボランティアをしていた等の感覚はないんですよ。私は自己成長とか、そこを承認してくれるとか、あとは自分の居場所とかという感じでやっていて、その時その時には、この人のためというのがあるんですけど。けどなんかそれを言っちゃえばボランティアなんですけど、自分のためにやっていたというのが自分の中では大きくって。自分がしたいからやってるみたい。なんか、それが何だろう、

その時その時の一瞬、一瞬は絶対誰かのためがあるんだけど、結局はそれが自分のためにやっていることなのかなって。(A)

- ・ やっぱりみんな、相手のことを思いやって想像しているし、自分の中で分からなくなるんですよね。これは自分のためにやっているのか、相手のためにやっているのか。(F)
- ・ ボランティアをやっていたのって、本当に相手のために別に自分にお金だっただけだし、何か成績が良くなるとかも無いですし、でも、自分のためもあるし、相手のためもあるし (G)

(4) 利他×利己の接近と合理的利他性への合流

「他者のための活動の結果、自分自身のためにもなっている。」「自分のために始めた活動の結果、他者への貢献の重要性を実感しその姿勢が強まった」これらの傾向は何を意味しているのだろうか。一見すると、他者のために行う行為「利他的行為」と自分のために行う行為「利己的行為」は対立した概念であると考えられる。しかし、現代においては、他者に利することが結果的に自分の利につながるという合理的利他性の概念が主要な考え方となっている。この考え方について、経済学者のジャック・アタリは以下のように述べている。

利他主義とは、合理的な利己主義にほかなりません。みずからが感染の脅威にさらされないためには、他人の感染を確実に防ぐ必要があります。利他的であることは、ひいては自分の利益になるのです。¹³⁸

日本においては「情けは人のためならず」とのことわざがあるが、これは、「人にかけて情けは、巡って結局は自分のためになる」との意味で、利他的な行動は結果的に自分の利益になるという合理的利他性（合理的利己主義）と同じ意味となる。これらの概念を取り入れることで、ボランティア活動を「他者の為であり、かつ自分のためでもある」行為として捉え直すことが可能となる。

3. 「承認」をキーワードにした社会性の矛盾についてのインタビュー結果

ここまで、ボランティアの社会性（利他性）×利己性に関わる矛盾点を中心にボランティア活動から活動者への影響を整理してきた。さらに考察を深めるため、ボランティア活動を通して得られる「承認」に注目しながら、インタビュー内容の整理を行う。「承認」は学生の自己形成とボランティアにおける成果を考える上で、重要なキーワードになっている。

¹³⁸ 伊藤亜紗, 2021 『『うつわ』的利他—ケアの現場から』『「利他」とは何か』集英社新書, p.21

西尾らは若者の居場所を求める欲望への理解を示しつつ「若者ボランティア活動は、息苦しさに対する癒しの契機とはなれども、しばしば自己完結した承認欲求運動に留まりがちである」¹³⁹と批判している。自分のため「だけ」のボランティア活動があるとすれば、それは搾取以外のなにものでもない。山口は、これら自分のために傾倒した学生ボランティアの特徴を自分探しで承認欲求を満たすボランティア活動とし、

- ① 個人の功利的な願望を達成するためだけに他者を巻き込み、結果として自己満足にとどまるために、現場の問題解決が導かれない
- ② 日常生活も一つの現実であるにもかかわらず、非日常の世界に赴くことによって、見たことのない現実に触れることの心地よさに浸り、日常の風景から目が背いていく現実逃避が先行する。

という問題点を指摘している。¹⁴⁰両者に共通しているのは若者の「承認欲求の充足」の手段としてのボランティア活動という指摘である。同時に、ボランティアの持っている「社会性（公益性）×私益性という矛盾」について、双方が併存できるようその打開策を模索している。

本稿においては、これらの議論を踏まえつつもボランティアを通した承認とはいかなるものであるのか。また、その承認を通してどのような自己形成につながっていくかについて、考察を行っていきたい。

(1) 承認により成長する大学生

インタビューを行ったメンバーからも「承認」による影響が読み取れる言葉が多く伺えた。ここでは、特にその傾向の強かったAのインタビュー内容を見ながら、他者からの承認がどのように本人に影響していったかを見ていきたい。

図表 2-9 A の各ステージの状況

活動のステージ	A の状況
① 活動前のステージ	人と違うことはやらない。自分に自信が無いとか、ネガティブとか、自分が無理だと思うことには手を出さない。
② ボランティア活動への参加（多様な参加動機）のステージ	友達に誘われて
③ 指示されたことを行う受け身の	大学の復興支援ツアーに参加

¹³⁹ 西尾雄志・日下渉・山口健一，2015『変容する親密圏／公共圏 承認欲望の社会変革—ワークキャンプに見る若者の連帯技法—』京都大学学術出版会，p.9

¹⁴⁰ 山口洋典，2009，「自分探しの時代に承認欲求を満たす若者ボランティア活動—先駆的活動における社会参加と社会変革の相即を図る『半返し縫い』モデルの提案—」『ボランティア学研究第9巻，国際ボランティア学会，p.33-42

活動ステージ	
④ 活動からの学びを糧に既存の活動を修正・運営するステージ	大学の復興支援ツアーのプロジェクトリーダー経験
⑤ 自ら課題を発見しその解決に向けて活動を生み出すステージ	サービスマーケティングプログラム「被災地の高校生の復興プロジェクト支援」に参画
⑥ 自分自身の軸を定め、自分自身の人生を歩むステージ	自分が肯定したスキルの活かせるものがコーディネーター。自分の生きる意味が見つかった。

A は、友人の誘いでボランティア活動に関わり始めたこともあり、必ずしも積極的に活動に関わっていたわけではなかった。しかし、大学 3 年の時に復興支援団体の代表になった友人を支えるために担当した、ツアーのプロジェクトリーダーを引き受けたことで大きな変化をして行く。

【④活動からの学びを糧に既存の活動を修正・運営するステージ「大学の復興支援ツアーのプロジェクトリーダー経験から得られた承認」】

A は、プロジェクトリーダーとして、被災地の公民館からの要請を受け、仮設住宅が多く在宅で勉強する時間を確保しづらい子ども向けの夏休みの学習の場づくりを担当した。プログラムは、1 日 3 時間の単発のものであったが、塾講師のアルバイトをしていた A にとっては、これまでの経験を活かしたプログラムを作ることができた。この取り組みは、参加した子ども達や依頼元の公民館職員からも好評であった。結果このプログラムを中心に担った A に対して、他の学生ボランティアや教職員からも感謝や評価する声が向けられた。

- ・ 自分の居場所って関わる所が増えれば、いろんな所に来ていくんだなと思ったのと、そこ以外でも自分を必要としてくれる人はいるんじゃないかなと思えるようになった。自分が頑張れば見てくれる人がいるとか、プロジェクトリーダーをやったときに強く感じたんですけど、なんかプラスの評価を私にももらえるんだという感じですね。
- ・ プロジェクトリーダーの時に初めて企画を立てたんですよ。その時に割と頑張ったし、わかんないなりに、わりと評価してもらえた。みんながよかったと言ってくれたのが残っていて、そこを評価してくれて誘ってくれたというのが嬉しかった。3 年生のそこのうれしさとか、自分に自信がついたというのもあるところで、そのまま卒業というのが嫌で、(所属している復興支援団体)とはちょっと違う活動をしてみたいと思って。
- ・ それこそ、プロジェクトリーダーをやらなければ、あの、そもそもその後に繋がっていかない。そこで評価を受けないと次には行けてないので。自分基本他者評価が評価軸なので。そうですね。

これらの評価（承認）は、A に対して自分の活動に対する自信を与えることにつながる。また、その自信が次なるチャレンジへのモチベーションにもつながっていることが

伺える。

【⑤自ら課題を発見しその解決に向けて活動を生み出すステージ「サービスマーケティングプログラム『被災地の高校生の復興プロジェクト支援』に参画】

4 年になった A は、筆者が担当している授業科目「コミュニティサービスマーケティング」を履修し、その中で、被災地の高校生の復興支援プログラム立ち上げ支援に参加した。これは、被災地の高校生と夏休み期間に一泊二日の合宿を通して、被災地の中にある課題を明らかにした上で、その課題解決に向けたプロジェクトの企画を立て、半年間かけてそのプロジェクトをボランティアとして関わり実現するという内容となっていた。大学生には、高校生の思いを引き出しつつ、課題解決に向けた道筋を一緒に考えサポートするというファシリテーターの役割が期待されており、A は他の NPO（中高生支援）でのボランティア経験も活かしつつその役割を果たした。A が支援した高校生のプロジェクトは、「被災経験を持った高校生による小学生への防災講座」として実現する。2017 年当時は、震災の記憶がない小学生がいる反面、津波による犠牲者が家族にいるなど防災教育の必要性は認識されていたが、その方法論が模索されていたこともあり、自分自身が津波から避難して助かった高校生による実体験を元にした防災授業は、準備段階から注目を浴び、多くのメディアに取り上げられた。高校生中心の取り組みであったが、それを支える大学生にもスポットが当たり A も複数のメディアで取り上げられる経験をした。活動終了後には、高校生たちから「(A を含めた) 大学生のおかげでプロジェクトが実現できた」との感謝のメッセージが述べられ、支援団体や教員からも A に対して多くの感謝と賛辞が送られた。

- ・ サービスラーニングで、う～ん、今の（被災地の地名）だったらなんか私になんか出来るかも、何か関わっている中で思える場面が何回もあった。あとは、あれですね。自分がいなくちゃいけない、いた方がいいという経験は何回も、か、大学時代もその前もあったけど、サービスラーニングに関しては、自分がいなくてはだめだと言ってもらえた。それまでそういう経験は無かった。なんだろう、プレッシャーだったけど、私そんなこと言ってもらえるんだというのがあって、衝撃的だった。A がいるからとか、A はねとか、みんな A がいないと、とか、固有名詞でそういう風に言われるのって中々ない気がして、わりと大きな経験だった。自分の中ではけっこう大きな経験、心が動いた要因。だから頑張ろうと思ったし、ちゃんと高校生のことも見えていたけど、一つの要素として。
- ・ 4 年生のサービスラーニング、ファシリテーターとしての役割がうまくはまって評価されたことが転機の一つ。同時並行で（高校生のキャリア形成を目的とした NPO）に入ったことで、高校生に対するファシリートの引き出し方のスキルが身についた。自己理解として、自分を見つめ直す機会になって、自分は自分でいいかなと思えるようになっていった。

- ・ 評価してくれる人がいたという結果的な部分と私が行動しても離れていかない人がいるという事実という感じですかね。なんか、ま、褒めてくれるんですよ。行動したところで、何かう〜ん、勉強以外のこととか、なんか、そういう地域活動ということとか、そういう見えにくいことを褒めてくれるというのがわりと衝撃的だったし、企画とかでなんかそれが意味があるものなんだということが実感できたというのは、すごい私の中では大きくて。社会的に貢献できるところがあるというか、自分でもなんていうかう〜ん、一個一個のきっかけで変われるというところもあるし、その生み出すものみたいなものでも、何か世の中的に貢献できるみたいな。

このプロジェクトを通して、A は「自分がいなくてはだめだと言ってもらえた。それまでそういう経験は無かった。」と述べているように、これまで得たことのない承認（評価）を得る経験をした。その承認により、自身が担ったファシリテーターという役割について自信を深めていることが分かる。さらに、「自己理解として、自分を見つめ直す機会になって、自分は自分でいいかなと思えるようになっていった。」とあるように、単に自分への自信ということに留まらず「自分は自分でいい」という自己肯定感が高まっていることも伺えた。また、より具体的な部分で「地域活動ということとか、そういう見えにくいことを褒めてくれるというのが割と衝撃的だったし、企画とかでなんかそれが意味があるものなんだということが実感できた」とあるように承認を得たことで、そのことに対する価値に新ためて気づくと共に、自分自身そのような活動を担っていきたいという思いにもつながっていく。

【⑥自分自身の軸を定め、自分自身の人生を歩むステージ「自分が肯定したスキルのな活かせるものがコーディネーター。自分の生きる意味が見つかった。」】

その後 A はサービスマーケティングプログラムにおける経験を受け、現地の支援者からの誘いもあり、それまでに内定を獲得していた就職先を断り、復興支援員として働くことを選択することになる。その理由として、活動を通して得られた承認による影響を見ることができる。

- ・ 無茶をするようになりました。これまでだったら、「ここまででいいっしょ。」みたいな、8割5分くらいのところしか目標にしなかったし、自分の全てじゃ無いけど、できるだけやりきりたい、全力でやりたいという感じが出て、なんか、先は見えないけど取りあえずやってみようっていう感じ、けっこう怖いんですけどそう思えるようになった。そこから進路も変わった。
- ・ なんかコーディネーターという仕事が、しっくりきたというのはありましたね。仕事でもないのに調整役をしていたけど、それが仕事になるのかなみたいな感じ。

仕事として活かせるのかもという感じ。うん。向いてるんじゃないという感じ。自分を肯定してくれるものが、自分が肯定したスキルの活かせるものがコーディネーター。

- ・ 今は仕事という風にいくけど、自分は調整的なコーディネートをするのは普通だし、呼吸をするのと同じレベルだったのに、それがボランティアを通じて評価の対象となった。誰でも出来ると思っていたし、呼吸するのと同じだから。だから病んでる言い方をすれば、自分の生きる意味が見つかった。ああ、いていいんだみたいな。それがいまは職業としてやっていると言うだけだと思います。

A は、ボランティア活動を通してこれまで自分自身が何気なく行っていた、人と人との調整役が活動にも活かせることに気づくとともに、それが他者から承認（評価）されるものでもあることを知った。現地の支援団体から、その力を活かして協力してほしいとの誘いは、そんな A の決断を後押しし、その力を活かせるコーディネーターという仕事にチャレンジすることとなったが、現在ではそれが A にとっての「自分の生きる意味」だと思えるほど大きなものとなっていることが伺える。

ここまで見て来たように、承認（評価）は A にとって、それぞれのステージにおける原動力になっていると共に、次なるチャレンジへのモチベーションにもつながっていることが分かる。ボランティア活動を通して得られた承認は、A の成長に欠かすことのできないものであったことも伺えた。

(2) ボランティア活動の承認によるリスク～自信過剰と他者評価依存～

しかし、承認による影響は必ずしもプラスの面ばかりでは無い。A はその点について、以下のように指摘している。

- ・ （ボランティアは）学生の自己肯定感をあげるのにやりやすいものだし、成功体験みたいなものを積むのに絶好のものだと思うけど、ありがたうって言われやすいし、感謝されやすいものだけど、そういう肯定されるものだけど、ボランティアは非日常だと思ってるので、「終わるよ」ボランティアは。終わらない関わりもあるけど、学生時代にボランティアをやっていて、社会に出てそれが通用しないことはたくさんあって、なんで感謝してくれないんだろうとか、せつかく上げた自己肯定感がそういう体験をしたことによって、余計に下がることもあると思うんですよ。それで引きこもりもあると思う。はまればはまるほどその危うさは上がる気がしてて、現実と自分の理想のギャップとか、そこはすごく危ういと思う。

この点については、B によるインタビューからも見いだすことができる。B は学生時代

のボランティア活動で自分に自信を持ち、将来は大学職員として自分のような大学生を支援することを目標に就職活動を行った。最終的に「復興支援と将来大学職員として被災地を繋げる役割をもてるように」と卒業後の進路として、ボランティア先としてお世話になった旅館でのインターンシップを半年間行うこととなった。しかし、その中で大きな挫折を経験することとなる。その原因として、B は周りの人間の承認による過信があったと述べている。

- ・ (インターンシップに行ってみて) ギャップはやっぱりあります。社会人 1 年目として相当自分が復興支援やりたいと思っけていても、何も出来ないと言うことも気づいて、回りは被災した人たちもたくさんいたので、風呂場の掃除をしながら話を聴くんですよ。何も言えないし、掛ける言葉もない自分がいて、復興支援と言いながら声も掛けられない自分がいて、すごい嫌になったし、ストレスな日々が続きましたね。
- ・ (学生時代) 輝きすぎたみたいな所は、なんだろう、ボラセンのみなさんよいしょしてくれるじゃないですか。たぶんですけど、僕以外も思っていると思うんですけど、「やれるんじゃないかな」って錯覚を感じたことはあるんだと思います。
- ・ でもそうだったと思います。直感的だったし、視野も狭かった。(被災地の地名)に行くべくして行った。失敗すべくして失敗したというのはあったと思う。やっぱり真に受けやすい性格ではあったので、よいしょされたらよいしょされるし、性格が起因した部分は大きいと思います。ただ、さっきも言いましたが、ボラセンの人たち良い意味でも、反対の意味でもかも知れませんが、褒めてくれるじゃないですか、あっ、私出来るんだという自己肯定感は育つんですけど、そこで行き過ぎちゃう人もいるんだと思うんですよ。これは何かを否定する訳じゃ無いですけど。

B の事例からは、ボランティア活動で得た承認（評価）は自分自身の自信につながるが、そのことで過信にもつながり、その後手痛いしっぺ返しを食らうこともあることが分かる。大学生・ボランティア活動という特殊な環境下で得ていた承認が自分自身の実力だと錯覚した場合、大学卒業後就労した際には大きなギャップを味わう危険性がある。また、他者からの承認に答えることにのみ集中することで、他の事柄（学業など）が疎かになる場合や、場合によっては自身の体調を崩すまで活動に埋没してしまうというリスクも伴うと考えられる。

4. ボランティア活動を通して得られる承認

そもそも承認とはいかなるものだろうか。藤野は承認について「他者によって認められるという経験である。」とした上で、その効用について「自分にとって大切な他者によっ

て認められる経験を通してこそ、われわれは自信を得、自己自身との良好な関係を築き上げることも可能になるのではないか。」と指摘している¹⁴¹。また、ホネットは、人間が他者による承認を求めて闘わずにはいられない存在であるという事実を指摘し、「承認をめぐる闘争」¹⁴²という概念を提示している。さらに「愛」「法（権利）」「連帯」という3つの承認モデルを提示している¹⁴³が、藤野はホネットの3つの承認モデルを継承し、その表現を「愛」「人権尊重」「業績評価」とした。以下で、藤野の提示した3つの承認モデル概要についてまとめた。

図表 2-10 3つの承認モデル

承認の型	愛	人権尊重	業績評価
関係性	究極の依怙鼻肩・排他性を特徴とする。	普遍性。人を人として認め尊重すること	同じ基準で平等に評価
具体的な例	恋愛・親子愛・友情		学校での成績評価
承認の内容	存在そのものを自らにとって大切なものとして認める	人間の尊厳を尊重する。逆の意味として「差別」が存在する。	評価基準の普遍性を前提に結果において差をつける
同一性／差異性	差異性の承認	同一性の承認	同一性が基準、結果は差異性
承認の闘争	承認をめぐる闘争が繰り返される。	差別との闘い	立派な業績は高く評価され、見劣りする業績は厳しく評価される。

※藤野の説明（藤野 2016）¹⁴⁴を元に筆者が作成

（1）承認欲求の充足と成長

山竹は現代を「社会共通の価値観への信頼が失墜したため、何をしたら承認されるのかわかりにくくなり、結果として承認不安が強くなっている」¹⁴⁵。時代だと指摘している。そのため、身近な仲間達の承認を得るために自分の本音を抑え、仲間の言動に同調した態度をとり続ける若者は少なくないが、そこで得られる承認は価値ある行為や愛情や共感によって得られる承認では無く、その場の空気に左右される中身の無い承認である。山竹はこの承認を巡るコミュニケーションを「空虚な承認ゲーム」¹⁴⁶と名付け、思春期における学校の仲間など、若者の中で目立って見られるとした。

太田は企業からみた承認の4つの効果として「①モチベーションを上げる②業績への好

¹⁴¹ 藤野寛，2016『「承認」の哲学 他者に認められるとはどういうことか』青土社，p.8-9

¹⁴² アクセルホネット著作・山本啓・直江清隆訳，2003『承認をめぐる闘争—社会的コンフリクトの道徳的文法—』財団法人法政大学出版局，p.42

¹⁴³ 同上，p.127

¹⁴⁴ 藤野寛，2016『「承認」の哲学 他者に認められるとはどういうことか』青土社，p. 67-116

¹⁴⁵ 山竹伸二，2011『「認められたい」の正体承認不安の時代』講談社現代新書，p.32

¹⁴⁶ 同上，p.10

影響③離職の抑制④不祥事を減らす」¹⁴⁷を挙げているが、これらの効果はボランティア活動においても適応するものと考えられる。特にモチベーションの向上や業績（活動の質）への好影響という点は大学生の自己形成にもつながる重要な点であろう。

（2）他者や社会からの評価・承認を得やすい構造を持つボランティア活動

山竹は他者からの承認を対象により 3 つに分けている。「①家族、恋人、親友など、愛と信頼の関係にある人間（親和的他者）による親和的承認。②所属集団での役割関係にある人々（集団的他者）による集団的承認。③他者一般の表象（一般的他者）を想定することで得られる一般的承認。また、そこから得られる承認のあり方については別表の通りとなっている。

図表 2-11 承認の種類

他者の種類	親和的他者	集団的他者	一般的他者
他者との関係性	愛と信頼の関係	集団的役割関係	社会的関係
具体的な例	家族・恋人・親友	学校の級友・職場の同僚	他者一般の表象
承認の種類	親和的承認	集団的承認	一般的承認
承認の内容	ある行為や知識・技能に対する承認では無く、存在そのものへの承認。	集団の人間が評価する行為を示し、集団の成員から承認。	個別の価値観を超えた普遍性のある価値に対する承認

※山竹の説明（山竹 2007）¹⁴⁸を元に筆者が作成

以上の表を見ると、ボランティア活動による承認はこの 3 つすべてに該当する可能性がある。

【親和的他者による親和的承認】

ボランティア活動では活動を通じた出会いが多様にあり、その中にはいくつかのプロジェクトを通して親友とも呼べる存在にも出会う。B の「ボランティアをやって良かったと思えることの一つは友達ができた。いろんな感情ぶつけ合ったし、本当に気持ちが分かち合えた人とは、本音で話せるなと思います。」といった言葉からもそのような関係が伺える。

【集団的他者による集団的承認】

ボランティアグループで活動することでチーム内からの評価が得られると共に、活動を通して活動先の個人・団体からの感謝の言葉を直接掛けられるなど、集団的な承認を得やすい環境である。しかもその価値基準は、スポーツ等の順位や勝敗といった相対的なものではなく、思いや努力などのプロスに向けられるものも多い。

【一般的他者による一般的承認】

¹⁴⁷ 太田肇，2007『承認欲求－認められたいをどう活かすか－』東洋経済新報社，p.112-117

¹⁴⁸ 山竹伸二，2011『「認められたい」の正体承認不安の時代』講談社現代新書，p.60-73

前述したとおり現代社会は社会共通の価値観が崩れ一般的承認が得づらい状況となっている。しかしそのような中でも「他者に対する無償の貢献」は、社会の普遍的な価値と合致する可能性が高く活動者からの評価だけで無く社会からの評価も得やすい。実際に被災地のボランティア活動を行うことで、多くのメディアから取材を受け社会的評価を実感する学生も多い。

以上のように、ボランティア活動はその特徴として、「多様な承認を受けやすい」ことが分かる。その特性が大学生の自己形成に与える影響は小さくないと考えられる。

(3)「存在すること」で評価される学生ボランティア

さらに被災地の状況によっては、大学生の存在そのものが承認の対象となり得る。東日本大震災で被害の大きかった東北沿岸部では、従来より少子高齢化の進展により人口減少が大きな課題となっている、さらに自宅から通える範囲に大学がない地域も多く、大学に行くということはすなわちその街から若者が出てくということに直結する場合も多い。そのまま、地元に戻らない若者も多いことから、街にはそもそも大学生がほとんど居ないという地域もある。筆者も被災地のある市長から「若者には街を闊歩してもらうだけでも充分ありがたい」との言葉を直接いただいたこともあるが、「大学生が街に来る」という行為だけでも感謝（承認）の対象となるという事情がある。

また、先行研究で石野が指摘しているように大学生の特質として、「相手によって様々な解釈・位置づけがされ、変幻自在に役割を変え得る。」「不安定さの中で多様な関係性を生み出すことが彼等（大学生ボランティア）ならではの特出すべき効果かもしれない」

（石野 2013）¹⁴⁹という点も彼ら自身が承認されやすい長所になり得る。つまり、支援するという活動の質以上に、「結果的に支援対象者である相手から孫のように可愛がられ感謝される」といったように「行為」よりも「存在そのもの」による承認を得やすいことも学生ボランティアの特徴であると考えられる。

以上のように、ボランティア活動自体も承認を得やすい環境が整っているが、さらに大学生という社会的立場が彼らのボランティア活動をより承認・評価されやすい状況につながっていることが分かる。

5. 自己承認から他者承認へ

ここまで、利他性×利己性の矛盾を検討する上でボランティア活動を通して得られる「承認」に焦点を当てて考察を行ってきた。ボランティア活動はその性質上、他者からの承認を得やすいという特徴がある。承認を得ることで、活動の達成感を得て次なる活動や展開へのモチベーションにもつながる反面、承認を得ることで過信に陥り挫折経験につな

¹⁴⁹ 石野由香里, 2013 『『学生ボランティア』の特異性が地域に対して有する潜在的な機能—ボランティアをする／される関係をズラす効果が地域場の場づくりへ与えた影響—』『生活学論叢第 23 巻』日本生活学会, p.14

がるリスクについても指摘を行った。また、利他性と利己性は活動を通して、近接し相互浸透を起こすとすれば、承認においてはどのような変化が起きるのだろうか。ここでは、Aの追加インタビューの内容から考察を行う。

- ・ 私、高校時代すごくネガティブな印象しかなくて、あの時がたぶん一番自分が自分を嫌いだった時期だったし、家族以外に頼れる人がいなかった時期でもあった、だから私は高校生と関わりたいというか、そういう風に悩んでいるというか、普通の高校生に見えたとしても、大なり小なり悩みを抱える時期だと思うし、そこで関わることが、そこでやったこととか経験と関わった人とか、ってすごくその先の人生に影響するんだろうなと言うことはその時思ってた。高校生の自己肯定感とかを、高めると言うことだったり、高校生の味方になるということとか、そういう風なことを近くでやりたいなという風に思ってたというか。
- ・ なんか、高校生に対して、同じことかも知れないけど、悩みを聞いたり、寄り添うことは出来ていたけど、サービスマンみたいな、なんていうかネガティブなことを聞いてどうしようも、なんか聞くだけしか出来ないということじゃなくて、あの、自分の自信を持たせることができる。あの、自分が関わることで、その子自体も自信を持ってくれたりとか、なんか相手の変化がすごい感じられたときに、なんだろう、うん、なんか私がやりたいのはこういうことかもとすごく思ってた。うん。なんかすごい自分が自信なくて、結構嫌いな自分だったけど、そんな自分が関わることで、そういう風ななんていうか、ある種普通の子というかネガティブな所だけでなく、普通に前向きに進んでいくためとか、なんかそういうだれしも持っている部分の感じの所を、なんか自信がついていく姿が、まあ、たぶんまぶしかったんだけど、なんか、そこがすごく嬉しかったんですね。で、こういう風な関わりが出来たら、凄いいこれから先もできたらいいなと思った。

Aがより自発的・積極的に活動を展開する際、他者からの承認（評価）は大きな力となっていたが、その背景にはAの自分自身に対する自信のなさや不安があったことも読み取ることができる。その不安故に、時として「承認を得るためのボランティア活動」という利己的な動機にもつながっていたことが想像できる。しかし、活動を通して承認を実感した現在においては、自分自身への承認という視点から、当時苦しかった自分のような存在である「高校生」に関わり、その関わりを通して高校生の自信や自己肯定感を上げていくことが目的となっていることが分かる。この変化は、ボランティア活動を通して自己承認を求めているステージから、他者を承認し支える側への変化として読み取る事が出来る。

この「自分がしてもらったことを今度は自分が行うようになりたい」とのパターンは他のインタビューからも読み取ることが出来る。

- ・ （もし自分のように悩んでいる人がいたら）ただその悩んでいる子の話を取りあえず聞いて、悩んでいる時ってこう、ちゃんと見れてないじゃないですか。冷静な判断もできないし、起きていることに対していろんなものを自分の中で加えて加工しているので、それを取りあえず解きほぐすじゃ無いですけど、邪魔なものを取っ払って、シンプルにしてそこからじゃあ、その社会に対してなのか、人に対して、自分に対してなのかは分かりませんが、何に対して自分はどう思って、どうしたいのか丁寧に聞いて、それを繰り返すしか無いのかな～って。今まで Z さんとか他の友達とか、他の人がやってくれた、私が頼りにしている大人の方が私に対してやってくれていたことを自分がそのままやっているだけという感じ。特別なことというよりは、自分がやってもらったことを今度は自分がしたいなと思うだけ。（G）

これらのコメントからは、与えられる側（承認）から与える側への転回、支援される側から支援する側の転回が見て取れる。利他性×利己性の矛盾で考えれば、利己性「自己承認」の充足とともに利他性への転回として捉えることが出来る。公益性×私益性の矛盾としても、支援される側（私益性）から支援する側（公益性）への転回として捉えなすことが出来る。ここにも、利他性（公益性）×利己性（私益性）の接近と相互浸透を見ることができる。

第5項 無償性における矛盾と自己形成への影響～ボランティア的態度と資本主義社会との葛藤と生き方への問いかけ～

本項では、無償性に関わる矛盾について、個人のプロセスを追うことでその変化を見ていきたい。

1. インタビュー調査から見える無償性の矛盾とそこからの自己形成

（1）資本主義との葛藤とそこからの自己形成

ここでは「資本主義社会における無償の贈与という矛盾とその影響」について、象徴的な G の事例を扱うこととする。G は学生時代の復興支援活動を通して自分の生まれ育った地域の魅力に気づき「地元の人のために働いているお父さんの姿がかっこいいなと思えるように」なり地元に戻ることを決意する。さらに、「被災地で亡くなられた人々に向き合うことが出来なかった」ことを痛感し、死者とその家族を支えるため地域の葬儀業者への就職を決めた。しかし、そこでこれまで G が持っていた利他性や無償で他者への貢献を行うという姿勢は、大きな葛藤を背負うことになる。

- ・ 今やっている仕事は、私は当家（＝ご遺族）のためにやってあげたい。という気

持ちがすごくあるんですけど、でもそれじゃあ会社は成り立たない。やっぱり売り上げだったり、お金がすごくきちゃうんですよ。どうしても。上からは「売り上げが少ない。もっと座布団売ってこい！」というのがあって、ノルマとかは無いんですけど、会社との折り合いをつけるのがすごく難しくて。

- ・ 私の仕事って、一日にお客さんのうちに伺って、色々相談して決めて、事務所に帰ってという感じなんですけど、担当者によっては何度も家に伺ってお会いするほど関係が作れるので、私も何度もお会いしてお話しした方がいいと思っているんですけど、それを何回もいくと、1日1回限られた時間で段取りして決めて帰ってこいと言われている。当家にいくだけならよかったんですけど、式場と火葬場は別なんですけど、火葬場は行くと、以前はついて行っていたんですけど、それはやるかと、ずっと火葬場にはいるかと、それもガソリン代の節約だとか、削減だとかで禁止。
- ・ 別にボランティアをやっていたのって、本当に相手のために別に自分にお金だったっていただかないし、何か成績が良くなるとかも無いですし、でも、自分のためもあるし、相手のためもあるし、でも今はそれが違う。自分のため、相手のため、会社のため、いろんなことを考えて今はやらなくてはいけない。それは社会人として当たり前のことだからという言葉で片付けられてしまうので、そこで無力感を感じてしまう。しかも、自分がやることとニーズがあってればいいんですけど、そこがあってないんですよ。
- ・ なので、それで私が思っていること、大切にしていることと本当にずれるので、このまま私がここにいたところで、私もその感覚に染まったら嫌だから、私が今の感覚でいられるうちに、別の場所で自分を活かそうと、前向きに転職を考えています。さすがに、人の死っていうのをただの1件としか考えられていない、そんな人のしたで働くのはもう嫌だとおもっている。冗談でもそれは言うてはいけない、ましてや上の人。そこで自分が変わったら、会社からの評価もよくなるだろうし、上からもすごくよいしょよいしょされて出世だと色々なコースが待っていると思うんですけど、でもそこに自分の価値はないので、そんな自分を変えて会社で偉くなりたいとは思っていないので、「これは無理だわ。やめます」と思って。
- ・ ある意味ボランティアを通して、今まで殻に閉じこもっていた自分が前向きになって、そこから自分を曲げないで、自分を信じ抜く、かっこよくいうと、そういう力が身についてきたのかなと思いますね。親からはボコボコに言われますけどね。ふふふふふ。甘いって。

Gは「今やっている仕事は、私は当家（＝ご遺族）のためにやってあげたい。」と述べているように、ボランティア活動を通して感じた「(震災で家族を失って) 残されたご遺族

の方々はどういう気持ちで、逆に自分はその方達のためにどういうことが出来るんだろうと考えてた」という問題意識から一貫した姿勢で仕事に取り組んでいることが分かる。しかし、所属する組織としては、「でもそれじゃあ会社は成り立たない。やっぱり売り上げだったり、お金がすごくきちゃうんですよ。どうしても。上からは『売り上げが少ない。もっと座布団売ってこい!』というのがあって」とあるように、売り上げ重視の姿勢が明確になっている。労働力の購入（労働賃金）以上の剰余価値の最大化をはかるのであれば、業務の効率化は当然の選択であるとも言える。

G は当然のことながら、資本主義そのものを否定したいのではなく、ただ「私は当家（＝ご遺族）のためにやってあげたい。」だけなのである。この G の姿勢に、ボランティアで培った利他性の姿勢をみることができる。もちろん、G は労働としてこの業務を受けているのであって、無償のボランティア活動そのものではない。しかし、G の価値の優先順位は、他者への貢献があり、その次に売り上げがあるのである。少なくとも売り上げという目的のためにサービスを提供するという、目的の逆転は起きていないことは明らかである。そのような G にとって、資本主義を体現する所属組織との葛藤を背負うことは必然の結果だったと考えられる。それは、「資本主義社会における無償性を前提とするボランティア」の持っている矛盾（葛藤）の顕在化として捉えることが出来るだろう。

(2) 矛盾との多様な向き合い方

しかし、ボランティア活動を経験した全てのものが G と同じように社会との矛盾の中で深刻な葛藤を抱えるわけでは無い。ボランティアと資本主義社会の矛盾に遭遇するかどうかやそこでどのような葛藤が生じるかは、環境面や本人の思考からも影響をうけている。ここでは、そもそも葛藤が生じなかった者や大きな葛藤にはならなかった事例についても触れていく。

【環境面による葛藤が生じない事例（I）】

I は G 同様ボランティア活動を通して「地元を大切にしようと思った。」と語っており、卒業後は実家周辺に支店のある会社に就職することを決めた。

会社にすごい貢献したいという気持ちがすごいあるから、でも会社が長続きする秘訣は社会貢献するかどうかだから、ちゃんと社会貢献する会社は長続きしているから、社会貢献を通してそれが会社への貢献にもつながっていくと思っている。うちの電力機器はこういうお店や家庭にも電気を流すために電圧を変換する機器とかを作ってるから、全ての人の役に立っている。そういう自信にもつながるし、なんかそういう仕事。でもそういう風に思えるって言うのもボランティアとかでついた自信とか、そういった、そういうのがあったからそう思っているのかなと思う。（中略）ボランティアはしていないけど、総務とか業務って、他の部門さ

ん、現場とか設計とか、に比べると何してるか分からないって言われちゃうんですけど、でも自分の仕事に誇りを持てるじゃないですけど。

I の言葉からは、自身が所属している組織（会社）がいかに社会に貢献しているかという自負を感じることができる。同時に自身の業務についても誇りをもって取り組んでいる様子がうかがえる。I のように、ボランティアを通して培われた他者への貢献の意識は、所属する組織が社会的使命を果たしているという実感を持つことで、必ずしも自分自身が直接的に関与していなかったとしても矛盾を感じることも無く充足されていることが分かる。

【本人の思考により葛藤が軽減された事例（H）】

H は、ボランティア活動を始める前から決めていた NPO（ワークーズ）へ就職し、法人で行政から受託した事業の運営責任者という立場で働くこととなった。社会的ミッションの達成が目的である NPO 法人であっても、労働者への給与を払う以上、一定の収益を稼ぐことが責任として課させる立場であり、そのことに少なからず葛藤を抱えていたことが分かる。

- ・（社会との矛盾について）無くはないですよ。NPO、ワークーズだって利益上げないと給料払えませんからね。生きていけませんからね。前提として自分自身が生きてけないと意味が無いので。苦しかったとまでは行かなかったですね。違和感があった時期はありますけど。
- ・ やっぱ、職場の中には色々な考えの人がいて、NPO とは言え規模が大きければ、お金第一、生活第一という人も中にはいて、だから入った当初というのはやっぱり今までの自分の活動と違う価値観の人が入り乱れているので戸惑いみたいなのはありましたけど、それって飲み込んで行かなきゃいけないのかなと思って、その人にはその人なりの大事なものがあって人それぞれあって、当然違うものだと思うので。それこそ、価値基準が同じだったら気持ち悪いですし。
- ・ 僕らみたいな、全国の職員が配属される職場というのは、大概はその（売り上げ目標の）ラインを割っているのだから上からは突き下げられ、下からは突き上げられみたいな。へへへ。中々・・・だからそういう場面でもやっぱり葛藤というのはありましたよね。
- ・ でも、僕の場合は影響ってあんまり大きくなかったかも知れません。前回も話したと思いますが、元々ボランティアを始めたのも自分の利益のためなので、ガチガチで人のため人のためで入ったわけじゃないから。逆に完全に人のため、人のためで入っちゃうとその後はギャップが大きいかも知れないですね。

H の場合、所属する組織自体社会的使命を果たす為に設立された NPO 法人であり、I

同様組織として社会貢献を果たしているという実感を持つことができたことは想像できる。それでも、責任者として職員への給与を保障するために利益を上げることが課され、矛盾を感じつつも働いていた様子が伝わってくる。そのような中で、H が G 程の葛藤を背負わなかった要因の一つとして、環境面だけでなく本人の社会貢献に対する認識の違いが挙げられる。本人が「元々ボランティアを始めたのも自分の利益のためなので、ガチガチで人のため人のためで入ったわけじゃないから。逆に完全に人のため、人のためで入っちゃうとその後はギャップが大きいかも知れないですね。」と述べているように、ボランティア活動についても自分自身のため（でもある）活動として捉えており、必ずしも他者への貢献ということだけに執着していない姿勢が読み取れる。結果的に、「自分の中でうまく消化していく」ことができていることが分かる。

2. 資本主義社会における無償性を前提とするボランティアの意味

ここでは、ボランティアの無償性についての矛盾について、近藤の示した資本主義とボランティアの関係についての議論¹⁵⁰を参考にしつつ検討を行いたい。現代社会は資本主義社会と言われる。カールマルクスは「資本論」において、資本主義社会の富は商品の集まりであり、その商品を分析して資本主義の解明を試みた。その結果、労働力という商品には、購入した時以上の価値を生み出す力があり、労働力の購入（労働賃金）以上の価値を剰余価値と呼び、資本家はこの剰余価値なるべく最大化することが目的であるとした。

資本主義社会とは、自由競争により利益を追求していく社会とも言い換えられる。そのような社会において、ボランティアの持つ無償性は、この資本主義の考え方とは対立する関係にある。そのことを近藤は「ボランティアは、資本制をふまえながらも、これをささえる等価交換・私的所有のエゴイズムとは、その活動形態においては、まるで反対となる。等価交換原理を無視して、利他的に自己の労働力を贈与するのである。」¹⁵¹と端的に指摘している。

(1) ボランティアに寄せられる批判と立ち位置

しかし、存在としては資本主義とは反対の活動形態を取るボランティアについて、近藤は「資本制的な商売のそとにある慈善、勤労の贈与・無給の勤労奉仕であるが、資本制そのものを否定するものではない。」としている。その理由として「ボランティアする者は資本制において恵まれている存在で、余裕があり、だから贈与も可能となっているのである。資本主義体制そのものについては、これを打倒しなくてはならないなどとは考えないのがふつうである。」ことを指摘している。

ボランティアは自由競争により利益を追求していく社会にあつて、等価交換原理を無視

¹⁵⁰ 近藤良樹，2000「ボランティアの社会的意味論—現代の菩薩行の功罪—」『HABITUS 通巻 8 号』西日本応用倫理学研究会，p.1-18

¹⁵¹ 同上，p.7

して、利他的に自己の労働力を贈与するという矛盾した存在である。しかし、全てを国家の責任とし国家のあり方を変えていくような革命的なポジションでは無く、今、目の前にある困窮や格差に対しての救済から始まり、資本主義そのものを否定するのではなく、福祉政策の充実等による個別の政策変更を求めていくというスタイルを取る。その意味においてボランティアは資本主義社会との親和性をもっており、それが国家による動員のリスクにもつながるとの批判もされている。その代表的なものが中野による「国家システムが主体を育成し、そのようにして育成された主体が対案まで用意して問題解決をめざしシステムに貢献するという（アドボカシー型の市民参加）、まことに都合よく仕組まれたボランティアと国家システムの動態的な連関である。すなわちボランタリーな活動というのは、国家システムを超えるというよりは、むしろ国家システムにとって、コストも安上がりで実効性も高いまことに巧妙な一つの動員の形でありうる」¹⁵²との指摘であろう。また、仁平は「ネオリベリズムが進む中で社会保障制度の縮小や経済規制の緩和、公的領域の民営化・準市場化が進むが、社会保障費削減の前提として、公的サービスを国に代わって代替える市民社会が必要とされ、ボランティア活動はその市民社会の中心的なカテゴリーの一つとして期待が寄せられている」¹⁵³とした。

(2) ボランティアによる利他性の強化と葛藤の必然性

近藤の指摘によればボランティアをするものは資本制において恵まれており余裕があるが故にボランティアが可能な存在であり、そのため資本制を打倒するということは通常考え無い。しかしこれは、すでに資本主義社会において労働者として賃金を得ているものを前提とした捉え方であり、大学生においては、義務教育から高校・大学とその間、必ずしも資本主義の中で賃金を得てその立場にあるわけではないことを踏まえる必要があるだろう。

桜井らは、ボランティア教育の教育的効果を「認知発達」「専門学習への動機づけと理解の促進」「市民性の獲得」の3通りに分けて説明しているが、特に、「市民性の獲得」において「市民的責任性や利他的意識を向上させることができる」ことを報告している¹⁵⁴。

10名のインタビュー調査からは、利他的な意識の向上について下記のようなコメントを見いだすことが出来た。

- ・ B: NPO とかそういう生き方をしてもいいかなと思いましたね。(社会貢献性が高いもの)
- ・ E: 単純に助けてもらったので、かつ僕がボランティア活動をしている中で、困っている人を助けてあげる人になりたいという思いが出てきていて。

¹⁵² 中野敏男, 1999「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」『現代思想』27巻5号, 青土社, p.76

¹⁵³ 仁平典宏, 2011『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会, p.5

¹⁵⁴ 桜井政成・津止正敏, 2009『ボランティア教育の新地平—サービスラーニングの原理と実践—』ミネルヴァ書房, p.8-9

- ・ F：優しくなった。人の痛みを考えられるようになった。それは、身近な人で無くても他人でも。
- ・ G：別にボランティアをやっていたのって、本当に相手のために別に自分にお金だっていただかないし、何か成績が良くなるとかでも無いですし、でも、自分のためでもあるし、相手のためでもあるし
- ・ I：ボランティアをやっていなかったら、たぶんそんな社会貢献とか考え無かった。

以上のように10人中5人がボランティア活動を行ったことによる影響として、先行研究にもある「利他的な意識の向上」に関連すると思われるコメントがあった。これは、元々ボランティア活動に取り組んで来た学生たちでもあるため、利他的な意識が活動前から高かったとも考えられるが、彼らのコメントからは活動を通して「その思いがさらに強まった（向上した）」ことが読みとれる。

ここから予想されるのは、学生がボランティア活動によって市民的責任への意識や利他的な意識が向上し、結果的に元々ボランティア活動が資本主義社会の中で存在することによる矛盾点と接続する可能性が高くなるということである。それは、ボランティア活動を行っていた学生時代以上に、新社会人になった際により明確に実感をする可能性が高いと考えられる。学生から社会人への変化とは、お金を払って教育を受けていた立場から、自身の労働力を提供し賃金を得るというそれこそ180度立場が代わることである。それまで、利他的な活動を重視して実践してきた学生達もその多くが利益追求を目的とする企業の一員となる。その中で自身のこれまでの価値観と対立する価値との間で矛盾を感じ葛藤することとなる。

(3) 資本主義というドミナント・ストーリーに対抗するオルタナティブ・ストーリーの生成

ボランティア活動の持つ無償性は、資本主義社会の在り方と矛盾関係にあり、ボランティア活動により利他性を重視する姿勢が身についた学生にとって、利益優先の企業の姿勢との葛藤は必然的に起こりうることを指摘した。このような状況をどう捉えていけばいいのだろうか。ここで自発性の議論でも用いた「ナラティブ・アプローチ」に再度注目したい。自己利益を最優先させる新自由主義が強まった現代の資本主義社会において、利益を上げる企業の姿勢はドミナント・ストーリーとして存在していると考えられる。しかし、Gは「今やっている仕事は、私は当家（＝ご遺族）のためにやってあげたい。という気持ちがある」というように、経済的な理由優先ではなく、あくまでも遺族のケアを優先している。このことは、経済的な利益を得ることを否定している訳ではない。この遺族のケア優位の発想こそ、人のために何かをなしたいというボランティア活動を通して形成された利他性であり、経済優先の価値観ではなく人間優先の価値観であるGのオルタナティブ・ストーリーと言える。2つの物語は拮抗し緊張状態が続いたが、本ケースにおいてはGの退職という形で決着を見ることとなる。そのことについてGは「私が思っているこ

と、大切にしていることと本当にずれるので、このまま私がここにいたところで、私もその感覚に染まったら嫌だから、私が今の感覚でいられるうちに、別の場所で自分を活かそうと、前向きに転職を考えています。大学の時にやっていたこともあるから、余計にもう、染まっちゃいかんと思って。」とむしろポジティブに捉えていることが分かる。そこに、人間優先の価値観への社会変革に向けた、萌芽を見ることができる。

(4) 人間優先の価値観という自己形成

G のこのような価値観はボランティアを通してどのように形成されていったのだろうか。そのことについて G は、「ある意味ボランティアを通して、今まで殻に閉じこもっていた自分が前向きになって、そこから自分を曲げないで、自分を信じ抜く、かつこよくいうと、そういう力が身についてきたのかなと思いますね。親からはボコボコに言われますけどね。ふふふふふ。甘いつて。」と述べている。この言葉から読み取れることは、人間優先の価値観はボランティアによって新たに植え付けられた価値観ではなく、従来より G が持っていた価値観であり、ボランティア活動はその考え方を強化し、自信を与えてくれたものであったということになる。

第3節 第2章小括

本章では、学生時代に復興支援活動に熱心に取り組んだ社会人 10 名を対象としてインタビュー調査を通して、以下の 3 点について分析を行った。

- (1) 矛盾を抱えたボランティアによる葛藤と自己形成に与える影響を明らかにする
- (2) ポジティブ・ネガティブという二項対立ではなく、ボランティアが抱えている矛盾によって生じる葛藤、成長、自己形成への流れと捉える
- (3) かつてのボランティア活動の経験が、その後の人生においてどのような意味を持ったのかを明らかにする。

結果として、下記のことが示唆された。

1. 自発性における矛盾と自己形成への影響～受動的態度から自発的・積極的態度への変容～

自発性がその原則となるボランティア活動だが、実際の所最初から高い自発性をもって活動に取り組む者は多くはない。調査対象者の多くも、活動開始時には必ずしも積極的な姿勢ではなかったことが伺えた。しかし、活動を通して、徐々に受動的態度から自発的態度へと変容していったことが分かる。結果として、10 名のインタビュー結果をまとめ以下のようなモデルを提示した。

- ① 活動前のステージ
- ② ボランティア活動への参加（多様な参加動機）のステージ
- ③ 指示されたことを行う受け身の活動ステージ

- ④ 活動からの学びを糧に既存の活動を修正・運営するステージ
- ⑤ 自ら課題を発見しその解決に向けて活動を生み出すステージ
- ⑥ 自分自身の軸を定め、自分自身の人生を歩むステージ

また、これらのステージの変化が起きる要因としては、(1) 震災の被害の実感、(2) 省察の機会、(3) ロールモデルの発見、(4) 活動を通した過去の意味づけの変化、(5) 活動を通した承認（評価）の 5 点を指摘した。

2. 社会性における矛盾と自己形成への影響～利他性と利己性の接近と合理的利他性の発見～

調査対象者の活動の動機を探ると、利他的な理由が 4 名、利己的な理由が 4 名、友人に誘われた等特段の動機が見いだせない者が 2 名であった。彼らのインタビュー結果からは、利己的な動機で始めたにも関わらず利他的な姿勢が強まったと考えられる傾向が読み取れ、逆に利他的な動機で始めたメンバーからは、結果的に自分自身に利益があったとの実感を口にするコメントも見受けられた。このように、利他性×利己性の矛盾から出発した動機は、互いに近接し「自分のためであり、かつ他者の為でもある」「他者の為に行うことが、結果自分のためにもなる」といった相互浸透や合理的利他性へと合流を果たしていることが読み取れた。

次に、「利他性×利己性」の矛盾の具体例として、ボランティア活動から得られる活動者自身への影響の一つである「承認」をキーワードに自己形成への影響について考察を行った。結果、ボランティア活動の承認を得られやすい構造とそれらの承認によって、活動者自身のモチベーションの向上につながるとの示唆が得られた。同時に承認を得るためのボランティア活動に陥る危険性も指摘した。

また、他者からの承認を得る立場から、自分が他者を承認する立場へという与えられる側（自己承認）から与える側（他者承認）への転回が確認され、ここにも、利他性（公益性）×利己性（私益性）の接近と相互浸透を見ることができた。

3. 無償性における矛盾と自己形成への影響～ボランティア的態度と資本主義社会との葛藤と生き方への問いかけ～

ボランティアの持つ「無償性」の原理は、自由競争により利益を追求していく資本主義社会においては、その存在自体が矛盾ないし対立を孕む関係になる。ボランティア活動による経験効果の一つとして「愛他的精神の高揚」（妹尾 2008）¹⁵⁵等、利他的精神を涵養する効果があるとの複数の報告がある。本研究においても、ボランティア活動を通して、10 人中半分の 5 名から利他的精神が向上したことが伺えるコメントが見受けられた。しかし、これらの利他的な精神と資本主義社会における態度は一致しない可能性もある。過剰に利

¹⁵⁵ 妹尾香織，2008「若者におけるボランティア活動とその経験効果」『花園大学社会福祉学部研究紀要，16』花園大学社会福祉学部，p.35-42

益を追求する企業の中においては、強い葛藤を抱える結果にもつながることが示唆された。この葛藤状態について、「新自由主義が強まった資本主義社会」というドミナント・ストーリーとまず人のために何かしたいというボランティア活動を通して形成された利他性というオルタナティブ・ストーリーとして解釈し、ボランティア活動による自己形成として人間優先の価値観への社会変革に向けた萌芽を見ることができた。

第3章 ボランティア活動による自己形成を促す支援

ここまで、矛盾を孕んだボランティアの特性故に多くの葛藤が生じ、その葛藤から学生達の自己形成につながっていることが明らかとなっている。では、これら矛盾を持ったボランティアに取り組む学生ボランティアが葛藤の中で自己形成をしていく上で、支援者達はどのように関わってきたのか。また、どのような関わりが求められているのかについて考察を行っていく。そのため、学生ボランティアの支援を専門に行う、大学ボランティアセンターとボランティアコーディネーターにおける知見を踏まえつつ、実践者のインタビューを通して考察を深めていく。

第1節 学生インタビューから見えるボランティアコーディネーターの影響

学生ボランティアから見えるボランティアコーディネーターの姿とはどのようなものだろうか。また、学生達はコーディネーターからどのような影響を受けているのだろうか。学生へのインタビューにおいて、「ボランティアを通して、目標となる人との出会いはあったか？」と尋ねた際、10名全員「出会いがあった」と答えているが、その10名中6名がその対象として、大学ボランティアセンターのスタッフの名前を挙げている。特定の選択肢などを提示したわけではなく、自由に人物を挙げてもらう形でこれだけの反応があることは注目に値すると考えられる。その要因として、インタビュー対象者は、復興支援活動を中心に担ってきた学生であり、活動を展開する上でセンターのスタッフとも関わりが強かったことが挙げられる。また、インタビュアーがそのスタッフ本人（筆者）であることも影響していると考えられる。それらの要素も踏まえつつ、大学生のボランティア活動による自己形成を促す支援のあり方を考える上で、学生の側から見た支援者の姿とその影響について整理を行いたい。

1. 学生から見た支援者の姿と関係性

まず学生は支援者をどのように捉えていたのだろうか。端的に表現しているのは「なんか職員さんだけど、一番学生に近い存在。で、何でも話せる。」「どんな相談にも乗ってくれる安心感がある」というIの言葉であろう。学生の身近な存在として、気軽に話ができる存在として捉えていたことが伺える。また、「相手の話をすごいよく聞いてあげる。」「何かを言われて、これやりなよとかじゃないですか。学生に任せる。で、怒らない」(I)や「否定しないですね。全部肯定的に返してくれる。」「安心できたし、(中略)何だろうな、怒んないな～」(B)、等、自分達学生の思いを受け止め、自分達の選択を応援してくれる存在として捉えていることが伺える。

また、G の場合、「じっくり考えたいときは、(著者) さんに相談して、内容が完成して
いて、後一押し気持ちが足りないと言うとき、背中を押して欲しいと言うときは Y さんに
相談していた」というように、自分の相談したい内容やサポートしてもらいたい内容にあ
わせて、スタッフを選択している姿勢等も確認することが出来た。

2. 具体的な技術や姿勢についての学び

このような支援者との関わりの中で学生ボランティアが学び取っているものとして、
「活動に関わる具体的な技術や姿勢」が挙げられる。「進行のファシリで高校生の思いを
引き出すとか(略)見本というか真似したのは(筆者)さん」(A)、「(筆者)さん、Y さん、
Z さんみたいにファシリテーションをうまくしたいな～というのは思っていました。」
(B)、「僕、人を動かす力に憧れているんだと思います。(著者)さんは人を使うのが上手
ですね。(略)すごい情熱って人を動かせる力があると僕は思っていて」(F)、「当時コ
ーディネーター職を意識していたし、ファシリテーションとか場の雰囲気はどう良くする
かとか、それは活かされていると思います。今の会社でも参考にしようとしているのは
(スタッフの)3 人なんですよ。」(J)等、支援者が学生と一緒にプロジェクトに関わる
際の「姿勢や関わり方」や主としてファシリテーションと呼ばれるような技術について、
学んでおり自分自身も意識的に取り入れようとし、実際にリーダーとして実践してきたこ
とが伺える。また、技術とまでは言えないが「3 人見てて思うのは、楽しそうだなと思っ
たんです。この仕事が好きなのか、楽しそうな姿を見て、自分も楽しくやるしか無いかと
思えた。」「社会人になってみて分かるのは、中々思ったようにはいかない。でもみんな楽
しい方がいいんですよ。だからいかに僕が楽しい雰囲気を作るか。やっぱり僕が働く中で
思い浮かんで重ねているのは 3 人なんですよ。」(J)のように、現在の仕事への向き合い
方についても影響が続いていることが伺えた。

3. 生き方のモデルとしての影響

さらに、技術や取り組みへの姿勢に留まらず、自分自身の進路や生き方についても影響
を受けている学生も存在した。

- ・ (3 人に会って) 自分自身の生き方で言うと、そういう NPO とか地域の仕事に関わ
るとか、(略) NPO とかそういう生き方をしてもいいかなと思いましたね。端的に言
えばお金よりもやり甲斐を取るような。自分のやりたいことを実現させている人々。
加えて、そのやり甲斐というのは、社会貢献性が高いものに取り組んでいる人々。(B)
- ・ 変な人ってこう自分の人生を生きてる感が、かつこよく見えちゃうんですね。かつ
こよく見えちゃうし真似をしたいというのもあった。大学では(著者)さん含めてそ
うですし。いま個人的な目標がかっこいい大人になるってことで。かっこいい大人に
なりたいんです。(H)

Bはその後、大学ボランティアセンターのコーディネーターになることを真剣に考え、卒業後被災地で半年間インターンシップに取り組むこととなった。Hは「カッコいい大人」の別の表現として「芯のある生き方」という言葉も使っていたが、支援スタッフの関わりを通して、自分なりの生き方の軸を見いだしていることが伺えた。また、生き方のモデルとまでは言えないが、Gにもし悩みを抱えている後輩がいたときにどうするかを尋ねた際

- ・ 何に対して自分はどう思って、どうしたいのか丁寧に聞いて、それを繰り返すしか無いのかな～って。何かそれが、今まで（著者）さんとかあっしーとか他の友達とか、親はやってないけど（笑）、他の人がやってくれた、私が頼りにしている大人の方が私に対してやってくれていたことを自分がそのままやっているだけという感じ。特別なことというよりは、自分がやってもらったことを今度は自分がしたいなと思うだけ。

（G）

自分自身が受けてきた支援を実感し、そのような関わりを今度は自分が次の世代に対して実践していきたいと考えていることが伝わってくる。コーディネーターから受けた関わりが循環していることが分かる。

4. 大学生の自己形成におけるボランティアコーディネーターの影響

本稿の目的は、復興支援のボランティア活動を通じた学生ボランティアの自己形成に与える影響である。ボランティア活動を通しての出会いや活動に取り組む上での企画や達成感など、自己形成につながる要素は多岐にわたると考えられる。そのような中で、本来ボランティアコーディネーターは、下支えや調整役として存在しており、直接的な影響は必ずしも大きくないと考えられた。しかし本調査からは、単なる繋げ役やフォロー役に留まらず、活動を行う大学生に対して、大きな影響力を及ぼしていることが伺えた。それは、活動を行う上での技術や姿勢に留まらず、仕事への向き合い方や社会に貢献して生きていく生き方など、学生達のロールモデルとしても機能していると考えられる。

第2節 調査の概要

ここまで見て来たように、学生へのインタビュー調査の結果からは学生達は活動を通して、ボランティアセンターのスタッフから大きな影響を受けていることが分かる。活動の悩みを受け止め、本人の自発的活動が展開できるようサポートするボランティアコーディネーターの存在が、彼らの活動や自己形成にも影響を与えていることが伺える。同時にコーディネーターの期待に応えたいと思うがあまり、より困難な選択をし、後に後悔することになる学生も存在していたことが判明している。そこで、本章では大学生のボランティア活動を通じた自己形成につながる支援のあり方について考察を行っていくため、支援者

側にもインタビュー調査を実施した。

第1項 調査の目的

調査の目的は、本研究における2つめの問いである「大学生の自己形成に寄与する支援のあり方はどのようなものかを検討する」ことにある。第2章で明らかとなった、矛盾を抱えたボランティア活動による自己形成に対して、それらの自己形成が促進される学生ボランティア支援の在り方について、本調査を通してその実態と共に今後の方向性について検討を行う。

第2項 調査対象者の選定

調査の対象者が所属する大学ボランティアセンターは、2011年の東日本大震災への支援活動が契機となり2012年度に発足したセンターとなっている。調査対象者選定の第一の理由は、第2章で扱った調査対象者と直接的な支援関係があることである。本研究においては、単に支援者がどのような支援を行っているかという視点だけではなく、支援を受けた学生がその支援をどのように感じ取り、自己形成に繋がっているかを明らかにすることを目的としているため、双方の視点から事例を検討することで、「大学生の自己形成に寄与する支援のあり方」を明らかにしていきたいと考えている。第二の理由は、事例としての適格性としてスタッフが大学の中で「専門職」として明確に位置付けられている点が挙げられる。2013年度からは地域連携に関わるセンターも併設されており、2つのセンターに3名のコーディネーター（常勤2名、非常勤1名）と1名のアドバイザー（著者）が所属しており、全員専門職として雇用されている。アドバイザーについては、ボランティア論やサービスマニエールの科目等も担当しており教員も兼ねているが、復興支援活動については、一部を除き単位とは関係の無いボランティア活動であり、コーディネーター同様活動のサポートスタッフとして関与している。今回は、専任のコーディネーター2名にインタビューを行った。

第3項 倫理的配慮

インタビューの実施に際しては、立教大学の研究倫理規定を遵守した。インタビューを実施する際は、調査協力者に「研究協力同意書」として以下の項目についての内容を口頭で説明し、了解の上で署名をいただいた。

- (1) 研究の意義・目的
- (2) 研究の方法
- (3) 研究参加は自由意思でありいつ参加への同意を撤回しても不利益は生じないこと
- (4) 参加したくない実験、答えたくない質問等があれば、拒否できること
- (5) 予測されるリスク、危険、心身に対する不快な状態や影響
- (6) 取得データの扱い方

- (7) 取得データの保存方法
- (8) 研究結果の開示方法
- (9) 研究実施後の問い合わせ先
- (10) その他、個別の研究内容によって特に必要なこと

第4項 質問項目の内容

- Q1：ボランティアセンター活動支援センターの方針
- Q2：ボランティアコーディネーターとしての学生との関わりのスタンス
- Q3：(学生のインタビュー結果からコーディネーターの影響を読み取るとうえで) そのような影響を与えた自身の関わりについての振り返り
- Q4：具体的な学生の悩みや葛藤にどう向き合っているか
- Q5：大学生の自己形成を促進する支援のあり方についての自身の考え

第5項 調査方法

《面接方法》半構造化面接（1名は対面、1名はZoomを活用したオンライン面談）

《インタビュー時間》それぞれ60分程度

《分析方法》インタビュー調査での発話は全て文字起こししてデータ化し、2名の発話内容を比較検討して分析した。

第3節 調査結果

第1項 調査対象者の属性

図表 3-1 調査対象者の属性

名前	取材日	性別	所属	特 徴
Y	2020年 7月21日	女	ボランティア コーディネー ター（専門 職）	2012年の大学ボランティアセンター発足時よりコーディネーターとして勤務。主に地域のコーディネーションを担当しているが、調査対象となった10名とは復興支援以外の活動での関わりもある。
Z	2020年 7月11日	女	ボランティア コーディネー ター（専門 職）	2012年の大学ボランティアセンター発足時よりコーディネーターとして勤務。主に復興支援ボランティアのサポートを担当しており、今回調査対象となった10名とも関わりを持っている。

第2項 学生との関係性とコーディネーターとしての姿勢

第1節でIが「学生にとって身近な存在」と述べていたように、コーディネーターとしても学生の身近な存在であろうとする姿勢を読み取ることができる。

- ・ 問いかけていくことと、自分のネガティブな発言に寄り添う。そこを否定しないと

いうので、信頼関係を構築して行くことは、意識しています。私たちコーディネーターは過去のことも今のことも受け止めるよ。そこから一緒に歩いて行く。(Y)

- ・ 先生・職員は指導的な立場で関わらざるを得ないと思うけど、ボランティアコーディネーターは学生と対等でありたいと思う。私たちの意見で違ったことがあれば、「それは違うんじゃないか」と言えるような関係を保つというか保障するということは気にしている所。(Z)
- ・ 心の通うやりとりの中に手続きがあるという感じ。学生が意思表示をするというそれを受け止めていくという、あとその意思表示を形にするお手伝いをするという。手続きという関係では無い。(Z)

これらの関係性について、専門職であるコーディネーターのスタンスとして特筆すべき内容について以下に整理を行った。

● 自己決定の尊重

自己決定の尊重は、ソーシャルワーカーの個別援助の原則の 1 つであり「利用者自身の人格を尊重し、自らの問題は自らが判断して決定していく自由があるという理念に基づいている」¹⁵⁶とされている。「答えは言わない。地域のニーズや課題はしっかりと伝える。彼らが答えを出していく。」(Y)、「学生が意思表示をするというそれを受け止めていくという、あとその意思表示を形にするお手伝いをする」(Z) など、両者とも学生の自己決定を尊重する姿勢を明確に持っていることが分かる。自己決定を尊重する姿勢とは、逆に言えばコーディネーターが答えを示したり、主導していく関わりではないとも言える。学生が自己決定していけるよう、必要な情報や選択肢は提示しつつ、その情報や選択肢を選び取り決定していくのは学生自身であるという関わり方を徹底していることが分かる。

● 受容

「受容」についても、自己決定同様ソーシャルワーカーの個別援助の原則の 1 つである。「利用者の心情を精神的・情緒的に受け入れること。援助者が援助を行う上で、サービス利用者の行動や態度を自らの価値観で判断して接するのではなく、そのあるがままを受け入れて問題を理解しようとする姿勢のことをいう。援助者が受容することで、利用者は自分自身に対する否定的な感情を捨て、自らの受容につながる。」¹⁵⁷とされている。「自分（学生）のネガティブな発言に寄り添う。そこを否定しない。(略) そのプロセスで本来の自分を取り戻していく」「私はどんな学生でもいったんは受け止める」(Y)、「学生がそう思っている、そういう風に思っている背景は何だろうと、背景も含めて学生の思いを理解したいと思いますね。」(Z) とあるように、2 名とも例え学生の経験が未熟故の発言や学生自身に対するネガティブな発言であっても、その発言の背景も含め理解に努め、そのまます受け止めるように心がけていることが分かる。

¹⁵⁶ 中央法規出版編集部編著、2001『新版社会福祉用語辞典』中央法規出版、p.199

¹⁵⁷ 同上、p.268

- 非審判的態度

「非審判的態度」も上記2つと同様、個別援助の原則の1つである。「援助者が援助を行う上で、自らの倫理観、価値観に基づいて、サービス利用者の行動や態度を批判したり、決めつけたりしないことをいう。利用者に対して非審判的態度を取ることで、あるがままを受け入れて、利用者を理解することにつながる。」¹⁵⁸とされている。「彼女（学生）のことを否定せずに受け止めて」「今の感情を否定しないで、その後の経験を通して自分で気づいてもらう」（Y）、「（私はこう思うよということは伝えていると思う。）でも、否定はしない」（Z）など、受容ともつながる視点だが、両者ともに学生との関わりにおいて、自分の価値観を押し付けるのではなく、学生の思いを否定することなく、最終的に自分自身で気づいていけるような関わり方をしていることが分かる。

- 肯定的なフィードバック

上記の3点はやや支援者が受動的な立場となるが、単に学生の話を受け止めるだけでなく、学生の行動や言葉に対して、肯定的に受け止め、さらに学生自身にフィードバックを行っているという点も共通点として見いだすことができた。「出した成果に対して、『頑張ったね。』と言うことだと思うんですね。」「頑張ったことには、『頑張ったね。』とフィードバックした」（Z）、「承認してあげるってことかな。」「私は期待を込めて受容するということと、一緒に歩くということを意識している」（Y）この場合、Z氏は行為に対する肯定的なフィードバックであるのに対して、Y氏は姿勢や存在に対する肯定的な態度でありその対象は違っている。しかし、共に単に受動的に受け止めるということではなく、積極的かつ肯定的に受け止め、学生にその評価をフィードバックするということは一致していると考えられる。

- 活動の結果以上にそのプロセスを重視する

活動を通して、活動先の方々から感謝されたり、社会的なインパクトを与える等の成果が上がった際、コーディネーターとして「出した成果に対して、『頑張ったね。』と言うことだと思うんですね。」（Z）というように、その成果に対してフィードバックを行っているのは前述の通りである。しかし、この評価の視点について、必ずしも成果を出すということにのみ行われているものではない。「頑張ったことには、『頑張ったね。』とフィードバックした」（Z）との言葉は、出した成果というよりは、「頑張った」というプロセスそのものに向けられた評価の言葉であろう。また、「転び方とか失敗した後に反省して、次にどう生かしていくとかそのプロセスと一緒に歩みたい。」（Y）との言葉にも同様の姿勢を見ることが出来る。「コーディネーターから見る学生の失敗の意味」を問うた際には、「彼らなりに次に活かせればそれはそれで人生の中では大きな成功体験になると思う。だから、1回だけでは見てはいない。」（Y）とあり、活動ごとの成果という視点だけでなく、それ以上にそのプロセスで学生が何を学び取り、次に繋がられているかという視点で関わっていることが分かる。

¹⁵⁸ 中央法規出版編集部編著、2001『新版社会福祉用語辞典』中央法規出版、p.496

- 様々な場面での問いかけによる振り返りの機会

また、両者の基本的なスタンスとして指示や指導ではなく、問いかけと提案という形を徹底していることが分かる。「問いかけていくことと、自分（学生）のネガティブな発言に寄り添う。そこを否定しないというので信頼関係を構築して行くことは意識しています。」「問いかけ続けたかな」（Y）、「振り返りは大事ですね。誰かとしゃべるとか、書き起こすことで、自分が何を考えていたかが明らかになるという感覚があって、大事にしたいと思っている」「これから自分はどうしたいかということを書くのは凄く大事だなと思っています。その活動が自分の人生とかアクションにどう繋がるのかというのは大事だなと思っています。それは中々、学生、自分自身では中々出来ないことだから、そのきっかけをボランティアセンターで作るのは意味があると思っています。」（Z）というように、学生にことあるごとに直接問いかけることや、場合によっては活動レポート等を課すことで、学生自身が自らの活動の意味や自分の行った役割等を振り返ることで自分が行ったことの意味を自分自身で自覚することを促していることが分かる。その振り返りのプロセスから、学生の新たな気づきや次の活動へのモチベーションへつながり循環していることも伺える。

- 活動を行う上での環境整備

コーディネーターの働きかけの対象は、活動を行う学生だけではなく、受入れ先との調整も関わってくる。これは単に受入れ側のニーズと活動者のニーズを繋げるということに留まらず、よりよい関係構築や活動を行う上での環境整備も行っていることが分かる。「危ないことがあれば出てくる。これはやっちゃいけないよ、というのは出て行こうと思っていた」（Z）、「（学生が）地域のふれあいの実行委委員会に行くときも躊躇してたので、なので一緒に実行委員会にも参加して、彼女が自分の言葉で話せるようになってきたのは後半かな。」（Y）

第3項 教育的視点から見る支援の在り方

ここまで見て来た、ボランティアコーディネーターの姿勢は、教育的な機能としてはどのように評価することができるだろうか。ここでは、パウロ・フレイレの教育論を参考に考察を行っていきたい。パウロ・フレイレは1960年代に生涯学習研究の中で、特に人権・解放に関わる教育理論を構築し、現代においても大きな影響与えている。佐藤は、フレイレの教育思想の今日的意義について「（フレイレの指摘する）学習とは、いまある社会や生活に適応するために行うのではない。そうではなくて、学習とは『世界と向き合う主体』である人間として、より幸せに生きることを求めて、『世界』に生きる自分自身と、いまある社会や生活を含む自分が生きる『世界』とを変えていくために行う」¹⁵⁹点を指摘し、いまある社会に無批判に適応することを求める今日の学習のあり方への批判を読み取って

¹⁵⁹ 佐藤雄一郎、2016「P.フレイレの「解放」の教育思想と「課題提起教育」の今日的意義―「対話」と「意識化」を媒介する「生成語」／「生成テーマ」に着目して―」『教育方法学研究 41(0)』日本教育方法学会,p.57

いる。また、アクティブラーニングやワークショップ等、学習者の主体性を重視する教育手法において、その教育思想が位置づけられている。そのため、自発的に社会に貢献する活動を通して学びを深めるボランティア活動と、その支援者（＝教育者）という関係性が本研究の支援者の在り方とも関連するものと考えられる。ただし、このような主体性を重視する教育手法について「フレイレはそのような学習のすべてを肯定していたのではない。むしろ、その一部を『放任主義的教育』と呼び、自らの教育思想がそこに位置づけられることを批判していた。」¹⁶⁰との指摘も踏まえ、慎重に検討を行っていきたい。本稿では、特にフレイレの提唱した代表的な概念である「銀行型教育」「課題提起型教育」「対話的教育」を中心に考察を行っていく。

【銀行型教育】

生徒と気持ちを通じさせる、コミュニケーションをとる、というかわりに、生徒にものを容れつつけるわけで、生徒の側はそれを忍耐を持って受け入れ、覚え、繰り返す。これが「銀行型教育」の概念である。「銀行型教育」で生徒が出来ることと言うのは、知識を「預金」すること、知識をためこむこと、そして、その知識をきちんと整理しておくこと、であろう。「銀行型教育」という概念では、「知識」とは持っている者から持っていない者へと与えられるものである。¹⁶¹

【課題提起型教育】

銀行型教育に対して問題解決型教育とは、意識の本質、すなわち意識の方向性に対応する者で、だれかが一方的に情報を伝達されるのではなく、双方向のコミュニケーションの存在を必要とするものだ。銀行型教育のトップダウンな垂直型のやり方を打ち破るような問題解決型教育は、教育する者とされる者の間の矛盾を超えていかなければその実現を見ることが出来ない。対話なくして問題解決型学習はない。

対話を通して矛盾を超えていくところには、結果として新しい関係性が生まれる。教育される側にとっての教育する側でもなく、教育する側にとっての教育される側でもない、教育する側とされる側は対等な関係として立ち現れてくる。こういうやり方では、教育する側は単に教育するだけでなく、教育される者との対話を通じて自らが教育しながら教育される。それは双方にとってお互いが主体となるやり方であり、成長の経験となるようなものである。¹⁶²

【対話的教育】

対話には、二つの次元があることがわかる。行動と省察という二つの次元である。この二つは常に連帯の関係、すなわち緊密な関係性の下にある。対話とは、世界を媒介とする

¹⁶⁰ 中原滯佳、2016「パウロ・フレイレの〈ワークショップ〉批判：ファシリテーターは教育者か」『現代社会文化研究 (63)』新潟大学大学院現代社会文化研究科, 127

¹⁶¹ パウロ・フレイレ著、三砂ちづる訳、2018『被抑圧者の教育学 50 周年記念版』株式会社垂紀書房, p.132-151

¹⁶² 同上, p.152-167

人間同士の出会いであり、世界を“引き受ける”ためのものである。言葉を発して世界を「引き受け」、世界を変革するのであるならば、対話は人間が人間として意味を持つための道そのものであると言えるだろう。

愛、謙虚さ、人間への信頼、これらがあって初めて対話は水平的なものとなり、お互いの関係が本来の意味での深い、“信頼”に満ちたものになることは当然である。愛に満ちていて、謙虚で、深い信頼に満ちているのに、お互いの深い信頼関係に繋がらないなどと言う矛盾は起こらない。

対話のないところにコミュニケーションはないし、コミュニケーションの成立しないところに本来の教育もまた、ない。教育する者と教育される者が矛盾を乗り越え、認識する対象を仲介しながら共に認識する活動を行う相互主体的な認識を作り上げる場、それが教育である。¹⁶³

これらのフレイレの教育論について原は、「フレイレの教育実践は、教師が一方的に、自らが正しいと思ったことをまくしたてるのではなく、学習者達が生活現実の中で抱えている問題を暴き出し、学習者に直視させるものだった。そこで行われる『対話』は、教師と学習者のやりとりであったし、学習者同士の喧々諤々のやりとりでもあった。そして、それは教育者と学習者を含めた人々が、自分たちが住まう世界に介入することでもあった。」¹⁶⁴とまとめているが、このようなフレイレの教育論の中にボランティアコーディネーターの学生への関わりとの共通点を見いだすことが出来る。また成は、「銀行型教育」「課題提起型教育」「対話的教育」というモチーフは「参加型学習」を論じる際によく用いられるとした上で、「参加型学習には、大別して2つの考え方があると言われる。1つは教室等の限られた空間と限られた時間設定の中で、学習者の共同作業やディスカッションを多用してすすめる学習の方法である。もう1つは、そうした学習方法を基本としつつ、学習が現実の（地域）社会とつながる形で進められ、長時間の関与を通して実際の社会変容へとつながっていく、よりダイナミックな学習像である。」¹⁶⁵とし、特に重要なのは後者の実践であるとの指摘を行っている。この特に重要な後者の参加型学習の要素を分解すると「学習が現実の（地域）社会とつながる形で進められ」「長時間の関与を通して実際の社会変容へとつながっていく」に分けられるが、これは地域社会の課題解決に向けて継続的に関わり続け社会の変容を目指すボランティア活動のありようと酷似している。

ここでは改めて、インタビューによって見いだされたコーディネーターの姿勢をフレイ

¹⁶³ パウロ・フレイレ著、三砂ちづる訳、2018『被抑圧者の教育学 50周年記念版』株式会社垂紀書房、p.170-182

¹⁶⁴ 原安利、2011「パウロ・フレイレの教育論における「対話」に関する一考察」『教育実践学論集(12)』兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科、p.111

¹⁶⁵ 成玖美、2011「フレイレ教育論と生涯学習研究：教育と政治性のあいだにある争点」『名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究(14)』名古屋市立大学大学院人間文化研究科、p.219

レの教育学、特に「課題提起型教育」「対話的教育」の視点から検証していく。

- ・ ボランティアコーディネーターは学生と対等でありたいと思う。私たちの意見で違ったことがあれば、「それは違うんじゃないか」と言えるような関係を保つというか保障するという気にはしている。(Z)
- ・ 心の通うやりとりの中に手続きがあるという感じ。学生が意思表示をするというそれを受け止めていくという、あとその意思表示を形にするお手伝いをするという。手続きという関係では無い。(Z)

Z のこのような言葉からは、「課題提起型教育」において重視される、【双方向のコミュニケーション】や【教育する側とされる側は対等な関係】を重視していることを見いだすことができる。銀行型教育のようなトップダウン・垂直型でコーディネーターが正しく、学生がそれに従うという関係ではなく、あくまでも学生を対等な存在として扱いコミュニケーションを取っていることがわかる。この点については学生側から見ても前述した I のコメント「なんか職員さんだけど、一番学生に近い存在。で、何でも話せる。」「どんな相談にも乗ってくれる安心感がある」からも上下関係ではなく、双方向のコミュニケーションが成立しており、かつ両者が対等な関係として成立していることが伺える。

また、「対等な関係」を考える時に社会的・組織的な立ち位置も重要であろう。大学教員と学生はどんなに「対応な関係」だと言ったとしても、授業においては「成績をつける側・つけられる側」という権力関係が存在する。しかし、専門職であるコーディネーターは直接的に学生を評価する立場にはない。また、ボランティア活動を行うことも行わないことも学生の自由意志であるため、コーディネーターが強制力を持つことはありえない。以上のような前提条件もまた、コーディネーターと学生の対等な関係構築のための要素となっていると考えられる。

また、Y からは以下のような言葉も見受けられる。

- ・ 私自身も関わりながら変化することを恐れない。常に失敗しても一緒に泣く覚悟はある。地域の人に謝る覚悟はある。でも一緒に謝ってくれる大人は必要かなと思っている。頑張ってみてダメだったら一緒に謝ってくれるというのが、最大の自分たちの中でも「なんかあってもボラセンも共にあるよ」というメッセージで最後もう一踏ん張り行けると思うんですね。(Y)

これも「課題提起型教育」で見られる、【教育する側は単に教育するだけでなく、教育される者との対話を通じて自らが教育しながら教育される。】【お互いが主体となるやり方であり、成長の経験となる】とつながる姿勢であろう。Y は、学生が取り組む活動について、自分とは関係の無いこととして、単に情報提供に留めているわけではなく、学生と共に悩み、学生の決定を促し、そしてその決断に対して他人事ではなく自分も一緒になって関わるというスタンスを取っている。もちろん、学生主体のボランティア活動である以上、

まったく同じ立場で関わるということでは決してない。あくまでも、取り組む課題に対してコーディネーター自身も学生と同じ主体として向き合い、そのプロセスにおいて自分自身も変化していくことを前提に関わっている事がわかる。学生 I の「何かを言われて、これやりなよとかじゃないですか。学生に任せる。で、怒らない」というコーディネーターに対する感想からも、対等な関係性と共に、お互いの主体（性）を重んじているコーディネーターの姿勢を見いだすことが出来る。

次に「対話的教育」との関連について注目して行きたい。

- ・ 振り返り大事ですね。というのは、なんかその、自分がその活動をやってどう思ったか、考えたかって、頭の中に入れておくと知らぬ間に忘れちゃう。で、誰かとしゃべるとか、書き起こすことで、自分が何を考えていたかが明らかになるという感覚があって、大事にしたいと思っている。復興支援活動とかだと、A4 のレポートに感じたことや考えたことなど、自分が今後どういうアクションして行きたいか等かなりしっかりしたレポートを書いてもらっているけど、これから自分はどうしたいかといことを書くのはすごく大事だなと思っています。その活動が自分の人生とかアクションにどうつながるのかというのは大事だなと思います。それは中々、学生、自分自身では中々出来ないことだから、そのきっかけをボランティアセンターで作るのは意味があると思っています。(Z)

Z の視点からは対話の【行動と省察という二つの次元】についての洞察を見ることが出来る。それ故に振り返り（省察）を重視し、ボランティア活動を活動だけで終わらせず、必ず振り返り（省察）の機会を持つことをセットにしている。また、Y の以下のコメントもある。

- ・ 問いかけていくことと、自分のネガティブな発言に寄り添う。そこを否定しない
というので、信頼関係を構築して行くことは、意識しています。やっぱり苦手とか怖いという言葉を最初に出す子たちって、大人に質の高い寄り添い方をされてこなかった。学校の先生は怒る存在、親は成績取らないと怒る存在。やっぱりそういう子達に対して、私たちコーディネーターは過去のことも今のことも受け止めるよ。そこから一緒に歩いて行く。そのプロセスで本来の自分を取り戻していく。本来の自分を取り戻していくと、そこから自分の未来に対して新たな一歩を踏み出せるんじゃないかなと、私は期待を込めて受容すると言うことと一緒に歩くと言うことを意識している。(Y)
- ・ そこはやっぱり願いなのかな？お前ならもっと頑張れるという願い。ですよね。
でも、その願いが無いならコーディネーターはやらなければいいなと思うし、
変化を一緒に受け止めながらプロセスを楽しみながら、時には発破も掛けるし、一緒に泣くし。コーディネーターって、AとBをくっつけるだけなら人がやる意味あるかなと思っちゃう。私たちはその先の未来に寄り添いたいというか、その

人なりにより豊かな人生を歩んでいって欲しい、という願いを持つてのコーディネーターなので

ここからは、【対話の前提としての愛、謙虚さ、人間への信頼】を読み取ることができる。「本来の自分を取り戻せば、本人は自らの力で選択肢一步を踏み出す」「私たちはその先の未来に寄り添いたいというか、その人なりにより豊かな人生を歩んでいって欲しい」という人間への信頼があって、はじめてどうしてよいかわからないという学生ともポジティブな姿勢で向き合い受容していける。その結果として、コーディネーターとの信頼関係を支えに学生達が、より積極的になっていくことなのではないかと考えられる。

ここまで見て来たようにフレイレの教育学の視点から、学生ボランティアに関わるコーディネーターの姿勢を捉え直したとき、非常に共通していることがわかる。

第4項 矛盾したボランティアにおける自己形成と支援の在り方

ここでは、第2章において明らかになった「矛盾したボランティアによる自己形成」を前提として、そのプロセスにおける支援の在り方について考察を行う。

1. 自発性における矛盾と自己形成における支援者の役割

自発性の矛盾と自己形成の関係について、第2章において受動性から自発性・積極性へのステージの変化を「①活動前のステージ②ボランティア活動への参加（多様な参加動機）のステージ③指示されたことを行う受け身の活動ステージ④活動からの学びを糧に既存の活動を修正・運営するステージ⑤自ら課題を発見しその解決に向けて活動を生み出すステージ⑥自分自身の軸を定め、自分自身の人生を歩むステージ」として示し、その変化の要因として（1）震災の被害の実感、（2）省察の機会、（3）ロールモデルの発見、（4）活動を通した過去の意味づけの変化、（5）活動を通した承認（評価）の5点を指摘した。

これらの自己形成について、ボランティアコーディネーターはどのような役割を果たしているのだろうか。

（1）学生の状況の見極めと状況に応じた対応

まず、受動性から自発性・積極性へのステージの変化について、コーディネーターは学生がどの段階にあるのかの見極めを行っていることがわかる。まず初回の面談においては、関係性の構築を重視し、必ずしも活動のマッチングを急がずその学生が何を望んでいるのかを丁寧に聞き取ろうとする姿勢が伺える。「一回の相談で活動先のマッチングをしないというのは心がけていて、何回か来てもらう中でその子の本質をこちらとしても感じていきながら、どういう関わりができる活動がいいのか、いまその学生にとって必要な活動に繋げられるように相談対応に乗っている。」「ラポールさえ形成すれば、本人がやりたい活動は見える。情報は提供しているので、その中からピックアップしてもらえる。」これは、目的が明確な学生であれば情報掲示板などで情報を手に入れすでに活動に行っているため、「私たちとしては、情報を見せても二の足を踏んでいる学生に丁寧に寄り添うこと

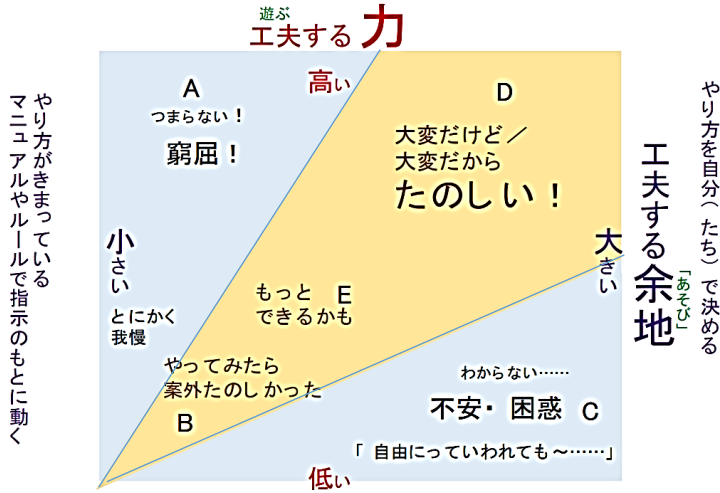
を大切にしている。」(Y) という前提に立っている。

また、活動を始めた学生についても本人の「意欲」と「実行力」によって、関わり方が変化することが分かる。「自転車で私がこいで乗せてあげるタイプ、補助輪の自転車を用意するタイプと、補助輪が外れて普通の自転車で後ろから押してあげるタイプと試しにやってみなという形で転びそうになったときにサポートするのか、G ちゃんの場合は自分で一生懸命こぎたいという感じだったと思う。」(Z) このように、意欲や実行力も個々で差があるため一人一人のニーズを見極めることが重要となるが、大まかにその関わり方を整理すると以下のような形となった。

図表 3-2 実行力と意欲に対する支援者の関わり

	実行力高い	実行力低い
意欲高い	リスクマネジメント 進捗の確認 学生が担えない部分のフォロー	リスクマネジメント ステージごとのタスク提示&進捗確認 具体的な実行内容についての提示
意欲低い	関心の掘り下げ 本人の関心のある活動の提案 本人が行動するまで待つ	活動への啓発

では「実行力」とは具体的に何を指すのだろうか。これまでの活動経験やコミュニケーション能力、リーダーシップ等、様々な力が予想されるが、西川はこの力を「工夫する力」と設定し、本人の持っている「工夫する力」と活動時の「工夫の余地」を調整することが、ボランティアコーディネーターとしての役割であるとし、以下のような図を示した。



図表 3-3 ちょうどいい余地があることがやってみるを発生させる（西川 2020）¹⁶⁶

¹⁶⁶ 西川正, 2020「ボランティアコーディネートのチカラワザを磨く!」『ボランティア情報 No,518』全国社会福祉協議会／全国ボランティア・市民活動振興センター, p.7

この西川の視点をもとに、「工夫する力」「工夫の余地」とコーディネーターの役割について考察したい。

学生の工夫する力（実行力）が乏しい場合、工夫する余地が大きすぎると「何をしてもいかわからない」という C の領域に陥ることになる。この場合、コーディネーターとして、その力に合わせたある程度枠組みの定まったボランティア活動を紹介するなどの支援が必要となる。逆に工夫する力（実行力）が高い学生にとって、定められた範囲での活動に制限されることは、A の領域のように窮屈に感じるようになる。このような学生には、より自由に取り組めるようなサポートが必要になると考えられる。また、工夫する力も工夫する余地も少ない段階（B）は、「自発性×受動性」による自己形成の③指示されたことを行う受け身の活動ステージと同じ段階であると捉えることができる。同じように、工夫する力と工夫する余地が広がる E は、④活動からの学びを糧に既存の活動を修正・運営するステージと重なる。最後の工夫する力も工夫する余地も高い状況は、⑤自ら課題を発見しその解決に向けて活動を生み出すステージと重なる。

以上のように、コーディネーターは学生の実行力すなわち工夫する力を見極めたうえで、そのステージにあった活動が展開できるようコーディネートすることが求められていると考えられる。

これらの視点は、先行研究から見いだされる「1. 学生の主体性を引き出すファシリテーターとしての関わり」とも関連している。コーディネーターの姿勢として見いだされた「自己決定の尊重」「受容」「非審判的態度」「肯定的なフィードバック」についても、コーディネーターが学生達のファシリテーター役を担っていることをより具体的な姿勢として表現しているものとして理解することができる。学生が考え、決定し、行動する過程において、その考えを受け止め、その整理を手伝いつつ、その決定を尊重し、実践する際にも学生の意志を尊重しつつサポートを行っている姿勢は、学生達にとってより主体的に行動する上で重要なサポートになっていると考えられる。当初は自分で考え決定することに自信を持てていなかった学生にとっても、より丁寧な関わりの中で少しずつ自らの考えと決断と行動を取るようになり、より積極的になっていくことが考えられる。

さらに「2. 学生の意欲・能力に応じた段階的な関わり」についても、相談初期の対応に始まり、活動時においても学生の「意欲」と「実行力」を見極めながら、どのような支援を行うかを決めていることが明らかとなった。石野のまとめにおいては、センターにおける支援では意欲・経験値・能力を総合的に捉え、学生の段階的なサポートを行っていることが示されていたが、今回のインタビューからは、意欲と実践力を別々に捉えることで、コーディネーターの関わりをマトリックス上で整理することができた。また、一人の学生と継続的に関わっているケースにおいては、学生の意欲の向上や実践力の向上という成長に応じてコーディネーターの関わり方も変化していることが明らかとなった。

(2) 自己形成の要因とコーディネーターの位置

第2章では、受動性から自発性・積極性への変化の要因として(1)震災の被害の実感、(2)省察の機会、(3)ロールモデルの発見、(4)活動を通した過去の意味づけの変化、(5)活動を通した承認(評価)の5点を指摘したが、これらの要因とコーディネーターの役割はどのように関連しているのかを考察していく。

【震災の被害の実感】については、第2章でも述べたとおり2011年～2012年という東日本大震災直後の被害が鮮明に残っている時に活動に訪れた学生が大きな影響を受けていることが伺えた。これは、学生自身が現地で直接感じるものでもあり、その影響をコーディネーターがコントロールできるものではない。むしろ、初期においては被災地の凄惨な惨状を目の当たりにした学生の精神的なケアという役割を担っていたと考えられる。

その後、現地が徐々に復興を遂げる中で、センターが主催する復興支援ボランティアのプログラムにおいては「震災当日何があったのか？」を学ぶため、ボランティア活動を行う前に震災遺構の見学や被災された方からお話をうかがう機会や交流の時間を設けており、その選定についても企画の学生と一緒に検討を行っていた。そのことにより、活動に対する目的意識を見失わず、モチベーションを維持することに繋がったと考えられる。

【省察の機会・活動を通した過去の意味づけの変化・活動を通した承認(評価)】これらの項目はコーディネーターにとって互いに関連づけられるものであると考えられる。その基本にあるのが「省察の機会」である。コーディネーターの姿勢としても出ていたが、「問いかけていくことと、自分(学生)のネガティブな発言に寄り添う。そこを否定しないというので信頼関係を構築して行くことは意識しています。」(Y)、「振り返りは大事ですよね。(振り返りを通して)その活動が自分の人生とかアクションにどう繋がるのかというのは大事ななと思います。」(Z)と両名とも振り返り(省察)の機会を持つことを非常に重視していることがわかる。この省察の機会については、プログラムに位置づけられた公式に行われるものとコーディネーターとの個々の関わりの中で行われるものがある。

《公式に行われる省察の機会》

- ・復興支援ボランティアツアー内における「振り返りの時間」
- ・ボランティアセンター主催事業における「振り返りシート」作成と提出
- ・プロジェクトリーダーによる事業終了後の「振り返り」の実施

《普段の関わりの中で行われる省察》

- ・(学生が窓口に来た時に)また行きたい?印象に残ったことは何?というようなちょっとしたことを聞くようにしている。次はどんな活動してみたいなど、次のことを含めて聞くという感じですかね。(Z)
- ・(普段の関わりの中で学生に)問いかけ続けたかな。問いに対する反応がより豊かになってくる。(Y)

省察（リフレクション）は、社会貢献活動を通じて学びを深めていくことを目的としたサービス・ラーニングにおいて、「その原点から必須の要素としてきた。」¹⁶⁷その理論的背景には、経験主義を重視した学習を提唱した Dewey を挙げることができる。Dewey は省察について「反省（reflection）するということは、実施されたことを回顧することである。そのことは、さらなる経験を取り扱う知性にとって資本が蓄積されるという、真に意味を引き出すために行われるものである。また、この反省こそ、経験の知的組織化の精髓であり、訓練された精神の神髄でもある。」¹⁶⁸とした。

インタビューからは、Y・Zとも振り返りの重要性を認識しており、学生達の関わりにおいては、活動中、活動後において「問いかけ」という形で振り返りを促していくことが分かる。また、プログラムによってはレポートの作成などを課す等、振り返る機会を積極的に作っていることが分かる。しかしこれらの振り返りが、先行研究で取り上げられた「創造的リフレクション」としてまで認識されているかは確認することが出来なかった。

【ロールモデルの発見】においては、コーディネーター自身がロールモデルとなり、学生達の成長につながるものとコーディネーター以外のロールモデルの発見とを整理して考える必要がある。前者について、コーディネーターはロールモデルになることを前提に支援を行っている訳ではないが、第1節にあったとおり身近にいる大人として「具体的な技術や姿勢についての学び」や「生き方のモデルとしての影響」があることが明らかとなっている。コーディネーターを目標にし、近づこうとすることで自己形成を図っている学生がいることがわかる。また、後者のコーディネーター以外のロールモデルの発見について、川田は地域におけるロールモデルに出会う方法について「活動する人が持つ信念を言語化し、同時にその実践を直に見せてもらうことが大切である。」¹⁶⁹としている。コーディネーターは、復興支援のプログラムを作る上で現地の方から話を聞く会や交流の機会を大切にしているが、その際誰の話を聞くかを学生のリーダーと一緒に話し合い決定をしている。このようなプロセスを通して、結果的にロールモデルを発見しやすい環境を整えていると考えられる。

また、Yの以下のコメントからは、学生のニーズに基づき、魅力的な地域の人にマッチングし、学生との関係性をサポートしている様子がうかがえる。

- ・ もっとボランティアとか地域でいろんな人に出会うことで成長して行きたいとい

¹⁶⁷ 村上徹也，2012「サービ斯拉ーニングにおけるリフレクション研究の到達点」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 20(0)』日本福祉教育・ボランティア学習学会，p.8

¹⁶⁸ ジョン・デューイ、市村尚久訳，1938『経験と教育』講談社学術文庫，p.108

¹⁶⁹ 川田虎男・河村美穂，2020「『地域の人に出会うこと』が学習者に与える影響——ロールモデルと出会うことによる学びを中心に——」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 Vol.35』日本福祉教育・ボランティア学習学会，p.92

う、その子の中にそういう願いが見えたら、よりその子の思いを実現していけるような、いろんな大人の人たちの話を聴いてもらえるようにしたりとか、私たちが相談に乗るというのもそうですけど、地域の実行委員会に出るときに彼女の場合は実行委員長が視覚障害の人だったので、そういうハンディキャップを乗り越えている姿がその実行委委員会では当たり前。そういう社会の色々な面を見てもらえたというのは大きいし、そこに若い人が来たことでイベントも活性化した。来場者も増えたと直接言ってもらえたこととか、コーディネーターだけでなく地域の人に言葉をかけてもらえるという部分かな～。関わる人数が増えているんじゃないかなと思うんですよね。私とも近くなるけど、彼女のことを深く知ることで、必要なひとにつないでいける。先輩だったり、後輩だったり、地域の人だったり、先生だったり、活動以外の人とのマッチング。

このような、マッチングの結果として学生にとってのロールモデルの発見と自己形成につながっていると考えられる。

2. 社会性における矛盾と自己形成における支援者の役割

社会性における矛盾と自己形成においては、利己的な動機で始めた学生の利他性の強化、逆に利他的な動機で始めたメンバーの私益性の実感が挙げられる。結果として、利他性×利己性の矛盾から出発した動機は、互いに近接し「自分のためであり、かつ他者の為でもある」「他者の為に行うことが、結果自分のためにもなる」といった相互浸透や合理的利他性へと合流を果たしている。第2章では特に活動を通して得られる他者からの「承認」に焦点を当てて考察を行っている。これらの自己形成において、コーディネーターはどのような役割を果たしているのだろうか。

(1) 動機における利他性×利己性という矛盾の受容と活用

まず、コーディネーターは「利他性×利己性」といボランティアの矛盾にどのように向き合っているのだろうか。また、そのような真逆の動機を持った学生に対して、どのように接しているのだろうか。

- ・ 彼らが生まれ持ったものとか、彼らのキャラクターを人生の中で誰かが圧倒的に受け止めてくれた経験が糧になるなというのは一つ信念としてあるので。私はどんな学生でもいったんは受け止める。(Y)
- ・ ボランティアって、世の中にこんなに大変になっている、関わらなきゃという。だから自己形成って、たまたまそこについてきたものだと思うんですよね。たまたまそこで関わって自分も成長したな、視野も広がったなと言う感覚だと思う。結果的に自分のためになっていたということだと思う。動機として否定はしてないけど・・・。

■「夏のボランティアプログラム」
紹介キャンペーン告知

6月18日(月)～夏期間中

新しい自分に、出会う夏。

「ちょっと」ボランティア体験プログラムに関する情報を紹介中！

夏休みにはできる！

環境と関わる活動
→一緒に汗をかこう！
→地域の環境に貢献しよう！
→ボランティア活動を通じて成長しよう！

ボランティア体験プログラム
→環境ボランティア
→福祉ボランティア
→国際ボランティア
→その他ボランティア活動 など
お気軽にご相談ください！

ボランティア活動支援センター
＜相談窓口＞
1号館地下 1cafe
12:10～16:30
夏期間中は1101教室（地域連携・ボランティア支援課）にて相談に乗ります。
9:00～17:00
いつでもお気軽にご相談ください！

2 人のコメントからは、自分自身のボランティア活動に対する認識とスタンスは持ちつつも、学生がボランティアに臨む姿勢について、すぐには価値評価を行わず「いったん受け止める」点が共通していると考えられる。このような姿勢が、一般的には正当だと見なされる利他的な動機だけでなく、自分の成長の為やその他の利己的な理由での活動のスタートも受け入れる素地となっていることが伺える。

また、左記のチラシからはセンターのプログラムにおいては、特にボランティア活動のきっかけづくりのイベントや講座において、活動者自身の成長や仲間作りなど、利己性かつ私益性につながる情報発信を積極的に行っていることがわかる。

図表 3-4 ボランティア活動支援センターのチラシ①

出典：聖学院大学ボランティア活動支援センター2018 年度事業報告書

(2) 利他性×利己性の接近に向けた働きかけ

活動導入時においては、ボランティアにおける自身へのメリットなどを強調する傾向があるが、その後活動者向けに対しては、利他性（公益性）・利己性（私益性）双方についての気づきと学びを促す機会を提供している事がわかる。

【利他性・公益性への学びの機会の提供】

視野を広げるボランティア教養講座は、社会の課題を学ぶ講座となっている。下表の通り、被差別部落の問題やハンセン病など、社会的に差別・偏見にさらされてきた問題や相模原殺傷事件やミャンマーのクーデター等、その時々社会問題なども取り上げ議論の場を設けていることが、事業報告書から読み取れる。

この講座はセンターが発足して3年目の2014年度からスタートしており、当時「ボランティアの敷居を低くするためにメリットばかりを強調していたことを反省し、ボランティアが取り組む背景にある社会的課題をしっかりと認識し考える機会を作る」との思いがあった。

主催：心理福祉学科・人間福祉学科／ボランティア活動支援センター

人生の半分以上を世の中と隔離された人々を
「家族と一緒に暮らすことができない」「35歳しても子供を産むことができない」と
まるで人権を無視した生活を
皆さんは想像することが出来ますか？



「人間回復への道 ～ハンセン病から学ぶ～」

※教職員の方々も参加できます

～ハンセン病勉強会と資料館見学会～

ハンセン病は感染力が強く非常にうつりにくい病気です。しかし、治療薬がない時代には変形をおこしやすいことから外見が大きな理由となり社会から離れてきました。強制的に療養所に入れられた患者は外出を禁止され、隔離されてきました。第二次世界大戦後、完治する治療薬が登場しても、実質的に隔離状態に置かれていました。

近年になって、この隔離状態は解かれ、元患者は社会復帰の道が開かれていますが、今も世間の無理解や偏見が続いています。

「人に偏見を持ち差別をする」といった過ちを繰り返さないためにも、この歴史を「他人事ではなく、自分たちの問題」として捉え直し、考える時間を皆さんと一緒に持ちたいと思います。

■日時
1日目(映画鑑賞)：7月15日(月)18:00～20:30 ※希望者のみ
 場所：1号館地下1階 1cafe -関連映画の上映をします
2日目(勉強会)：7月16日(火)12:15～12:55
 場所：1号館2階1201教室
 -講師：心理福祉学科長 田村孝子先生、心理福祉学部チャプレン 五十嵐成見先生
2日目(見学会)：9月27日(金)12:50～17:00
 場所：多摩全生園・国立ハンセン病資料館(東京都東村山市)
 ～ハンセン病資料館の見学と多摩全生園の敷地後、回復者の方にお話を伺います
 ※参加費 見学会参加の方は500円程度(館内への入場料に立ち寄り券)
 ※締め切り 7月12日(金)17:00まで
 ※問合せ・申込みは 聖学院大学 ボランティア活動支援センター
 (1号館地下1階 1cafe、もしくは1103教室まで)
 TEL: 048-780-1705 E-mail: vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp
 ハンセン病勉強会と資料館見学会参加申込
 7月16日・7月15日・9月27日に参加します。(あてはまるものに○をつけてください)
 名前： _____ 学籍番号： _____
 携帯電話番号： _____
 E-Mailアドレス： _____

図表 3-5 ボランティア活動支援センターのチラシ②

出典：聖学院大学ボランティア活動支援センター2019年度事業報告書

図表 3-6 視野を広げるボランティア教養講座の概要

講座名	視野を広げるボランティア教養講座
目的	社会の課題と向き合うための教養講座を立ち上げ、学生たちとともに社会の諸課題と向き合い、学ぶ機会を持っている。
過去のプログラム	<p>「人間回復への道～ハンセン病から学ぶ～」 内容：国立ハンセン病資料館見学と元患者との意見交換会</p> <p>「命をいただくということ～食肉市場勉強会と見学会」 内容：食肉市場の工場見学と職員との意見交換会</p> <p>「相模原障害者施設殺傷事件について考える集い～優生思想と人権を中心に」 内容：2016年に起きた同事件の背景について考えるシンポジウム</p> <p>「ミャンマーの今を知る」 内容：2021年クーデターの起きたミャンマーの現状について、出身者から生の声を聞きく</p>

※聖学院大学ボランティア活動支援センター事業報告書 2014～2019 を参考に筆者作成

【ボランティアから得られる学びについてシェアする機会の提供】

～ボランティア経験者の皆様へ～

ボラ年会、今年もやります。

ほっと一息、
つきませんか？ **参加者募集中！！！！**

日 時: **2019年12月16日(月)**
18:15～20:00 (受付は18:00～)

会 場: **1号館1cafe(19:00からは1104教室)**

内 容: **ボラ年表(一年を振り返ってみて…)**
ごはん(サボメンの愛情たっぷりです)
クイズ大会(他団体の事を知るチャンス)

参加条件: **ボランティア経験がある方**
参加費: **無料**

ボランティアで繋がもんの輪
どんな交流を届けよう！

主 催: 学生サポートメンバー (サボメン1)
共 催: 聖学院大学ボランティア活動支援センター
問合せ: 聖学院大学ボランティア活動支援センター (1号館地下1cafe, 1103教室)
TEL: 049-760-1700 Email: vol-support@stg.ac.jp

「ボラ年会」は、学内の個人・団体でボランティア活動に取り組む学生の交流会である。忘年会とボランティアを掛けた名称で、毎年年末の時期に実施している。普段は別々の活動を行っている学生同士が、お互いの活動を知り合い、繋がり会う機会となっているが、その中では被災地で活動を行うグループから現地の特産品が提供されたり、留学生と共に様々な国の料理を振る舞いその国の文化を発信する団体による食事の提供などが行われている。また、交流の一環として「ボランティア活動の魅力」や「活動が続いている理由」などをシェアする時間等が存在している。このような交流会においては、ボランティアの自分自身へのメリットや成長について再確認できる時間となっていると考えられる。

図表 3-7 ボランティア活動支援センターチラシ③

出典：聖学院大学ボランティア活動支援センター2019年度事業報告書

(3) 省察の機会の保障（葛藤への寄り添い）

省察の機会は、受動性から自発性・積極性への自己形成においても重要な役割を果たしていることを指摘したが、利他性×利己性における自己形成においても重要な役割を果たしていると考えられる。ボランティア活動を行った後に、その活動について振り返る事で、活動を通して気づいたこと、学んだこと、自身の成長についての確認を行うことが可能となる。同時に振り返りの中から、「どのようにすればよりよい活動になるのか?」「ボランティアに期待されている働きは何か?」などの問いかけにより、利他性や公益性を考える機会にもなり得る。ボランティアコーディネーターは、この具体的な問いかけにより、学生達の振り返りを促し結果として利他性・公益性についての自己形成、自身が得られたものや成長についての認識などの自己形成にも寄与していると考えられる。

Fのインタビューから具体的な事例を見てみたい。

- ・ 一番印象に残ったのは、お寺の住職さんのお話。学生が住職の話をしてくれていたときに寝ちゃって、住職がぶち切れてすごく怒られたことがあるんですけど、「そりゃ怒るわ」って思ったんですよね。で、「そんな中途半端な気持ちでボランティアに来るな」と言われたんですけど、本当にそうだなと思いますね。僕自身

当時はそんなに、中途半端な気持ちでボランティアに参加していたので、僕は寝て無かったんですけど、すごい勢いでいきなり怒鳴ったんですよ。本当にそうだな～というのがとても印象に残っている。僕は身近な人を亡くしたことは無いけど、復興支援に関わるってこういうことなんだなという重みを受けました。

この話は、F が 1 年の時に被災地で訪れたお寺で当時の話を住職から聞いた時のものである。F が触れているように、住職の話を聞いている中で訪れていた学生数名が居眠りをしたことにより、住職の逆鱗にふれてしまった事例である。この場所に同席していた G も印象に残る言葉として、「住職に言われた言葉で、『(ボランティアを受ける側は) ありがとうという言葉しか言えないんだ』というのが、自分の中でずっとひっかかっている、今もふとしたことで思い出すんですよ。」と述べており、当時の参加したメンバーの記憶に刻まれていることが伺える。

この「住職の怒り」という事象をそのままにしまうと、「怒られた」という事実のみで、ネガティブな経験として留まってしまうことも考えられる。しかし、ツアー内では振り返りの時間の中で、この住職のメッセージの意味やボランティアとしての在り方について話し合いが行われた。コーディネーターとしても、「なぜこのような事態になったのか?」「住職が発したメッセージの意味は何か?」「ボランティアとしてどう向き合うことができるのか?」についての投げかけを行っていった。結果として、F に取ってはこの住職のメッセージが一つの契機となり、以下のような気づきにつながっていく。

- ・ これはすごく思うんですけど、相手の立場に立って考えることを意識するようになった。僕昔からわりと相手の立場に立って考えないと、子どもの頃から怒られる家庭で育ったんですよ。でも中高で色々あって大分すさんで、冷めていたんですよ。でも改めてそれを呼び起こされたというか、やっぱり被災地の方々と関わるのは言葉も選ばなきゃ行けないし、相手の表情をみて話さなければいけないし、自分ならどういう言葉を掛けられたら嬉しいかとか、常に考えながら関わらなきゃ行けない。

その後、F はツアーのリーダーになった際、再度住職に話を聞きたいと考え、事前に手紙をしたため住職に依頼を行い、再度の講演に繋がったとの経過がある。

短期的に起きた出来事だけ見れば、失敗事例ではあるが、問いかけや省察の機会を創出することで、そこらから学び、学生達の活動や成長や自己形成につなげていけるかが、コーディネーターの重要な役割であると考えられる。

(4) コーディネーターによる承認と自己形成への影響とそのリスク

第 2 章において見て来たように「承認」を受けることは、自信や自己肯定感の向上につながり、その結果として自分自身の進路や生き方につながっていくといった多大な影響が

ある。また、藤野は承認を「愛」「人権尊重」「業績評価」に分類していた。また、山竹は承認を「親和的承認」「集团的承認」「一般的承認」に分類していた。ここでは、コーディネーターの実践と承認についての考え方を見ていきたい。

- ・ 出した成果に対して「頑張ったね。」と言うことだと思うんですよね。別に無理矢理褒めてないし、あの出た成果を私は素直に受け止めて良かったね。ということだったと思う。これをやれと言ったこともないし、これをやるんだったらつなげますよと言うスタンス。頑張ったことには「頑張ったね。」というフィードバックをした。(Z)

との Z のコメントからは、藤野の「業績評価」に対応しており、山竹の「集团的承認」や「一般的承認」に対応する承認を読み取ることが出来る。これらの承認は単に、成果に対する承認というよりは、第 2 項で触れた「活動の結果以上にそのプロセスを重視する」承認であると考えられる。そのため、成果そのもの以上に「頑張ったね」という成果に対する努力（プロセス）に焦点化した承認を行っていることがわかる。次に Y のコメントを見ると

- ・ 認めていく、受容して、承認する。だからあなたは本当に何をしたい、この地球で何を知りたいんだろう？単純に学生に興味があるし、何を知ってどう生きたいんだろう？それは年齢に関係無く。(Y)

とある。この Y の姿勢は、「～をしたから」とい条件付けの承認ではなく、学生一人一人の存在そのものを大切なものとして認める姿勢であると考えられる。それは、藤野の分類の「愛」に該当する。また、山竹の分類では、ある行為や知識・技能に対する承認ではなく、存在そのものへの承認である「親和的承認」に該当すると考えられる。パウロ・フレイレは「対話的教育」の前提として「愛、謙虚さ、人間への信頼」を挙げているが、このコーディネーターの「まず、目の前の学生の存在を認めていく姿勢」とつながっていると考えられる。Z においては、直接的にそのような承認についての言及はなかったが、「心の通うやりとりの中に手続きがあるという感じ。学生が意思表示をするというそれを受け止めていく」という言葉の中に、同様の姿勢を読み取ることが出来る。

以上のことから、ボランティアコーディネーターが関わりの中で持つ承認とは、具体的な活動への成果やプロセスという評価に留まらず、「存在そのものの承認」を含んでいるものと考えることができる。このようなコーディネーターとの関わりを通して、学生達は自信を持ち活動に取り組み、自己形成を図っていくことができると考えられる。また、中には G の「今まで Z さんとか他の友達とか、他の人がやってくれた、私が頼りにしている大人の方が私に対してやってくれていたことを自分がそのままやっているだけという感じ。特別なことというよりは、自分がやってもらったことを今度は自分がしたいなと思う」と

のコメントのように、自分が承認される側ではなく、受け止め承認していく側にもなっていくことにつながっていくと考えられる。

ただし、それらの承認は、全てがポジティブな影響を与える訳では無い。その問題点について、B の事例について検討することが必要だと考えられる。B は、在学中のボランティア活動を通して、それまで無かった自分への自信や自己肯定感を持つことが出来たと語っている。その結果、「自分と同じような境遇の人の居場所を作りたい」と思いを強く持つようになり、将来の進路として大学のボランティアコーディネーターになることを目標に定めることとなった。そのためのステップとして大学卒業後は被災地の旅館で半年間のインターンシップを経験することになるが、結果的にそこで挫折を経験することとなる。改めて当時のことを振り返った時の B の言葉の中に、コーディネーターの影響を読み取ることが出来る。

- ・ ボラセンのみなさんよいしょしてくれるじゃないですか。たぶんですけど、僕以外も思っていると思うんですけど、「やれるんじゃないかな」って錯覚を感じたことはあるんだと思います。
- ・ 失敗すべくして失敗したというのはあったと思う。やっぱ真に受けやすい性格ではあったので、よいしょされたらよいしょされるし、性格が起因した部分は大きいと思います。ただ、さっきも言いましたけど、ボラセンの人たち良い意味でも、反対の意味でもかも知れませんが、褒めてくれるじゃないですか、あっ、私出来るんだという自己肯定感は育つんですけど、そこで行き過ぎちゃう人もいるんだと思うんですよ。これは何かを否定する訳じゃ無いんですけど。
- ・ 正直に言うとその（コーディネーターの）期待に応えたいなという思いもちょっとありました。当時。

B の挫折経験そのものは結果的に B のさらなる成長の糧として意味づけられていることが後に語られている。ここで重要なのは、コーディネーターの関わりが、結果的に学生を支配することにつながるリスクであろう。これは、コーディネーターが自己決定・受容・肯定的なフィードバックを行う中で、自分自身の自信を持ちより主体的になった結果として捉えれば、失敗も含めたチャレンジ精神が涵養されたと捉えることもできる。しかし、「（コーディネーターの）期待に応えたい」がために自らの行動を選択したとすれば、そこには自発性を支援していたはずのコーディネーターが、コーディネーターの望むように学生が自発的に行動したこととなり、承認によって学生を支配する結果につながってしまったとも考えられる。

この件について、当事者であるコーディネーターは驚きと共に「ボラセンに褒められるためにやっているわけでは無いと言うことはちゃんと指摘する必要があるように感じた。コーディネーターは素直に表現するけど、コーディネーターの期待に応える必要な無いと言うことかな」と述べている。学生の主体性を伸ばす関わりは、同時に学生の依存を助長する関わりにもなり得ることを自覚したうえで、過剰な評価や期待を表現することについ

ては慎重な態度が求められると考えられる。

3. 無償性における矛盾と自己形成における支援者の役割

第2章では、ボランティアの持つ「無償性」の原理は、自由競争により利益を追求していく資本主義社会においては、その存在自体が矛盾ないし対立を孕む関係になることをGの事例を通して明らかにした。同時にボランティア活動を通して、利他性の向上が見られることを確認した。これは、Gの大学卒業後の事例でもあり、当然ながら卒業後の出来事に対してボランティアコーディネーターが直接的な関与はしていない。そこで、本項でのボランティアコーディネーターの支援の在り方として、社会の持つ矛盾を学ぶプログラムの実施と学生時代のGの社会と対峙する姿勢の形成に焦点を当てて考察を行う。

(1) 社会の持つ矛盾を学ぶプログラムの実施

2.社会性における矛盾と自己形成における支援者の役割 (2) 利他性×利己性の接近に向けた働きかけで、記述した「視野を広げるボランティア教養講座」は、差別や偏見等の被害を受けた当事者から直接話を伺い、その場の議論や振り返りを通して、利他的な姿勢や公益性について学ぶだけでなく、現代社会が抱えている矛盾や課題を学び、その課題を他人事として捉えるのではなく、自分ごととして捉え「ボランティアとして、そのような課題や社会をどう変革していくか」について考える機会でもあった。それはフレイレが指摘するような「本質的な省察を行うものであるから、常に現実の本当の姿を明らかにしていく」¹⁷⁰とする問題解決型教育ともつながっていると考えられる。そのため、参加者の「意識化」にもつながっているものと考えられる。

(2) Gの社会と対峙する姿勢の形成とコーディネーターの役割

改めて、Gの無償性と資本主義との矛盾に関する葛藤がどのように生じているかを整理したい。Gは、社会人になって生じた葛藤について、決して学生時代に備わったものではなく、元々自分がもっていた要素だと認識していた。

- ・ 元々そういう要素は自分の中であって、その社会に対して、そのなんか反抗している自分もけっこう、元々少しく、反抗的な自分、自分を貫きたいという熱い思いを持った自分がいて。それをずっと隠して生きてきたけど、色々な人に出会ってそれが芽を出したという感じです。 急に出てきたものじゃなくて、元々根本に根っこにあったものが開いたという感じなのかなと思う。

しかし、当初はそんな自分に自信を持てずにいたが、ボランティア活動を通してそれまで閉じこもっていた自分から前向きになり、自分を信じ抜く力を持てるようになったと語っている。具体的にはボランティアを通して「そのありのままの自分を受け止めてくれる人

¹⁷⁰ パウロ・フレイレ著、三砂ちづる訳、2018『被抑圧者の教育学 50周年記念版』株式会社垂紀書房、p.156

がいるという実感を持てたこと」が安心感につながり、だんだん変化していった。

- ・ ボランティアを通して、今まで殻に閉じこもっていた自分が前向きになって、そこから自分を曲げないで、自分を信じ抜く、かつこよくいうと、そういう力が身についてきたのかなと思いますね。
- ・ 大学に入ってからなんか素のありのままの自分でいてもちちゃんと受け止めてくれる人がいるということが、出来たときから、相手のことも自分のことも信じられるようになって、そこからうん、なんかこんな自分でも受け止めて一緒にいてくれる人がいるから、だから、まあこれで大丈夫なんだなって思えて、そこからだんだん変わったな~と思った。
- ・ 自分がその当時持っていた価値観にプラス、なんか豊かさみたいなのを与えてくれたのがボランティアやってからだなと思って。元々自分の中にある物事に対する価値観って中々変えられないじゃないですか。でも、それを变えるんじゃないかと、それにプラスなんかいろんな人にあたり、いろんなものを見たり、美味しいものを食べたりとか、言葉を聞くことによって、なんか人としての豊かさを備えられるようになったな~と思って。

そんな G にとって、ボランティアセンターのスタッフは、「私の気持ちを読み取って、寄り添ってくれる。」存在であり、「後一押し気持ちが足りないと言うとき、背中を押して」くれる存在でもあった。

- ・ 私の中で（筆者）さんと Z さんて、なんか、静と動という感じで。私が何かプロジェクトに対して、こういう企画をしたいと思ったときにじっくり考えたいときは（筆者）さんに相談して、ほぼほぼ内容が完成していて、後一押し気持ちが足りないと言うとき、背中を押して欲しいという時は Z さんに相談しているんですよ。それに最近気づいて。なんか、Z さんって凄くいい意味でフラットなんですよ。「いいじゃん。それやりなよ」みたいな。その軽さが凄く大事だなと思って。なんか弾みをつけてくれる。なんかそれが凄く学生時代の頃には、助けになったな~って。今思うとそうですね。（筆者）さんは私の気持ちを読み取って、寄り添ってくれる。ついこう思っているんだけどというのを（筆者）さんに甘えてしまう。気持ちを吐き出して整理してもらう時には（筆者）さん。

そして、現在においては、もし悩んでいる人がいたら、自分が今までやってもらったようにしてあげたいと考えている。それは、「その人の思いを丁寧に聞いて、それを繰り返す」という行為だと G は語っている。

- ・ （もし自分のように悩んでいる人がいたら）ただその悩んでいる子の話を取りあえず聞いて、悩んでいる時ってこう、ちゃんと見れてないじゃないですか。冷静な判断もできないし、起きていることに対していろんなものを自分の中で加えて加工しているので、それを取りあえず解きほぐすじゃ無いですけど、邪魔なものを取っ払って、シンプルにしてそこからじゃあ、その社会に対してなのか、人に

対して、自分に対してなのかは分かりませんが、何に対して自分はどう思って、どうしたいのか丁寧に聞いて、それを繰り返すしか無いのかな～って。今まで Z さんとか他の友達とか、他の人がやってくれた、私が頼りにしている大人の方が私に対してやってくれていたことを自分がそのままやっているだけという感じ。特別なことというよりは、自分がやってもらったことを今度は自分がしたいなと思うだけ。

ここまでの流れを整理したい。社会に対して反抗的な自分、自分を貫きたいという熱い思いを持っていた G は、ボランティア活動を通して、そのような自分を認めてくれる人に会い、今まで殻に閉じこもっていた自分が前向きになり、そこから自分を曲げないで、自分を信じ抜くことができるようになっていった。ボランティアコーディネーターは、そんな自分を認めてくれた人であり、現在においては、自分がやってもらったことを今度は自分がしたいと思えるようになっていく。

では、そんな G の姿をコーディネーターはどう捉え支援を行っていたのだろうか。直接 G の支援を行った Z からは、基本的には G の力を認め、本人の確認相手となっており、特段危険なことが無い限りは、本人達が進めたいように実現できるようサポートをしていたことがわかる。

- ・ G さんは力があつたし、ちゃんと自分達で考えて、自分達の祭りにするということは保障してあげたいなというのはありました。究極の学生による学園祭を応援する。あとはなんか危ないことがあれば出てくる。これはやっちゃいけないよ、というのは出て行こうと思っていたけど、あとは進行を確認して行って、自分達がちゃんと進めているなということを確認する相手になっていたと思う。(Z)

フレイレは、問題解決型教育を目指す教師の在り方について「生徒の認識活動に応じて、常に自らの認識活動をやり直していく。生徒は単なる従順な知識の容れ物ではなく、教師との対話を通じて、批判的な視座を持つ探求者となる。」と指摘している。また「問題解決型教育は本質的な省察を行うものであるから、常に現実の本当の姿を明らかにしていく。銀行型教育は人を沈めてしまうような状況にとどめおこうとするが、問題解決型教育は逆に人の意識の表出を探求し、結果としてそれは現実に切り込むような鋭い批判を展開することになる。」¹⁷¹としている。また、「意識化」即ち「自らの人間化を阻害するものに対して、闘うことが出来るような活動計画が出来るように整えていくこと」¹⁷²の重要性を指摘している。

G は、ボランティア活動を通して、「被災地のニーズに基づいた活動を作り替え生みだし

¹⁷¹ パウロ・フレイレ著、三砂ちづる訳、2018『被抑圧者の教育学 50 周年記念版』株式会社垂紀書房、p.156

¹⁷² 同上、p.237

ていく」経験を蓄積してきたが、そのプロセスにおいて、コーディネーターは常に対話の相手として存在し、「被災地で求められていることは何か?」「どうすればよりよい活動になるか?」「そのためには何が必要か?」「自分たちに出来ることは何か?」を問いかけると共に、一緒にその問いと向き合ってきた。その中で、G の現実社会に対する批判的視座は磨かれていったのではないだろうか。また、ボランティア活動とは、困った人を支えるというソーシャルサービスの機能だけでなく、困らない社会を作るというソーシャルアクションの機能をも含んでいるものである。コーディネーターとの対話を通して、今ある社会を無批判に受け入れるのではなく、そのような社会をも変革していくという姿勢を身につけることにもつながった可能性も指摘しておきたい。

第4節 第3章小括

第3章では、ボランティア活動による自己形成を促す支援について、インタビュー調査を元に考察を行った。

1. 学生インタビューから見えるボランティアコーディネーター

第2章の学生へのインタビューからは、ボランティア活動の支援者であるボランティアコーディネーターが活動への知識が技術におけるモデルだけでなく、ロールモデルとしてキャリア形成にもつながる影響を持っていることが明らかになった。

2. 学生との関係性とコーディネーターとしての姿勢

そのようなコーディネーターの役割については、2名のインタビュー内容を整理した結果、「自己決定の尊重」「受容」「非審判的態度」「肯定的なフィードバック」「活動の結果以上にそのプロセスを重視する」「様々な場面での問いかけによる振り返りの機会」「活動を行う上での環境整備」といった共通の姿勢を読み取ることが出来た。

3. 教育的視点から見る支援の在り方

さらにこれらのコーディネーターの役割について、パウロ・フレイレの教育理論から考察を行ったところ、コーディネーターの姿勢からは「課題提起型教育」において重視される、【双方向のコミュニケーション】【教育する側とされる側は対等な関係】【教育する側は単に教育するだけでなく、教育される者との対話を通じて自らが教育しながら教育される。】【お互いが主体となるやり方であり、成長の経験となる】等の要素を読み取ることができた。また対話的教育につながる視点として、【省察の重視】【対話の前提としての愛、謙虚さ、人間への信頼】をコーディネーターの姿勢に読み取ることが出来た。

4. 矛盾したボランティアにおける自己形成と支援の在り方

第 2 章において明らかになった矛盾を抱えたボランティアによる自己形成を前提として、そのような自己形成の過程においてボランティアコーディネーターの果たす役割について考察を行った。

(1) 自発性における矛盾と自己形成における支援者の役割では、受動性から自発性・積極性への変化の過程において、コーディネーターとしては「実行力」と「意欲」という視点で学生をとらえ、その段階に応じて関わり方を変化させていることが明らかとなった。また、さらに考察を深め、学生の「工夫する力」を見極め学生への投げかけを行っているとの知見を得ることができた。

(2) 社会性における矛盾と自己形成における支援者の役割では、利他性（公益性）、利己性（私益性）それぞれに学びを得られるプログラムを提供していることが確認された。また、活動時の省察を通して、活動者の気づきや学び、成長を促すと共に、より公益性の高い活動への動機づけなどにつなげていることを指摘した。また、「承認」に注目すると、コーディネーターの学生への承認は、「活動時の評価」に留まらず、存在そのものへの承認をも含むものであることを指摘した。

(3) 無償性における矛盾と自己形成における支援者の役割においては、G の社会に対峙する姿勢の形成過程を確認し、コーディネーターの関わりにパウロ・フレイレの「対話的教育」を見ることができた。その結果、G の現実社会に対する批判的視座は磨かれていった可能性を指摘した。

終章 結論と今後の課題

本研究では、ボランティアの持つ矛盾点に着目し、ボランティア活動が大学生の自己形成に与える影響について研究を行った。ボランティア概念は、「自発性」「社会性」「無償性」の3原則と呼ばれる特徴があるとされているが、「ボランティアとは、わが国においてはまだ生成途上の概念であると言えよう。」¹⁷³、『ボランティア』の定義は常に揺らいできた¹⁷⁴、「実際には、様々なイメージを持たれていて、人によって捉え方も考え方も違う」¹⁷⁵等、その定義の曖昧さが指摘されてきた。本研究においては、ボランティアの持つ3つの原則は、矛盾を孕んだものである点を指摘した。その上で、学生達はむしろこのボランティアの持っている矛盾の中で葛藤し、成長・自己形成を行っているとの分析の枠組みを立て以下の2点について検討することとした。

- (1) 矛盾を抱えたボランティア活動が、活動実践者である大学生の自己形成に与える影響を明らかにする

ボランティア活動の抱える矛盾を整理した上で、それが活動実践者である大学生にどのような影響を与えるのかについて検討を行う。単にポジティブ・ネガティブという二項対立ではなく、ボランティアが抱えている矛盾によって生じる影響から、自己形成への流れを捉えることを目的とする。

- (2) 大学生の自己形成に寄与する支援のあり方はどのようなものかを検討する

矛盾を抱えたボランティア活動による自己形成の在り方を確認した上で、それらの自己形成が促進される学生ボランティアの支援の在り方について、検討を行う。

第1節 第1章総括～学生ボランティア研究の現在地～

本章では、本研究の前提となる概念と現状、先行研究について整理を行った。「大学生」については、大人でも子どもでもない青年期と位置付けられており、自己形成はその年代の発達課題として捉えることができた。また、ボランティア活動との関係では、大学生にとって固有の生活世界を作り上げる特有のイベントとして認識されている。しかし、大学受験や学業、アルバイト、就職活動等に比べると、必ずしも優先順が高いわけではなく、これまでもその影響について、中心的に扱われてきたわけではない。大学生のボランティア活動による自己形成への影響を研究することは、改めて学生生活の選択肢としてのボランティア活動の意義を再確認するためにも有効であろう。また、大学生の「自己形成」は、古くは E・H・エリクソンのアイデンティティ論に始まり、現代の青年心理学においても、多様な発達課題として捉えられており、青年研究の主要なテーマであることが確認された。

¹⁷³ 内海成治, 1999「まえがき」『ボランティアを学ぶ人のために』世界思想社, p.i

¹⁷⁴ 中山淳雄, 2007『ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～』三重大学出版会, pp.61

¹⁷⁵ 李永淑, 2015『小児がん病棟と学生ボランティア—関わり合いの人間科学—』晃洋書房, p.i

本稿では、ボランティアの自己形成について、「ボランティア活動を通じた意識や行動の変化によって進展する過程」と定義して扱うものとした。さらに、ボランティア活動による自己形成の影響の全体像を捉えるため、鈴木の人格論を用いることとした。

学生ボランティアの歴史は、関東大震災を契機に立ち上がったセツルメント活動にまで遡ることが出来る。1950～80年代における学生ボランティアの動向については、ほとんど調査等を行われてこなかったが、1995年に起きた阪神・淡路大震災では100万人を越えるボランティアの約半数は大学生であったことなどから、大学生とボランティアの関係を近づける契機となった。学生ボランティアに関わる政策としては、2000年代に行われた「奉仕活動の義務化」に関わる議論を経て、「ボランティア活動」と「奉仕活動」の整理が行われ、文部科学省の提言においても大学でのボランティア活動や推進体制整備が進められた。その後の調査からは、全国の大学・短大においてボランティア関連の科目や大学ボランティアセンターの設置が増加し続けていることが明らかとなっている。さらに、大学を巡る動きとして「教育」「研究」に加え「社会貢献」への期待が強まっており、その側面からも学生ボランティアへの期待が高まっていることを指摘した。さらに、学生ボランティアのリスクとして、教育面を強調することにより、社会的機能として「動員」に巻き込まれる可能性が高い点を指摘した。

ボランティア活動が活動者自身にも影響を及ぼすことは、当初より想定されていたものの1960年代においては、ボランティアの副次的な効果であり、そのことを強調することは誤った目的であるとの考え方が主流であった。しかし、1970年代以降「参加すること」を重視する考え方が強まり、1980年代には「自分のため」や「楽しさ」の意義を持ち出す傾向が強くなっている。1995年の阪神・淡路大震災を経て活動者本位のボランティア論がより主流となっていった。これらの流れは、国のボランティア推進施策においても活用されボランティア活動を「自己開発・自己実現につながる生涯学習」と捉え普及されてきた経緯がある。その具体的な影響については、全国社会福祉協議会の「全国ボランティア活動実態調査」からも見る事ができる。ボランティア活動で得られたこととして「多くの仲間が出来た」「新しい自分を発見できた」「新しい知識や技術を習得することが出来た」「自分の人格形成や成長にプラスになっている」「生きがいを得ることが出来た」などの項目について、多くの回答が得られており、ボランティア活動の教育効果を確認することができる。研究面においても、ボランティア活動の教育効果が注目され、自己報酬感・愛他的精神の高揚・人間観の広まりなど、多様な影響を読み取ることが出来る。

特に学生ボランティアに関わる特徴としては、公益財団法人日本財団学生ボランティアセンターによる、大学生1万人を対象にしたアンケート結果からは、ボランティア活動を始めたきっかけとして「自己実現・自分自身のため」という利己的な理由が27.5%と高く、「社会貢献への意識」の8.2%と3倍以上の差があったことから、ボランティア活動が「自分のため」の活動として普及していることが分かる。世代ごとの活動動機を比較して見ても、「自分が人間として成長できる」という項目は若い世代に顕著に見られる傾向で

あることを確認した。また、白川らが行った大学で行われるボランティア活動の分類を参考にしつつ、本稿で扱う「ボランティア活動」はあくまでも正課外（単位としては認定されていないもの）であり、かつ大学ボランティアセンターが関与する大学内の活動を対象とすることを確認した。

研究面においては、序章でも整理を行っているが、学生ボランティアについての先行研究を整理した結果、（１）ボランティア活動を通じた対象者・地域への影響（２）活動者自身への影響（教育効果）（３）支援のあり方の３つに分類できることを報告すると共に、本稿にもつながる活動者自身への影響（教育効果）への研究がもっとも充実している分野であることを確認した。

第１章の後半では、学生ボランティアに関わる支援の現状と先行研究の整理を行った。大学におけるボランティア支援の窓口になる大学ボランティアセンターは、全国で約 170 設置されており専門のボランティアコーディネーターを配置しているところも増えている。ボランティアコーディネーターの機能的な 8 つの役割「①受け止める②求める③集める④つなぐ⑤高める⑥創り出す⑦まとめる⑧発信する」とコーディネートの基本的な意味である「結ぶ：調整する、対等にする」という機能^{176・177}が報告されている。また、大学におけるボランティア支援の特徴として、教育機能が重視されている点を指摘している。教育機能に注目した学生ボランティア支援に関わる先行研究の整理では、限られた先行研究から、学生の学びや変容、すなわち自己形成につながる関わりの視点として

1. 学生の主体性を引き出すファシリテーターとしての関わり
2. 学生の意欲・能力に応じた段階的な関わり
3. 学生が様々な立場の人と協働する際に対等・公平に関係を構築できるような場の設定
4. 活動全体を通じた創造的リフレクション
5. 全体を通して、指示・指導ではなく受容・共感に基づく支持的な関わり

の 5 つの視点を見いだした。

第 2 節 第 2 章総括～矛盾を孕むボランティアを通じた活動者自身への影響～

第 2 章では、大学 4 年間復興支援の活動に取り組んだ卒業生を対象として実施したインタビュー調査にもとづいて、学生時代にどのようなボランティア活動に取り組み、そこで得られた経験の影響について「矛盾を抱えたボランティアによる葛藤と自己形成に与える影響」「ポジティブ・ネガティブという二項対立ではなく、ボランティアが抱えている矛

¹⁷⁶ 筒井のり子、1990『ボランティア・テキストシリーズ⑦ボランティアコーディネーターその理論と実際』大阪ボランティア協会、p.66

¹⁷⁷ 筒井のり子、2015「ボランティアコーディネーションの理解」『ボランティアコーディネーション力第 2 版』日本ボランティアコーディネーター協会、p.157

盾によって生じる葛藤、成長、自己形成への流れ」「かつてのボランティア活動の経験が、その後の人生においてどのような意味を持ったのか」という3点について整理を行った。

1. 自発性における矛盾と自己形成への影響

自発性がその原則となるボランティア活動だが、実際の所最初から高い自発性をもって活動に取り組む者は多くはない。調査対象者においても、活動開始時においては必ずしも積極的な姿勢ではなかったことが伺えた。しかし、活動を通して、徐々に受動的態度から自発的態度へと変容していったことが分かる。結果として、10名のインタビュー結果をまとめ以下のようなモデルを提示した。

- ① 活動前のステージ
- ② ボランティア活動への参加（多様な参加動機）のステージ
- ③ 指示されたことを行う受け身の活動ステージ
- ④ 活動からの学びを糧に既存の活動を修正・運営するステージ
- ⑤ 自ら課題を発見しその解決に向けて活動を生み出すステージ
- ⑥ 自分自身の軸を定め、自分自身の人生を歩むステージ

また、これらのステージの変化が起きる要因としては、(1) 震災の被害の実感、(2) 省察の機会、(3) ロールモデルの発見、(4) 活動を通じた過去の意味づけの変化、(5) 活動を通じた承認（評価）の5点を指摘した。

2. 社会性における矛盾と自己形成への影響

調査対象者の活動の動機を探ると、利他的な理由が4名、利己的な理由が4名、友人に誘われた等特段の動機が見いだせない者が2名であった。彼らのインタビュー結果からは、利己的な動機で始めたにも関わらず利他的な姿勢が強まったと考えられる傾向が読み取れ、逆に利他的な動機で始めたメンバーからは、結果的に自分自身に利益があったとの実感を口にするコメントも見受けられた。このように、利他性×利己性の矛盾から出発した動機は、互いに近接し「自分のためであり、かつ他者の為でもある」「他者の為に行うことが、結果自分のためにもなる」といった相互浸透や合理的利他性へと合流を果たしていることが読み取れた。

次に、「利他性×利己性」の矛盾の具体例として、ボランティア活動から得られる活動者自身への影響の一つである「承認」をキーワードに自己形成への影響について考察を行った。結果、ボランティア活動の承認を得られやすい構造とそれらの承認によって、活動者自身のモチベーションの向上につながることとの示唆を得られた。同時に承認を得るためのボランティア活動に陥る危険性も指摘している。

また、他者からの承認を得る立場から、自分が他者を承認する立場へという与えられる側（自己承認）から与える側（他者承認）への転回が確認され、ここにも、利他性×利己性の接近と相互浸透を見ることができた。

3. 無償性における矛盾と自己形成への影響

ボランティアの持つ「無償性」の原理は、自由競争により利益を追求していく資本主義社会においては、その存在自体が矛盾ないし対立を孕む関係になる。ボランティア活動による経験効果の一つとして「愛他的精神の高揚」¹⁷⁸等、利他的精神を涵養する効果があるとの複数の報告がある。本研究においても、ボランティア活動を通して、10 人中半分の 5 名から利他的精神が向上したとことが伺えるコメントが見受けられた。しかし、これらの利他的な精神と資本主義社会における態度は一致しない可能性もある。過剰に利益を追求する企業の中には、強い葛藤を抱える結果にもつながることが示唆された。この葛藤状態について、「新自由主義が強まった資本主義社会」というドミナント・ストーリーとまず人のために何かしたいというボランティア活動を通して形成された利他性というオルタナティブ・ストーリーとして解釈し、ボランティア活動による自己形成として人間優先の価値観への社会変革に向けた萌芽を見ることができた。

第 3 節 第 3 章総括～学生ボランティアの自己形成を促す支援～

第 3 章では、第 2 章で明らかとなった、矛盾を孕んだボランティアの特性故に多くの葛藤が生じ、その葛藤から学生達の自己形成につながっていることを前提に、学生ボランティアの支援を専門に行う、大学ボランティアセンターとボランティアコーディネーターにおける知見を踏まえつつ、実践者のインタビューを通して「これら矛盾を持ったボランティアに取り組む学生ボランティアが葛藤の中で自己形成をしていく上で、支援者達はどのように関わってきたのか。」また、「どのような関わりが求められているのか」について考察を行った。

1. 学生インタビューから見えるボランティアコーディネーター

第 2 章の学生へのインタビューからは、ボランティア活動の支援者であるボランティアコーディネーターが活動への知識が技術におけるモデルとしてだけでなく、ロールモデルとしてキャリア形成にもつながる影響を持っていることが明らかになった。

2. 学生との関係性とコーディネーターとしての姿勢

そのようなコーディネーターの役割については、2 名のインタビュー内容を整理した結果、「自己決定の尊重」「受容」「非審判的態度」「肯定的なフィードバック」「活動の結果以上にそのプロセスを重視する」「様々な場面での問いかけによる振り返りの機会」「活動を行う上での環境整備」といった共通の姿勢を読み取ることが出来た。

¹⁷⁸ 妹尾香織，2008「若者におけるボランティア活動とその経験効果」『花園大学社会福祉学部研究紀要，16』花園大学社会福祉学部，p.35-42

3. 教育的視点から見る支援の在り方

さらにこれらのコーディネーターの役割について、パウロ・フレイレの教育理論から考察を行ったところ、コーディネーターの姿勢からは「課題提起型教育」において重視される、【双方向のコミュニケーション】【教育する側とされる側は対等な関係】【教育する側は単に教育するだけでなく、教育される者との対話を通じて自らが教育しながら教育される】【お互いが主体となるやり方であり、成長の経験となる】等の要素を読み取ることができた。また対話的教育につながる視点として、【省察の重視】【対話の前提としての愛、謙虚さ、人間への信頼】をコーディネーターの姿勢に読み取ることが出来た。

4. 矛盾したボランティアにおける自己形成と支援の在り方

第2章において明らかになった矛盾を抱えたボランティアによる自己形成を前提として、そのような自己形成の過程においてボランティアコーディネーターの果たす役割について考察を行った。

(1) 自発性における矛盾と自己形成における支援者の役割では、受動性から自発性・積極性への変化の過程において、コーディネーターとしては「実行力」と「意欲」という視点で学生をとらえ、その段階に応じて関わり方を変化させていることが明らかとなった。また、さらに考察を深め、学生の「工夫する力」を見極め学生への投げかけを行っているとの知見を得ることができた。

(2) 社会性における矛盾と自己形成における支援者の役割では、利他性（公益性）、利己性（私益性）それぞれに学びを得られるプログラムを提供していることが確認された。また、活動時の省察を通して、活動者の気づきや学び成長を促すと共に、より公益性の高い活動への動機づけなどにつなげていることを指摘した。また、「承認」に注目すると、コーディネーターの学生への承認は、「活動時の評価」に留まらず、存在そのものへの承認をも含まれるものであることを指摘した。

(3) 無償性における矛盾と自己形成における支援者の役割においては、Gの社会に対峙する姿勢の形成過程を確認し、コーディネーターの関わりにパウロ・フレイレの「対話的教育」を見ることができた。その結果、Gの現実社会に対する批判的視座は磨かれていった可能性を指摘した。

第4節 本研究全体の総括と意義

本研究の目的は、1点目にボランティアが抱えている矛盾が活動実践者である大学生にどのような影響を与えるのかについて単にポジティブ・ネガティブという二項対立ではなく、自己形成への流れを捉えることである。また、2点目は矛盾を抱えたボランティア活動による自己形成の在り方を確認した上で、それらの自己形成が促進される学生ボランティアの支援の在り方について、検討を行うことであった。そこで、改めてここまでの結果を踏まえて、当初の研究目的に対しての考察を行う。

第 1 項 矛盾を抱えたボランティア活動が大学生の自己形成に与える影響

第 2 章の結果の通り、ボランティアが抱えている矛盾点による影響が指摘されているが、自発性・社会性・無償性というボランティアの 3 つの原則とそれに関わる矛盾はどのような位置づけになるのだろうか。ここでは、ボランティアの孕む矛盾による自己形成の全体像について検討を行う。

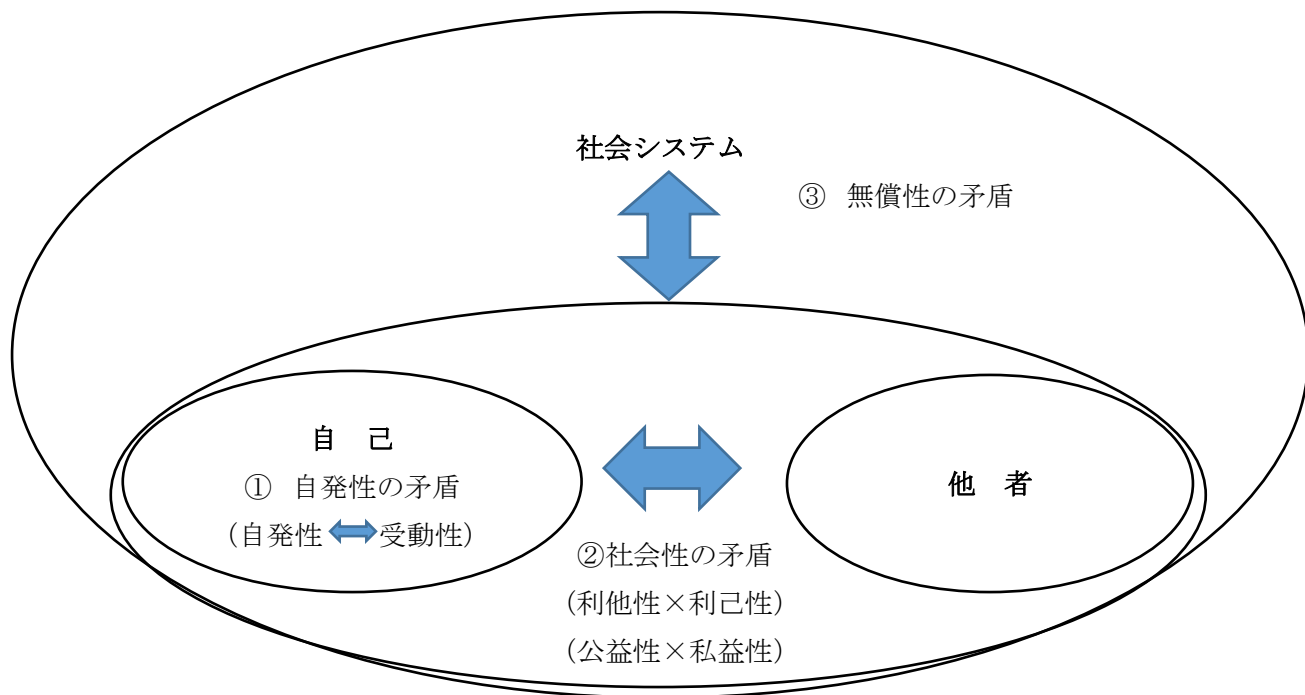
1. 3 つの矛盾点の関係性

まず、自発性・社会性・無償性がそれぞれ抱えている矛盾点は相互にどのような関係性になっているのかについて検討を行った。自発性についての矛盾点については、「自発性×受動性」が指摘されている。これは、自己の動機や意欲に関わる矛盾点であろう。ボランティアに関わる者全てが「自発的」に活動の関わっているわけではなく、他者の働きかけにより受動的に活動に関わる者もいることが確認された。また、「自発性」と言っても、その姿勢には、単に活動に参加するというレベルから、新たな活動を生み出すレベルなどがあり、多様なバリエーションが存在する。また、ボランティア活動における自発性とは、他者からの求めや社会的要請などの「受動性」との一致点において成立することを確認している。

次に社会性についての矛盾点については「社会性（利他性・公益性）×利己性・私益性」が指摘されているが、これは承認の問題にも見るように、自己と他者との関係性における矛盾点である。社会性が前提となっているボランティア活動において、むしろ自己成長や学びの場等「自分のため」にボランティアを行う大学生も多く存在している。利己性や利他性については、自発性の矛盾同様、自己の動機にも関わる概念であるが、共に単独では成立することはできず、他者との関わりにおいて成立する概念であることから、このような位置づけとした。

そして、無償性に関わる矛盾点については「資本主義社会との矛盾」として捉えることができると考えられるが、これは社会システムとの関わりにおける矛盾であると整理できる。

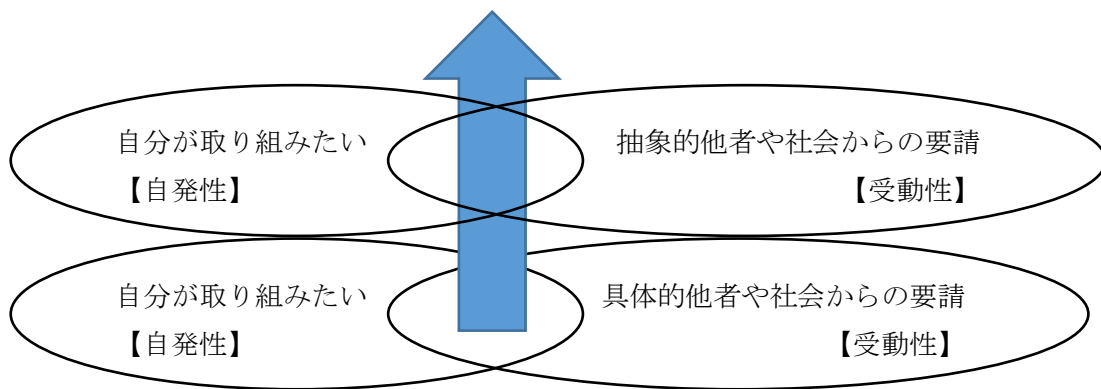
以上の事から、ボランティアにおける矛盾については、以下の図表 4-1 のような関係性があると捉えることが出来る。



図表 4-1 ボランティアの自発性・社会性・無償性における矛盾の関係図（筆者作成）

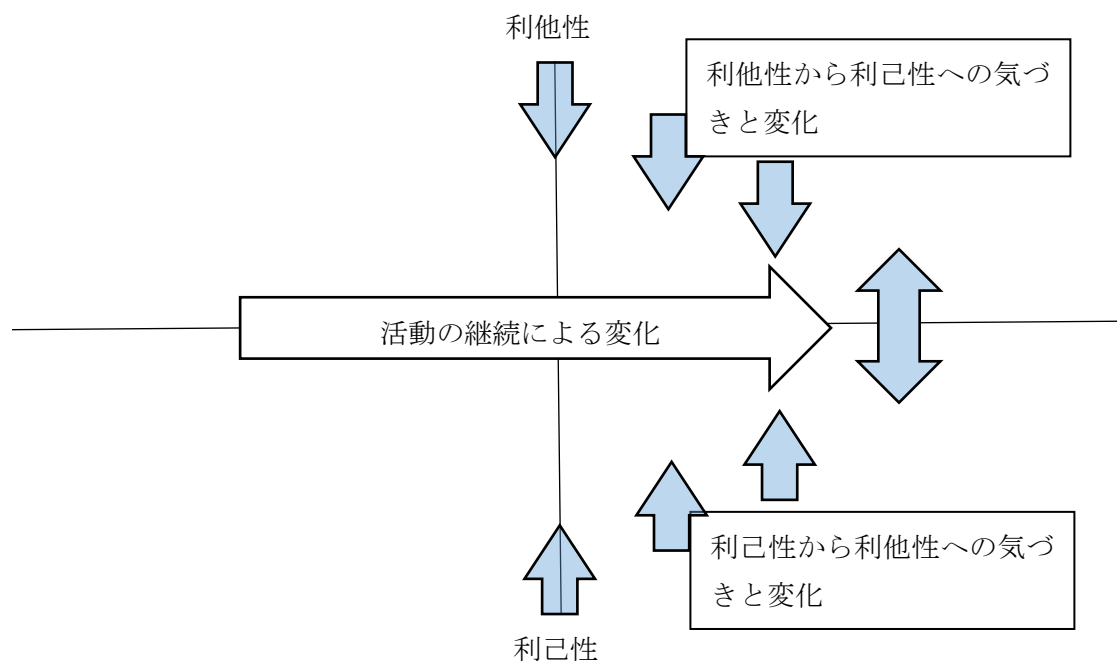
2. 矛盾するボランティアの自己形成への影響

上記の関係性を踏まえた上で、これらの矛盾についての自己形成に与える影響について考えていきたい。すでに見て来たように、自発性の矛盾である「自発性×受動性」は、基本的にボランティア活動を通して、受動的な学生がより自発的かつ積極的な行動へと変化していく直線的なプロセスであった。しかし、これは単に「自発性が高まった」ということではなく、ステージごとに「他者や社会からの要請や必要性」という受動的要素を本人が自発的に引き受けることによって成立していた。そのステージごとに、責任を受け、葛藤を背負いつつも、被害の実像を知る中でより強い使命感を持つことや、振り返りの機会による気づき、ロールモデルの発見、活動を通じたネガティブな過去の経験の意味づけの変化などを通して、より積極的な姿勢に変化していったと考えられる。以上のことを踏まえると、自発性による矛盾による自己形成のプロセスは図表 4-2 のように表すことができる。



図表 4-2 自発性の矛盾による自己形成への影響（筆者作成）

また、社会性の矛盾である「利他性×利己性」による影響とは、利他性から利己性への気づきと変化であり、かつ利己性から利他性への気づきと変化でもあった。両者は相互浸透しつつ接近するというプロセスをたどり、「情けは人のためならず」という合理的利他性への合流を果たすことになる。この社会性の矛盾による変化は、図表 4-3 のように表すことができると考えられる。



図表 4-3 社会性の矛盾による自己形成への影響（筆者作成）

3. 矛盾するボランティアによる自己形成の到達点

ここまで見て来たように、学生たちはボランティア活動を通して、その矛盾を抱え、向き合う中で自己形成が図られていることがわかる。第 1 章で触れた自己形成のあり方について、溝上は「青年期頃になると、人は他者の世界観に基づいて形成したさまざまな『私』を、今度は自分の世界観にもとづいて形成し直す。」¹⁷⁹としているが、自己形成には、「自己に気づく」段階と「意識的に自己を構築する」段階があると捉えることが出来る。この段階で考えると、自発性における矛盾による自己形成において

- ① 活動前のステージ
- ② ボランティア活動への参加（多様な参加動機）のステージ
- ③ 指示されたことを行う受け身の活動ステージ
- ④ 活動からの学びを糧に既存の活動を修正・運営するステージ
- ⑤ 自ら課題を発見しその解決に向けて活動を生み出すステージ
- ⑥ 自分自身の軸を定め、自分自身の人生を歩むステージ

という 6 つのステージを示した。①～⑤について活動を通して「自己に気づく」段階であると考えられるが、⑥については前述の「自己の世界観にもとづいて形成し直す」すなわち「意識的に自己を構築する」段階に移行していることがわかる。

社会性における矛盾による自己形成においても、承認を得る段階では承認による自信やモチベーションの向上につながっていたが、これらも「自己に気づく」段階といえる。その後、他者からの承認という段階から、他者への承認への転回が起きているが、このことを「意識的に自己を構築する」段階として捉えることができると考えられる。

また、第 1 章第 1 節第 3 項において「人格と主体形成」について触れているが、改めて本研究の調査を通して得られた知見に基づき考察を行いたい。前述したとおり鈴木は人格の完成を『主体形成』と理解したうえで、「主体形成とは、自己実現と相互承認の意識的編成である」¹⁸⁰と定義している。以上を踏まえた上で、本稿における知見と比較すると、ボランティア活動によって影響を受けた自己形成と鈴木の指摘する主体形成に関わる要素の関連性を見いだすことができる。

「自己実現」について、鈴木は「みずからの個性的な能力を発揮し、創造的活動を行い、その結果を持って自己確証をするということによって成立する」¹⁸¹としているが、ボランティア活動を通して自己実現が図られていくことは、第 1 章第 1 節第 3 項でも指摘した通りである。さらに、本稿の調査から見いだせる「自己実現」については、次のように捉えることができるだろう。自発性の矛盾（自発性×受動性）における自己形成において見いだされた④活動からの学びを糧に既存の活動を修正・運営するステージ⑤自ら課題を発見

¹⁷⁹溝上慎一、2008『自己形成の心理学―他者の森を駆け抜けて自己になる』世界思想社、p.159

¹⁸⁰鈴木敏正、2000『主体形成の教育学』お茶の水書房 p.212

¹⁸¹鈴木敏正、2009『教育学をひらく―自己解放から教育自治へ』青木書店、p.103-119

しその解決に向けて活動を生みだすステージ⑥自分自身の軸を定め、自分自身の人生を歩むステージについては、「個性的な能力を発揮し、創造的活動を行い、その結果を持って自己確証をする」との鈴木の自己実現の定義に対応するものと考えられる。つまり、ボランティア活動における自己形成として、自己実現の過程を見いだすことができる。

次に相互承認について検討を行いたい。第2章第2節第4項において社会性に関わる矛盾（利他性×利己性）の具体例として、ボランティア活動から得られる活動者自身への影響の一つである「承認」をキーワードに自己形成への影響について考察を行った結果、当初は、他者からの承認を得る立場だったものが、活動を経る中で、自分が他者を承認する立場へと、与えられる側（自己承認）から与える側（他者承認）への転回が確認されている。相互承認とは、他者から認められることと他者を認めることが相互に行われていることである。そのため、自己承認から他者承認への転回とは、相互承認として捉えることができると思われる。つまり、学生達はボランティア活動を通して、「人間関係の対立や矛盾を乗り越えて、かけがえのない個性を持った同じ人間として『相互承認』の関係を創造している」と捉え直すことができる。

以上のように、矛盾するボランティア活動による自己形成への影響として、「自己実現」と「相互承認」の過程を確認することができた。「主体形成とは、自己実現と相互承認の意識的編成である」とする鈴木らの定義に照らすと、ボランティア活動による自己形成の全体像とは主体形成の過程でもあると考えられる。

ここで改めて無償性の矛盾について考えたい。自発性の矛盾、社会性の矛盾については、全て学生時代のボランティア活動を通して顕在化し、自己形成への影響を与えている。しかし、無償性における矛盾が顕在化したのはボランティア活動をしていた学生時代ではなく、社会人になってからである。Gが社会人になってぶつかった社会との矛盾は、学生時代にGがボランティア活動を通して主体形成が図られたからこそ起きた出来事だと考えられないだろうか。

つまり、「ボランティアを通して、今まで殻に閉じこもっていた自分が前向きになって、そこから自分を曲げないで、自分を信じ抜く、かつこよくいうと、そういう力が身についてきたのかなと思いますね。」とのGの言葉に自己実現の過程を、また「大学に入ってからなんか素のありのままの自分でいてもちゃんと受け止めてくれる人がいるということが、出来たときから、相手のことも自分のことも信じられるようになって、そこから、うん、なんかこんな自分でも受け止めて一緒にいてくれる人がいるから、だから、まあこれで大丈夫なんだなって思えて、そこからだんだん変わったな〜と思った。」という言葉からは相互承認の過程を見ることが出来る。それは、主体形成の過程に他ならない。

第2章第2節第5項でもふれた通り、資本主義社会とは、自由競争により利益を追求していく社会とも言い換えられる。その側面が強くなるとGの勤め先のように、本来故人と親族やその関係者のための葬儀が、利益を得るための手段としてのみ捉えることになってしまう危険性がある。Gはボランティア活動を通して主体形成が図られたことで、社会に

出た際「今やっている仕事は、私は当家（＝ご遺族）のためにやってあげたい。という気持ちがあるんですけど、でもそれじゃあ会社は成り立たない。やっぱり売り上げだったり、お金がすごくきちゃうんですよ。どうしても。」とあるように、本来死者と家族等残された者のための葬儀が、単なるお金を得る手段になっているという社会の矛盾について認識をし、かつそのようなあり方について染まらずに違和感を持ち抵抗することができたのではないかと考えられる。もちろん、主体形成とは、絶えず過程の中に存在しているものであり完成形はない。G は、ボランティア活動によって形成された主体によって、次なる矛盾と葛藤を背負ったとも言える。

最後に、改めて図表 4-1「ボランティアの自発性・社会性・無償性における矛盾の関係図」を通して、3 つの矛盾の理論的展開について考察をしていきたい。①の自発性の矛盾とは自己の内で起きる矛盾であった。同時に、自己の外にある他者から要請や必要性という受動的要素を本人が自発的に引き受けることによって成立していたが、それは他者の存在を認識し受入れることで、「自発性×受動性」という矛盾を止揚することに繋がる。②社会性の矛盾特に「利他性×利己性」は、自己と他者との関係性における矛盾であった。ボランティア活動を通して、矛盾する両者は相互浸透しつつ接近するというプロセスをたどり、「情けは人のためならず」という合理的利他性への合流を果たすことになる。そのことは、自己と他者という 2 者間の関係の矛盾を社会との関係へと止揚することでもあると考えられる。本来は、社会性の矛盾の中においても、「利他性×利己性」の矛盾から、共同性、そして公益性と個人の関係性から社会的関係性へのプロセスがあると考えられるが、本論文ではその詳細なプロセスまで確認することはできなかったため、今後の課題としたい。自己内の矛盾である「自発性の矛盾」、他者との関係性の矛盾である「社会性の矛盾」そのプロセスを経て、③無償性の矛盾である「社会システムとの矛盾」に至ると考えられる。

ただし、以上の 3 段階のプロセスはあくまでも理論的な展開過程である。実際のボランティア活動の現場においては、自発性の矛盾、社会性の矛盾、無償性の矛盾は同時に起きることや逆の展開をたどることも充分考えられることに注意が必要である。

第 2 項 大学生の自己形成に寄与する支援のあり方

次に、大学生の自己形成に寄与する支援のあり方はどのようなものを検討する。

1. 矛盾したボランティアを受容する姿勢

第 3 章第 3 節第 2 項でも指摘したようにボランティアコーディネーターの基本的なスタンスとして、受容や非審判的態度が読み取れるが、矛盾したボランティアに関わる支援において、同 4 項にもある通り、その矛盾した双方の思いについても認め受け止めることが重要であると考えられる。具体的には、自発的に行動する学生だけでなく、受動的学生についても受け止め支援を行うことであるといえる。もちろん、「やりたくないのにやらさ

れる（強制性）」にまで至った場合には、支援することは困難であると考えられるが、友人に誘われたから、なんとなく等、受動的な態度であっても活動を通して変化していく可能性があると考えられる。また、利他的・公益的な動機での学生だけでなく、利己的・私益的な動機においても受け入れボランティア活動を通して、利己的な動機の充足とともに、利他性・公益性への気づきを促す関わりが求められる。無償性については、金銭的報酬が目的であるアルバイトとは明確な区分が必要となるが、交通費や活動経費などが支給される有償ボランティアについても、活動の趣旨などを踏まえたうえで認めることが重要であろう。これら、ボランティアの矛盾する概念を広く受け止めたうえで、学生自身がその矛盾と向き合えるように支援することで、幅広い学生たちの自己形成につなげることができると考えられる。

2. 学生一人一人にあったコーディネーション

1でも述べたようにボランティア活動に参加する学生の動機は多様である。また、動機だけではなく、これまでの経験値や社会的スキル等なども多様であり、高い志があったとしても、その学生の力に余る活動に取り組んだ場合、自己形成への影響は限定的になってしまうことが予想される。その他、コーディネーターは学生の「動機」「意欲」という思いの部分把握するだけではなく「実行力」や「工夫する力」の見極めが求められる。そのうえで、一人一人の学生の「思い」と「力」が最大限発揮されるような環境へのマッチングや提案を行うことが重要であろう。

また、単に学生の思いを達成するだけでは、自己満足に陥ってしまう危険性もあるため、絶えず「誰にとって意味のある活動なのか?」「相手にとってどのような効果があるのか?」など、自分たちの思いだけでなく、活動先の相手を想像しながら活動が展開できるような働きかけも重要であろう。

3. 学生を主体として扱う関わり方（自己決定の尊重）

コーディネーターの基本的なスタンスとして「自己決定の尊重」が挙げられるが、これはパウロ・フレイレが提示した「課題提起型教育」にもつながる教育者の姿勢であると考えられる。教育者が一方的に知識を伝達し続けるのではなく、対話を通じて教育する側と教育される側の垣根が取り除かれ、お互いが主体として尊重され、成長の経験につながっていく。そのような姿勢がコーディネーターには求められていると考えられる。もちろん、それは単に大学生の言うことをすべて鵜呑みにすることではない。コーディネーターの専門的な知識・技術によるアドバイスも行われるが、実施する・しない、参考にする・しないも含め、最終的な決定権は学生本人が持っていることを互いに了解していることが重要であると考えられる。そのような関わりを通して、学生自身が自分で考え、自分で決定し、自分で行動するという自発性の高まりにもつながっていくと考えられる。

4. 問いかけによる振り返りの機会

活動のみで振り返りが行われなかった場合、そこには気づきや学びが起きない可能性がある。また、活動を通しての学びを本人だけに委ねてしまうと、効果的な省察ができる学生とそうではない学生によって、その学びには大きな差が生まれてしまうことが考えられる。ボランティアコーディネーターの重要な役割として、活動が行われた際には、フォーマル、インフォーマルを問わず、その活動についての省察の機会を保障することが求められる。特にボランティアの矛盾から引き起こされる葛藤においては、放置せずに丁寧に省察を行うことで、矛盾する双方の視点への理解にとどまらず、矛盾の先にある新しい視点や価値に気づくことにもつながっていくと考えられる。それら「矛盾に出会い向き合うプロセス」そのものが学生ボランティアの自己形成過程であると捉えることも出来ると考えられる。

第5節 今後の研究課題と展望

第1項 本研究の限界

今後の研究課題と展望を考えるうえで、本研究の限界について指摘しておきたい。

第一に調査手法による限界である。第2章でも触れている通り、本研究では元学生10名と大学ボランティアコーディネーター2名という限られた事例による知見となるため、普遍性という点においては限界があると考えられる。今後さらに事例分析を蓄積することによって普遍性のある知見を導くことにつながると考えられる。

第二に調査対象者の限定性である。また、調査対象者は4年間活動を続けたメンバーであり、かつ役員や企画のリーダー等中心的な役割を果たした者という限定された範囲となっている。通常、ボランティア活動に関わる大学生の多くは、体験的に活動したのち、会に所属しながらも活動には時折参加する者、まったく参加しない者、途中で退会する者、等多様な関わり方がある。また、継続的に関わっていたとしても、自発性×受動性の際に指摘した③指示されたことを行う受け身の活動ステージに留まり続ける学生も存在する。ボランティアの孕む矛盾と上手く向き合えず、むしろそれが負担となり活動を終える学生もいると考えられる。それら多様な学生のプロセスを拾い上げることができれば、ボランティア活動を通じた大学生の自己形成のまた違った側面を見いだすことができると考えられる。

第三にボランティアの抱える矛盾の限定性が挙げられる。仮説段階においては、ボランティアの原則である自発性・社会性・無償性に対して、多様な矛盾を指摘したが、本稿において扱った矛盾点は、主として「自主性×受動性」と「利他性・公益性×利己性・私益性」の矛盾点となった。それ以外の矛盾点からどのような自己形成につながっていくのかについては、別の機会に探求をしていきたい。特に「自発性×支配性」の矛盾は、仮説においても指摘したとおりボランティアの性質は、時として国家政策に対して融和し、その過ちを自発的に助長しうる危うさを孕んでいる。政策的に学生ボランティアが推進されて

いる以上そのようなリスクが現在も付きまとうが、そのような矛盾点と学生ボランティアへの影響については、本稿において掘り下げる事ができなかったため、今後の課題とした。

第2項 今後の研究課題

本研究の結果や限界を踏まえての今後の研究課題については、第一にさらなる事例の蓄積が求められる。学生ボランティアの支援についても、他の大学やコーディネーターの事例の蓄積が必要であろう。また、質的研究によって求められた仮説を検証するためには、学生ボランティアの経験年数別・役職別の自己形成に与える影響についての量的調査も有効であろう。また、本研究の調査対象者は、大学卒業と1～5年と卒業後の年数が比較的短期のものとなっているが、今回のデータをもとにしつつ、卒業後10年後における学生時代のボランティア活動の影響について調べることで、また違う角度からの自己形成への影響が発見できるものと考えられる。

学生ボランティアの支援における研究においては、まだまだその蓄積が行われていない分野となっている。そのため、本稿での知見をベースにしつつ、学生との面談時のケース検討や他の実践事例を蓄積することで、学生ボランティア支援におけるボランティアコーディネーターの専門性について、より明確化していく必要があると考えている。

謝 辞

本論文は多くの方々のお支えと応援によって、完成することができました。ここに改めてお世話になって皆様への感謝を記させていただきます。

まず、主査をお引き受けくださった中村陽一先生（立教大学）には、博士前期課程と合わせ10年間ご指導をいただきました。論文へのご指導はもちろんのこと、研究・実践双方において多くの示唆をいただきましたこと、改めて感謝申し上げます。副査の大熊玄先生（立教大学）には、論文への的確なアドバイスをいただくだけでなく、研究と仕事の両立へのアドバイスもいただき、精神的なサポートをしていただきました。三浦建太郎先生（立教大学）には、博士論文最終年においてまだまだ未熟な草稿原稿を何度も読み込んでいただき、全体の整合性や矛盾点についてのご指摘とアドバイスをいただきました。心より感謝申し上げます。

本論文は私の実践に基づき、その関わりの中での問いを言語化する作業でもありました。そのために調査にご協力くださった元学生ボランティアの10名の皆様、また支援者の2名の皆様に改めて感謝申し上げます。皆様の言葉から、多くの気づきと学びをいただき、このような形でまとめることが出来ました。

さらに、本論文に取り組むきっかけを与えてくださった、牛津信忠先生（聖学院大学）、研究に取り組む姿勢を基礎からご指導してくださった河村美穂先生（埼玉大学）、論文執筆過程においていつも見守り相談に乗ってくださった若原幸範先生（聖学院大学）、執筆した論文についてアドバイスをくださった、大高研道先生、相川章子先生、芦澤弘子様、丸山阿子様、数井美由紀様、原一織様、松田慶光様、志塚昌紀様、西川正様に感謝申し上げます。その他にも、ご芳名は省かせていただきますが、お世話になったすべての方々に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

最後に、仕事と研究の両立の中、常に支えてくれた家族への感謝とともに本稿を閉じさせていただきます。

引用・参考文献

- Astin,A.W&Sax,L.J. , 1998 「 How Undergraduates Are Affected by Service Participation」 Journal of College Student Development39(3)
- Donald E,Gibson, 2004 「Role models in career development: New directions for theory and research」 Journal of Vocational Behav J or,65
- 赤澤清孝, 2017「大学ボランティアセンターの歴史と動向」『かながわ政策研究・大学連携ジャーナル NO,11』 政策研究・大学連携センター
- アクセルホネット著作・山本啓・直江清隆訳, 2003『承認をめぐる闘争ー社会的コンフリクトの道徳的文法ー』財団法人法政大学出版局
- 浅野英一, 2013「ソーシャル・キャピタルの観点から見た学生ボランティア活動による過疎地域の活性化～和歌山県すさみ町におけるケース・スタディ～」『摂南経済研究』第3巻, 摂南大学
- 阿部志郎, 2008『福祉の哲学 [改訂版]』誠信書房
- 渥美公秀, 2014『災害ボランティア 新しい社会へのグループ・ダイナミックス』弘文堂
- 荒井俊行, 2017「青年期のボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する要因」博士論文, 早稲田大学
- 新谷和代, 2016「地域でのボランティア活動を通じた青年期の発達についての事例検討ーある男子学生の『振り返りノート』の分析からー」『帝京大学心理学紀要第20巻』帝京大学文学部心理学科
- 家島明彦, 2006「理想・生き方に影響を与えた人物モデル」『京都大学大学院教育学研究科紀要52』京都大学
- 池田浩士, 2019『ボランティアとファシズムー自発性と社会貢献の近代史ー』人文書院
- 石井 祐理子, 2005「大学におけるボランティア活動推進の意義と課題--大学ボランティアセンターが目指すもの」『京都光華女子大学研究紀要(43)』京都光華女子大学
- 石野 由香里, 2009「学生の問題発見型参画を促すサポートのあり方--大学ボランティアセンターに集う者たちの創造的協働の実践経験から」『日本ボランティア学会学会誌』日本ボランティア学会
- 石野由香里, 2013「『学生ボランティア』の特異性が地域に対して有する潜在的な機能ーボランティアをする／される関係をズラす効果が地域場の場づくりへ与えた影響ー」『生活学論叢』第23巻, 日本生活学会
- 妹尾香織, 2008「若者におけるボランティア活動とその経験効果」『花園大学社会福祉学部研究紀要, 16』花園大学社会福祉学部
- 市川享子, 2011「大学ボランティアセンターの機能に関する考察：外国につながる子ども達を支援する学生VGの立ち上げ支援事例」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要17(0)』日本福祉教育・ボランティア学習学会

- 市川亨子, 2015「東日本大震災復興支援の実践から生まれた学生の学び」『ボランティア学研究 15』国際ボランティア学会
- 市川亨子, 2015「創造的リフレクションの生成過程に関する実証的研究ー震災復興過程における学生のリフレクション記録の分析を通してー」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 26(0)』日本福祉教育・ボランティア学習学会
- 市来百合子・大久保千恵, 2013「教育復興支援ボランティア学生の経験ーボランティア学生への心理的支援への考察ー」『教育実践開発研究センター研究紀要第 22 巻』奈良教育大学教育実践開発研究センター
- 伊藤亜紗編著, 2021「『うつわ』的利他ーケアの現場から」『「利他」とは何か』集英社新書
- 牛津信忠, 2008『社会福祉における相互的人格主義Ⅰ』久美株式会社
- 牛津信忠, 2008『社会福祉における相互的人格主義Ⅱ』久美株式会社
- 内海成治・入江幸男・水野義之編著, 1999「ボランティア学を学ぶ人のために」世界思想社
- Erikson. E.H, 1967「Dialogue with Erikson. Harper& Row, Publishers, Inc. (岡堂哲雄・中園正身訳 1981「エリクソンは語るーアイデンティティ心理学」新曜社)」
- Erikson. E.H, 1982「The life cycle completed. W. W. Norton & Company.」(村瀬孝雄・近藤邦夫訳 1989「ライフサイクル、その完結」みすず書房)
- NPO 法人ユースビジョン, 2019『大学ボランティアセンター情報ウェブ』
<https://www.daigaku-vc.info/>大学ボラセンリスト/ (参照日: 2021.5.31)
- NPO 法人ユースビジョン 大学ボランティアセンターリソースセンター, 「大学ボランティアセンター情報ウェブ」 <https://www.daigaku-vc.info/%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%83%9C%E3%83%A9%E3%82%BB%E3%83%B3%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88/> (2020 年 7 月 5 日)
- 及川千都子・桜井茂男, 2006「役割モデルと制御焦点が内発的動機づけに与える影響」『筑波大学心理学研究 (32)』筑波大学心理学系
- 太田肇, 2007『承認欲求ー認められたいをどう活かすかー』東洋経済新報社, p.112-117
- 太田美緒・前田樹海, 2009「文献に見るわが国の看護教育におけるロールモデルの概念」『長野県看護大学紀要 11』長野県看護大学紀要委員会
- 太田美帆, 2013「東日本大震災の復旧・復興支援における学生の役割」『玉川大学文学部紀要』第 54 号, 玉川大学
- 大阪ボランティア協会編, 2002『ボランティア活動研究』大阪ボランティア協会
- 大阪ボランティア協会ボランティアリズム研究所, 2011『ボランティアリズム研究』大阪ボランティア協会
- 大阪ボランティア協会編著早瀬昇他著, 2011『テキスト市民活動論ーボランティア・NPO の実践から学ぶー』大阪ボランティア協会

- 大石剛史, 2004「地域福祉の主体形成論に関する基礎的考察」『国際医療福祉大学紀要 9』国際医療福祉大学
- 岡村こず恵, 2011「市民活動における中間支援とは何か」『テキスト市民活動論』社会福祉法人大阪ボランティア協会
- 岡本栄一, 2003『大学とボランティア』内外学生センター
- 岡本栄一編著, 2006『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会
- 片岡華絵, 2015「要旨：大学における学生のボランティア活動支援に関する研究：大学ボランティアセンターを中心に」『龍谷大学大学院政策学研究 (4)』龍谷大学大学院政策学研究編集委員会
- 金子郁容, 1992『ボランティアもうひとつの情報社会』岩波書店
- 河井亨, 2012「ボランティア活動への参加によって学生の学習がどう異なるのか：全国大学生調査の分析から」『ボランティア学研究 12』国際ボランティア学会
- 河井亨, 2012「学生の学習と成長に対する授業外実践コミュニティへの参加とラーニング・ブリッジングの役割」『日本教育工学会論文誌 35(4)』日本教育工学会,
- 川田虎男・志塚昌紀, 2015「ボランティア活動が学生の自己肯定感に及ぼす影響：大学生ボランティアのヒアリング調査より」『聖学院大学総合研究所紀要 (61)』聖学院大学総合研究所
- 川田虎男, 2017「阪神・淡路大震災以降の学生ボランティア活動の教育的機能に関する研究動向と課題」『Social design review = 21 世紀社会デザイン研究学会学会誌 9』21 世紀社会デザイン研究学会
- 川田虎男, 2018「震災復興期における学生ボランティアの学びと役割：復興支援ボランティアスタディツアーの取り組みから」『聖学院大学論叢 30(2)』聖学院大学
- 川田虎男・河村美穂, 2020「『地域の人に出会うこと』が学習者に与える影響 ―ロールモデルと出会うことによる学びを中心に―」『日本福祉教育・ボランティア学習学会紀要研究紀要 Vol.35』日本福祉教育・ボランティア学習学会
- 河村美穂, 2007「学習者と教師による対話的評価：ライフストーリー法による福祉教育実践評価の試み」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報 12(0)』日本福祉教育・ボランティア学習学会
- 教育改革国民会議, 2000『教育改革国民会議報告―教育を変える 17 の提案』
- 黒沢幸子・日高潤子・張替裕子・田島佐登史, 2008「学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長―その様相とキャリア教育の視点からの考察―」『目白大学心理研究第四号』目白大学
- 小林功英編著, 2014「災害ボランティア経験が持つ大学生への教育効果」『高等教育研究叢書』126 巻, 広島大学高等教育研究開発センター
- 近藤良樹, 1998「ボランティアと個人の自発性」『HABITUS (1998 年 5 月)』西日本応用倫理学研究会,

- 近藤良樹, 2000「ボランティアの社会的意味論—現代の菩薩行の功罪—」『HABITUS 通巻 8 号』西日本応用倫理学会
- 佐々木正道編著, 2003『大学生とボランティアに関する実証的研究』ミネルヴァ書房
- 佐藤雄一郎, 2016「P.フレイレの「解放」の教育思想と「課題提起教育」の今日的意義: —「対話」と「意識化」を媒介する「生成語」 / 「生成テーマ」に着目して—」『教育方法学研究 41(0)』日本教育方法学会
- 佐伯胖, 1993「訳者のあとがき—LPP と教育の間で」ジーン・レイブ, エティエンヌ・ウェンガー著, 佐伯訳『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書
- 財団法人経済広報センター, 2011「ボランティア活動に関する意識・実態調査報告書」
- 桜井政成・津止正敏, 2009『ボランティア教育の新地平—サービスラーニングの原理と実践—』ミネルヴァ書房
- ジャック・アタリ, 2017『2030 年ジャック・アタリの未来予測—不確実な世の中をサバイブせよ!』プレジデント社
- ジョン・デューイ、市村尚久訳, 1938『経験と教育』講談社学術文庫
- 新谷和代, 2016『地域でのボランティア活動を通じた青年期の発達についての事例検討—ある男子学生の「振り返りノート」の分析から—』『帝京大学心理学紀要第 20 巻』帝京大学文学部心理学科
- 杉浦健, 2001「自己評価を規定する自己とそれに関連する大学生的文脈」溝上慎一編『大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—』ナカニシヤ出版
- 杉岡秀紀・久保友美, 2007, 「関西を中心とした大学ボランティアセンターの現状・課題・展望—サービス・ラーニングという新潮流を踏まえて—」『社会科学 79 号』同志社大学
- 鈴木勇・菅磨志保・渥美公秀, 2003「日本における災害ボランティアの動向: 阪神・淡路大震災を契機として」『実験社会心理学研究 42(2)』日本グループ・ダイナミックス学会
- 鈴木敏正, 2000『主体形成の教育学』お茶の水書房
- 鈴木敏正, 2009『教育学をひらく—自己解放から教育自治へ』青木書店
- 諏訪晃一、渥美公秀、関嘉寛, 2005「学生による災害時のボランティア活動と状況的関心—新潟中越地震における fromHUS の活動から—」『ボランティア学研究』第 6 巻, 国際ボランティア学会
- 成玖美, 2011「フレイレ教育論と生涯学習研究: 教育と政治性のあいだにある争点」『名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究 (14)』名古屋市立大学
- 全国社会福祉協議会, 2009「全国ボランティア活動実態調査」
- 総務省統計局, 2017「平成 28 年社会生活基本調査—生活行動に関する結果—結果の概要」総務省
- 竹田純子, 2010「青少年は、共に発見し成長するパートナー」『ボランティアコーディネ

- ーション力 2 級検定サブテキスト』日本ボランティアコーディネーター協会
- 田中雅文, 2011『ボランティア活動とおとなの学びー自己と社会の循環的發展ー』学文社
- 茶屋道拓哉・筒井睦, 2012「東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義」
『九州看護福祉大学紀要』第 12 巻 1 号, 九州看護福祉大学
- 中央社会福祉審議会地域福祉専門分科会意見具申, 1993「ボランティア活動の中長期的な
振興方策について」
- 中央法規出版編集部編著, 2001『新版社会福祉用語辞典』中央法規出版
- 土志田祐子, 1991「ボランティアに関する文献収録・解題ボランティア活動の本質的性格
(要約)」
- 筒井のり子, 1990「ボランティア・テキストシリーズ⑦ボランティアコーディネーター
その理論と実際」大阪ボランティア協会
- 筒井のり子, 2015「ボランティアコーディネーションの理解」『ボランティアコーディネ
ーション力第 2 版』日本ボランティアコーディネーター協会
- 東京ボランティア市民活動センター, 「ボラ市民ウェブボランティア活動、4 つの原則」
<https://www.tvac.or.jp/shiru/hajime/gensoku.html> (参照日 2018.9.10)
- 内閣府, 2017「平成 28 年度市民の社会貢献に関する実態調査報告書」内閣府
- 中田豊一, 2000『ボランティア未来論ー私が気づけば社会が変わる』参加型開発研究所
- 中原濤佳, 2016「パウロ・フレイレの〈ワークショップ〉批判: ファシリテーターは教育
者か」『現代社会文化研究 (63)』新潟大学大学院現代社会文化研究科
- 中山淳雄, 2007『ボランティア社会の誕生〜欺瞞を感じるからくり〜』三重大学出版会
- 中野敏男, 1999「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」『現代思想』27 巻 5 号, 青土社
- 長沼豊, 1998『ボランティア学習の概念と学習過程』近代文芸社
- 長沼豊, 2003『市民教育とは何か』ひつじ書房
- 長沼豊, 2006「高等教育におけるボランティア学習の実態に関する考察ーボランティア関
連科目の分析を通してー」『ボランティア学研究』vol.7, 国際ボランティア学会
- 中村陽一・川崎賢子編, 2000『アンペイド・ワークとは何か』藤原書店
- 中森弘樹, 2017『失踪の社会学ー親密性と責任をめぐる試論ー』慶應大学出版会
- 西川正, 2020「ボランティアコーディネートのチカラワザを磨く!」『ボランティア情報
No.518』全国社会福祉協議会／全国ボランティア・市民活動振興センター
- 西尾雄志・日下渉・山口健一, 2015『変容する親密圏／公共圏 承認欲望の社会変革ーワ
ークキャンプに見る若者の連帯技法ー』京都大学学術出版会
- 仁平典宏, 2011, 『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会
- 日本ボランティア学習協会, 2000『教育改革国民会議中間報告における「奉仕活動」提言
への意見書』
- 野口裕二, 2005『ナラティヴの臨床社会学』勁草書房
- 野口裕二編著, 2009『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房

- パウロ・フレイレ著、三砂ちづる訳、2018『被抑圧者の教育学 50 周年記念版』株式会社
亜紀書房
- 早瀬昇、1995「ボランティア推進機関の動向ー高まるコーディネートの役割」日本青年奉
仕協会編『ボランティア白書 1995 年版』日本青年奉仕協会
- 早瀬昇編著、1997『基礎から学ぶボランティアの理論と実際』中央法規出版、
- 原安利、2011「パウロ・フレイレの教育論における「対話」に関する一考察」『教育実践
学論集 (12)』兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科
- 原田隆司、2010『ポスト・ボランティア論ー日常のはざまの人間関係』ミネルヴァ書房
- 柴田憲治・原田正樹・名賀亨編著、2010『ボランティア論 「広がり」から「深まり」へ』
(株) みらい
- 原田正樹、2012「福祉教育・ボランティア学習における創造的リフレクションの開発」
『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 20(0)』日本福祉教育・ボランティア
学習学会
- 藤野寛、2016『「承認」の哲学 他者に認められるとはどういうことか』青土社
- ボランティア白書 2005 編集委員会、2005『ボランティア白書 2005 ボランティアのシチ
ズンシップ再考』社団法人日本青年奉仕協会
- 松本すみ子、2012『住民の福祉活動参加と主体形成プロセス：精神保健福祉ボランティア
に焦点化した質的分析』大学図書出版
- 間野百子、2020「課題を抱える少年への援助の継続によるボランティアの意識の変容と学
びーBBS (Big Brothers and Sisters) 会「ともだち活動」援助者の当事者性の深ま
りに着目してー」博士論文、白梅学園大学
- 三谷はるよ、2013「市民参加は学習の帰結か?：ーボランティア行動の社会化プロセスー」
『ノンプロフィット・レビュー 13(2)』日本 NPO 学会
- 溝上慎一編著、2001「自己評価を規定する自己とそれに関連する大学生的文脈」『大学生
の自己と生き方ー大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学ー』ナカニシヤ出版
- 溝上慎一、2008「自己形成の心理学ー他者の森を駆け抜けて自己になる」世界思想社
- 溝上慎一、2010『現代青年期の心理学ー適応から自己形成の時代へー』有斐閣選書
- 村上徹也、2012「サービスマーケティングにおけるリフレクション研究の到達点」『日本福祉
教育・ボランティア学習学会研究紀要 20(0)』日本福祉教育・ボランティア学習学会
- 村上徹也、2018、「目立つ国策的な動員型「ボランティア」促進の危うさ」、NPO CROSS
<http://npocross.net/590/> (参照日：2021.5.31)
- 文部科学省、2003「大学と地域の連携によるまちづくりの在り方に関する調査研究」
- 山口洋典、2009、「自分探しの時代に承認欲求を満たす若者ボランティア活動ー先駆的活
動における社会参加と社会変革の相即を図る『半返し縫い』モデルの提案ー」『ボラ
ンティア学研究第 9 巻』国際ボランティア学会
- 山竹伸二、2011『「認められたい」の正体承認不安の時代』講談社現代新書

- 山田剛史, 2003「青年期の自己形成に関する研究の概観と展望ー現象（リアリティ）理解のためのトライアンギュレーションー」『人間科学研究, 11 (1)』神戸大学
- 山本浩史, 2010「大学ボランティアセンターの教育的支援における課題について」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 16(0)』日本福祉教育・ボランティア学習学会
- 李永淑, 2015『小児がん病棟と学生ボランティアー関わり合いの人間科学ー』晃洋書房
- 若原幸範, 2007「地域づくり主体の形成過程ー内発的發展論の再定義を見通してー」『日本社会教育学会紀要 No,43』日本社会教育学会